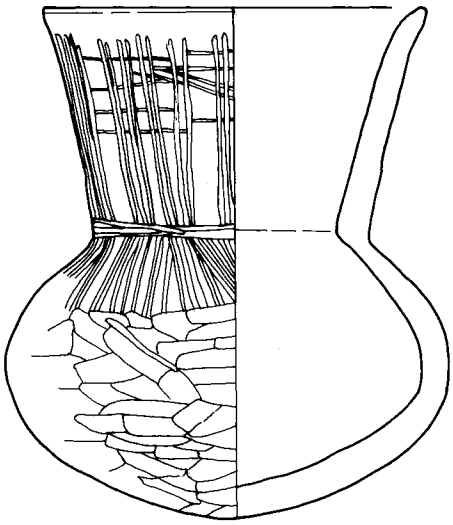
大屋敷遺跡 I

土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査概報

1993

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

大屋敷遺跡 I

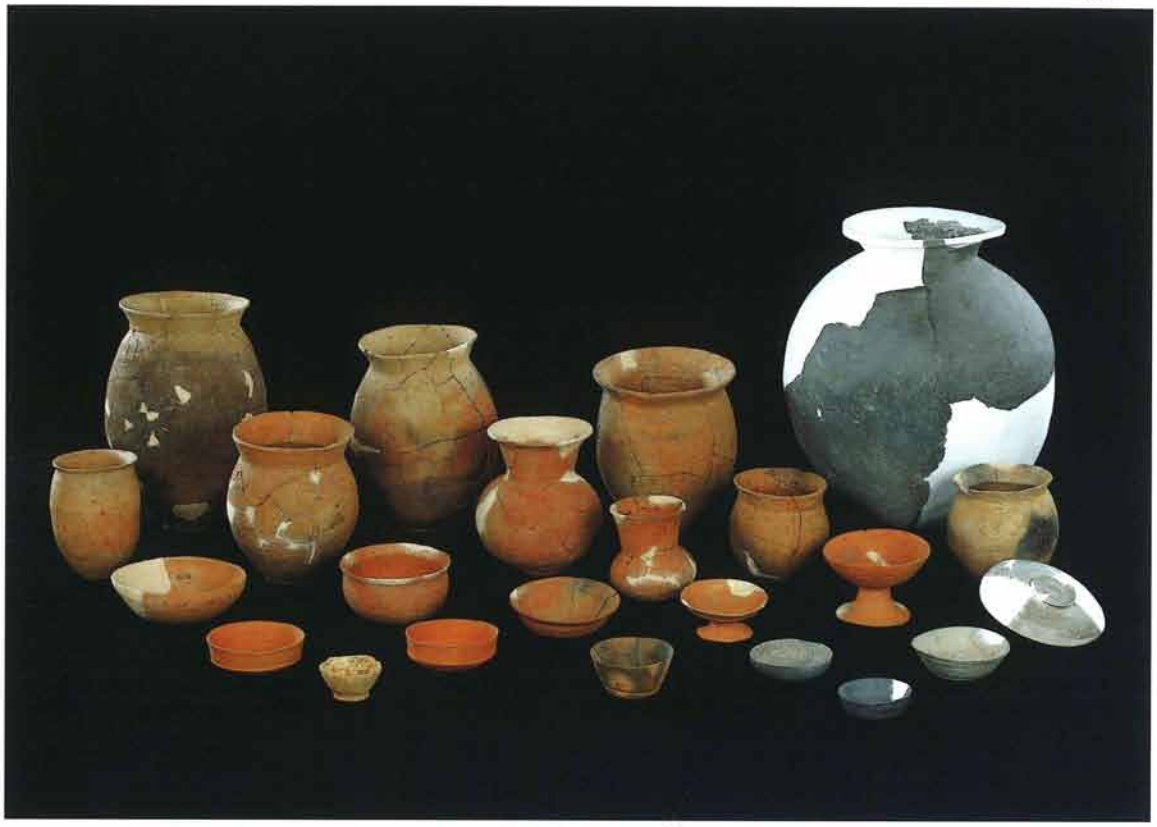


H－12号住居址出　坩

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1．榛名山と大屋敷遺跡

2．大屋敷遺跡全景



3．大屋敷遺跡出土土器

4．H－12号住居址出土土器

序

群馬県前橋市は、関東平野の北西端に位置し水と緑に恵まれた人口28万余を擁する県都であります。市の歴史は大変古く、初めてこの地に人々が住み始めたのは、今から2万年以上も前の旧石器時代であるということが分かっております。前橋の地は、永い歴史の中で古代においては「東国の奈良」、近世においては「関東の華」と称され、さらに江戸時代末期から明治・大正時代にかけては日本の生糸貿易を支える養蚕製糸業の中心地として発展した歴史の薫り高い街であります。

特に、大屋敷遺跡が所在する総社地区は、古代上野国の中心地域であり、国指定史跡宝塔山古墳・蛇穴山古墳を始めとする歴史遺産の豊富な地区として知られております。

近年、都市基盤整備の必要性が高まり、この地区にも土地区画整理が実施されることになりました。歴史的に重要な地区となっているため、前橋市教育委員会で、埋蔵文化財確認調査依頼に基づき調査を実施しましたところ、平安時代の住居址が確認されました。そこで、遺跡の取り扱いについて協議しましたが、現状での保存は難しいということで、平成4年度より道路部分を中心に発掘調査を実施することとなりました。

本年度の調査は、土地区画整理予定地南西部の限られた範囲1165㎡でありましたが、住居址27軒・溝址2条・井戸址1基等が検出され、地域史を解明する貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、このたびの調査では前橋市大屋敷地区土地区画整理組合の方々、前橋市都市計画課の担当者及び隣接住民の方々、さらに発掘調査・整理作業に従事していただきました作業員の方々の深い御理解と御協力を得ましたことに心より御礼申し上げます。

本報告書が総社地区の歴史を解明していく上で、少しでも参考になれば幸いに存じます。

平成5年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　有坂　淳

例　　言

1．本報告書は、前橋市大屋敷地区土地区画整理事業に伴う大屋敷遺跡発掘調査報告書である。
2．遺跡は、群馬県前橋市総社町大字総社1937番地ほかに所在する。
3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　有坂　淳が前橋市大屋敷地区土地区画整理組合　代表者　大山栄一と委託契約を締結し実施した。
調査担当および調査期間は以下の通りである。
発掘・整理担当者　　狩野吉弘・大山知久（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）
発掘調査期間　　平成4年8月3日～平成4年11月30日
整理・報告書作成期間　　平成4年12月2日～平成5年3月25日
4．本書の原稿執筆・編集は狩野・大山が行った。整理作業をはじめ図版作成には、石原義夫・岩木賢一・岩木　操・大田一郎・岸フクエ・住谷文彦・渡木秋子・富沢清八・湯浅道子・湯浅政夫・湯浅たま江・湯浅有紀の協力があった。
5．下記の専門的分野については、次の機関ならびに方々のお世話になった。（敬称略）
地質・地形調査：有限会社古環境研究所　　石器・石材鑑定：飯島静男
瓦鑑定：木津博明（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）
6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。
2．挿図に建設省国土地理院発行の1/20万地形図（長野・宇都宮）と1/2.5万地形図（前橋）を使用した。
3．本遺跡の略称は4A60である。
4．各遺構の略称は次のとおりである。
H…古墳・平安時代の住居址、B…掘立柱建物址、I…井戸址
D…土坑、W…溝址、P…柱穴、O…落込み
5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。
遺構　　住居址・土坑・井戸…1/60、溝…1/120、竈…1/30、全体図…1/200・1/400
遺物　　土器・石器…1/3・1/4、瓦…1/3・1/4、石製品…1/3・2/3・1/6
6．スクリーントーンの使用は次のとおりである。
遺構平面図　　焼土…点、灰…斑
遺構断面図　　火山灰…濃点、構築面…斜線
遺物実測図　　黒色処理…網、炭化物（スス付着など）…斑
須恵器断面…黒塗り
土器使用痕…細斜線、石器使用痕…縦線

―― 目　　次 ――

序 …… i

Ⅰ 調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ 遺跡の位置と環境
　1 遺跡の立地 …… 1
　2 歴史的環境 …… 3

Ⅲ 調査の経過
　1 調査方針 …… 5
　2 調査経過 …… 6

Ⅳ 層序 …… 7

Ⅴ 遺構と遺物
　1 住居址 …… 8
　2 掘立柱建物址 …… 18
　3 溝址 …… 18
　4 井戸址 …… 19
　5 落込み …… 19
　6 石敷遺構 …… 19
　7 土坑 …… 19
　8 グリッド出土の遺物 …… 20

Ⅵ まとめ …… 22

付編
　大屋敷遺跡の地質調査報告書（有限会社 古環境研究所） …… 26

図　　版

口 絵　1　榛名山と大屋敷遺跡
　　3　大屋敷遺跡出土土器

口 絵　2　大屋敷遺跡全景
　　4　H－12号住居址出土土器

PL. 1　A・C区全景
　　2　B区全景、深堀り
　　3　住居址（H-2, 4, 6, 8, 10）
　　4　住居址（H-11, 12）
　　5　住居址（H-14, 16, 17, 18, 22, 27）
　　6　住居址（H-23, 24, 25, 26）他
　　7　遺　構（溝, 土坑, 他）
　　8　縄文土器

PL. 9　古墳～平安時代の遺物
　　10　古墳時代および奈良・平安時代の遺物
　　11　古墳～平安時代の遺物
　　12　古墳～平安時代の遺物
　　13　古墳～平安時代の遺物
　　14　石器・石製品
　　15　石器・石製品
　　16　瓦　類

挿　　図

頁

Fig. 1　大屋敷遺跡の位置 …… vi
　　2　位置図と周辺遺跡図 …… 2
　　3　周　辺　図 …… 4
　　4　グリッド設定図 …… 5
　　5　調査経過図 …… 6
　　6　標準土層図 …… 7
　　7　「三ッ寺型高坏」の比較 …… 23
　　8　遺跡・遺構全体図 …… 33・34
　　9　H－1～3号住居址 …… 35
　　10　H－4～6号住居址 …… 36
　　11　H－7・8号住居址 …… 37
　　12　H－9・10号住居址 …… 38
　　13　H－11号住居址 …… 39
　　14　H－12号住居址 …… 40
　　15　H－12～14号住居址 …… 41
　　16　H－15・16号住居址 …… 42
　　17　H－17・19号住居址 …… 43
　　18　H－18号住居址 …… 44
　　19　H－20・21・23・25号住居址 …… 45
　　20　H－22号住居址 …… 46
　　21　H－24号住居址 …… 47

頁

Fig. 22　H－26号住居址 …… 48
　　23　H－27号住居址 …… 49
　　24　掘立柱建物址他 …… 50
　　25　W－1・3号溝址 …… 51
　　26　D－1～7号土坑 …… 52
　　27　古墳～平安時代の土器（1）…… 53
　　28　古墳～平安時代の土器（2）…… 54
　　29　古墳～平安時代の土器（3）…… 55
　　30　古墳～平安時代の土器（4）…… 56
　　31　古墳～平安時代の土器（5）…… 57
　　32　古墳～平安時代の土器（6）…… 58
　　33　古墳～平安時代の土器（7）…… 59
　　34　古墳～平安時代の土器（8）…… 60
　　35　古墳～平安時代の土器（9）…… 61
　　36　古墳～平安時代の土器（10）…… 62
　　37　瓦　類（1）…… 63
　　38　瓦　類（2）…… 64
　　39　縄文土器（1）…… 65
　　40　縄文土器（2）…… 66
　　41　石器・石製品（1）…… 67
　　42　石器・石製品（2）…… 68

表

頁

Tab. 1　包含層出土の縄文土器一覧 …… 21

2　縄文時代石器石材一覧 …… 21

3　古墳～平安時代土器観察表 …… 28

4　瓦類観察表 …… 30

5　縄文土器観察表 …… 31

6　石器・石製品観察表 …… 32

大屋敷遺跡の位置（丸印）

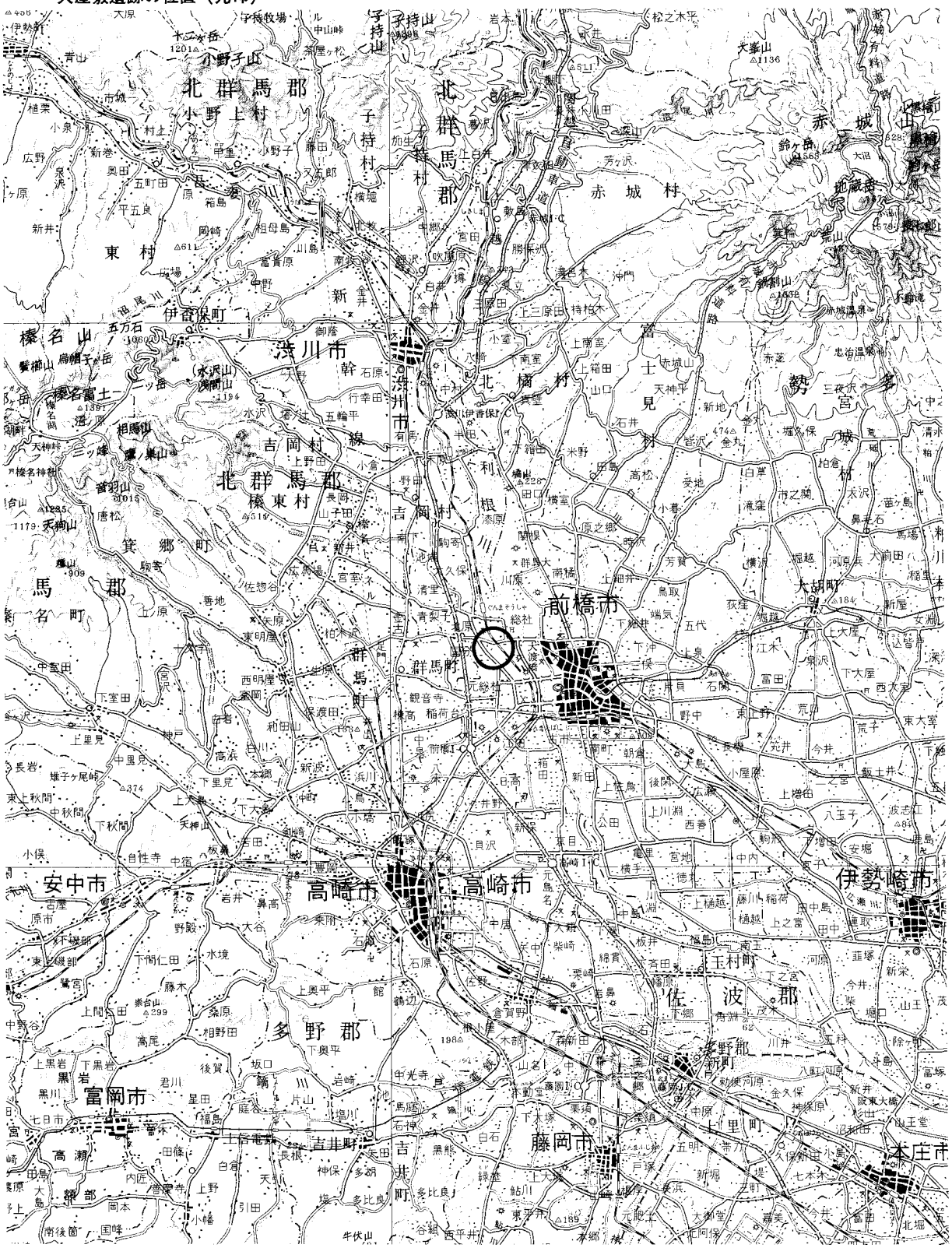


Fig. 1　大屋敷遺跡の位置

Ⅰ　調査に至る経緯

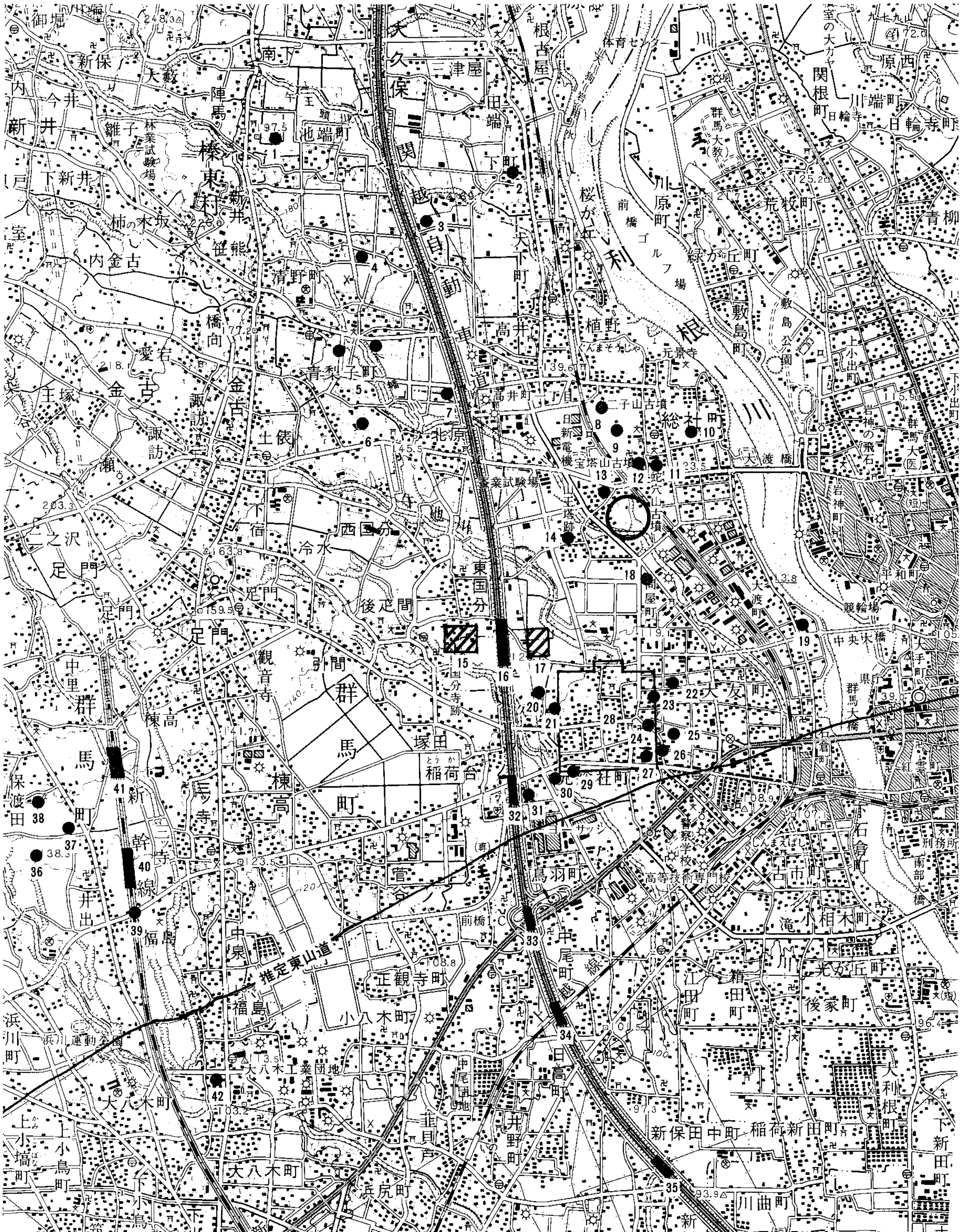
本発掘調査に関しては、前橋市教育委員会が平成３年10月に前橋市開発関係各課に平成４年度開発計画の打診を行ったところ、都市計画課より総社町大屋敷地区を対象とした土地区画整理事業実施の回答があり、同年11月に埋蔵文化財の取り扱いについて事前に試掘調査が必要であるむね通知を送り協議を行った。その後、平成４年２月18日、都市計画課より平成４年度事業実施地区に係わる試掘調査の依頼が提出され、同年３月４日、前橋市教育委員会による試掘調査の結果、平安時代の住居址３軒が良好な形で検出されたため、開発事業の実施に際しては、これに先立って、埋蔵文化財記録保存のための発掘調査を実施することが前橋市都市計画課との間で確認された。同年７月17日、大屋敷地区の土地区画整理を目的とした前橋市大屋敷地区土地区画整理組合（代表者　大山栄一）が正式発足し、当初の確認事項に基づき埋蔵文化財の発掘調査を実施することが決定した。その後の手続きは前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団に移管され、７月27日、具体的な開発計画に基づき、５年間にわたる発掘調査に関する覚書を締結し、７月29日には本年度の発掘調査に関する委託契約を組合との間で締結した。そして８月３日、現地での発掘調査を開始するに至った。本年度の発掘調査面積は1,165㎡、遺跡名称の『大屋敷』は現地の小字名『大屋敷村東』から命名したものである。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺 跡 の 立 地

大屋敷遺跡は前橋市街地（県庁付近）から利根川を隔てて、北西約３㎞の地点に所在する。遺跡地の地番は前橋市総社町総社1937番地ほかである。遺跡地の周囲は主要幹線道が縦横に走っている。北側100ｍ付近には前橋・箕郷線が東西に走り、西側は市道大友西通線（通称、産業道路）が、また約300ｍ程東にはJR上越線が南北に走っている。そして、これらの主要幹線に沿って市街化が進み、工場や住宅街が遺跡地を取り囲むように立ち並んでいる。遺跡地の立地は榛名山東南麓に広がる相馬ケ原扇状地の扇頂部より流下する河川群のひとつ、八幡川左岸域の標高約123ｍの微高地上にある。位置的にはほぼ、相馬ケ原扇状地面と前橋台地面の境界付近を占地する。

遺跡地の南側には榛東村に源を発する八幡川が南東方向に流れ、東側には江戸時代初期、総社藩主秋元長朝により開削された天狗岩用水が南流し、両者は遺跡地の南東脇で合流し滝川と名前を変えた後、利根川と平行する形でさらに流下して行く。遺跡地の両川と接する部分は比高５～６ｍほどの段丘崖を呈し、遺跡地を含む段丘上は高燥化した台地が広がり、主に畑作地として利用されている。



1．清里・陣場遺跡群　2．中島遺跡　3．長久保遺跡　4．清里・庚申塚遺跡　5．清里南部遺跡群　6．熊野谷遺跡　7．下東西遺跡　8．総社二子山古墳　9．愛宕山古墳　10．遠見山古墳　11．蛇穴山古墳　12．宝塔山古墳　13．村東遺跡　14．山王廃寺跡　15．上野国分僧寺跡　16．国分僧寺・尼寺中間地域遺跡　17．上野国分尼寺跡　18．産業道路西遺跡　19．王山古墳　20．小見遺跡　21．草作遺跡　22．閑泉樋遺跡　23．閑泉樋南遺跡　24．寺田遺跡　25．大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡　26．元総社明神遺跡Ⅴ　27．元総社小学校校庭遺跡　28．推定上野国府　29．天神遺跡　30．染谷川遺跡　31．弥勒山遺跡　32．鳥羽遺跡　33．中尾遺跡　34．日高遺跡　35．神保遺跡　36．二子山古墳　37．八幡塚古墳　38．薬師塚古墳　39．三ツ寺Ⅰ遺跡　40．三ツ寺Ⅱ遺跡　41．三ツ寺Ⅲ遺跡　42．雨壷遺跡

Fig．2　位置図と周辺遺跡図

2　歴史的環境

今回の調査によって、検出された主な遺構は古墳時代から中世にかけての遺構であるが、調査区の出土遺物のなかには縄文時代中期、加曽利E式の土器片も検出されているので、ここでは本遺跡地周辺の歴史的環境を縄文時代から概観してみたい。縄文時代の代表的な遺跡としては国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、産業道路西遺跡があげられ、縄文中期・後期の遺構が集落的な規模で検出され、当該地域の縄文文化を考えるうえで重要な資料となった。また熊野谷遺跡からは中期加曽利E式土器を伴う住居址群のほか、遺物では早期の押型文土器や沈線文土器が検出され、当地域における初源事例を更新した。そのほかの遺跡としては、下東西遺跡、清里南部遺跡群、清里・陣場遺跡群、中島遺跡、長久保遺跡、雨壺遺跡などがあげられ、時期的には前期から後期初頭といった範囲でおさえられる。

弥生時代の周辺遺跡は、集落・住居主体の遺跡と水田址関係の遺跡とに大別され、前者は八幡川、牛池川、染谷川流域などの高燥化した台地上に立地し、後者は、さらに下った平野部の後背湿地上に集中している。弥生時代中期後半の環濠集落である清里・庚申塚遺跡、後期の住居が検出された国分僧寺・尼寺中間地域遺跡などは前者であり、日高遺跡、新保遺跡に代表されるAs－C軽石（浅間山起源：４世紀中頃）下の水田址などは後者である。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を現すのは、６世紀前半代である。利根川右岸段丘上に、川原石を用いた積石塚である王山古墳が造られる。その後、本遺跡の北約２㎞には、総社古墳群を構成する古墳が連綿と築かれる。まず、国指定史跡で前方部と後円部に石室を有する総社二子山古墳、巨石使用の横穴式石室をもつ愛宕山古墳、主軸70ｍを測る遠見山古墳、また県内最終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳と蛇穴山古墳などが挙げられる。宝塔山古墳の南西約500ｍに所在する山王廃寺にみる石造物群は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられている。共通する技法から時代決定の根拠とされ、白鳳期の建立と考えられる山王廃寺を中心にして、総社・元総社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら花開いた様子が窺える。

奈良・平安時代に至ると、国府、国分二寺等の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上野の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。国府周辺遺跡では、閑泉樋遺跡、閑泉樋南遺跡、小見遺跡、草作遺跡、大友屋敷遺跡、寺田遺跡、元総社小学校校庭遺跡、天神遺跡、染谷川遺跡、弥勒山遺跡等がある。また国分僧寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降毎年発掘調査が進められ、各種遺構の礎石、築地、堀などが確認されている。国分寺周辺では、この数年関越自動車道建設に伴う発掘調査が進められて、道筋にあたる中尾遺跡、鳥羽遺跡、国分寺中間地域遺跡等からは、奈良・平安時代の住居址が大量に発掘されている。このことからも、奈良時代から平安時代にかけて当地では爆発的に集落の拡大した様子が窺われる。その後、中世には長尾氏により国府の掘割を利用し蒼海城が築かれる（1429）。

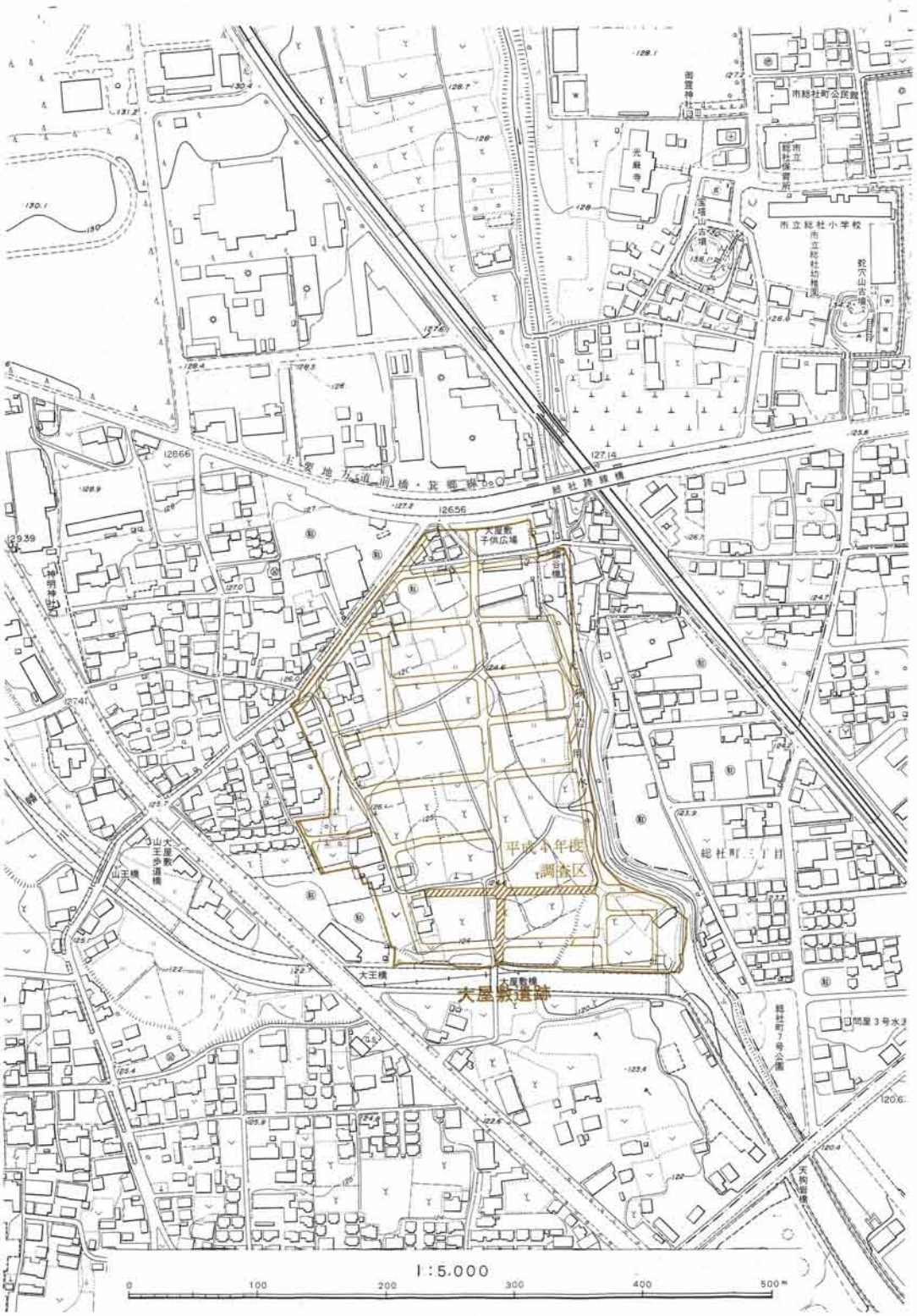


Fig. 3　大屋敷遺跡周辺図

Ⅲ 調査の経過

1 調査方針

委託された調査箇所は幅６ｍの計画道路部分1,165㎡である。調査範囲の形状から全体をＡ区、Ｂ区、Ｃ区の３調査区に区分した。調査実施に際しては、まず５年間の発掘調査範囲の全域をカバーする４ｍグリッドを想定し、このグリッドを最小単位とした。各グリッドの呼称方法は南北方向をＹ軸とし、北から南へＹ１、Ｙ２、Ｙ３…、東西方向をＸ軸とし西から東へＸ１、Ｘ２、Ｘ３…、で表し、それぞれ北西の交点をグリッド名とした。その他、調査実施段階での方針は以下のとおりである。

1．土層観察は遺構中央部で交差するセクションベルトを設けて行う。

2．10cm四方以上の遺物は縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドット標記した平面図を作製し、取り上げに際しては遺物台帳に諸属性を記録する。

3．竈は原則として縮尺1/10で図化し、遺構平面図は原則として縮尺1/20にて実施する。

なお、測量の基準点はＸ50、Ｙ77グリッドで公共座標は第Ⅸ系（Ｘ＝＋44,632ｍ、Ｙ＝－71,160ｍ）である。

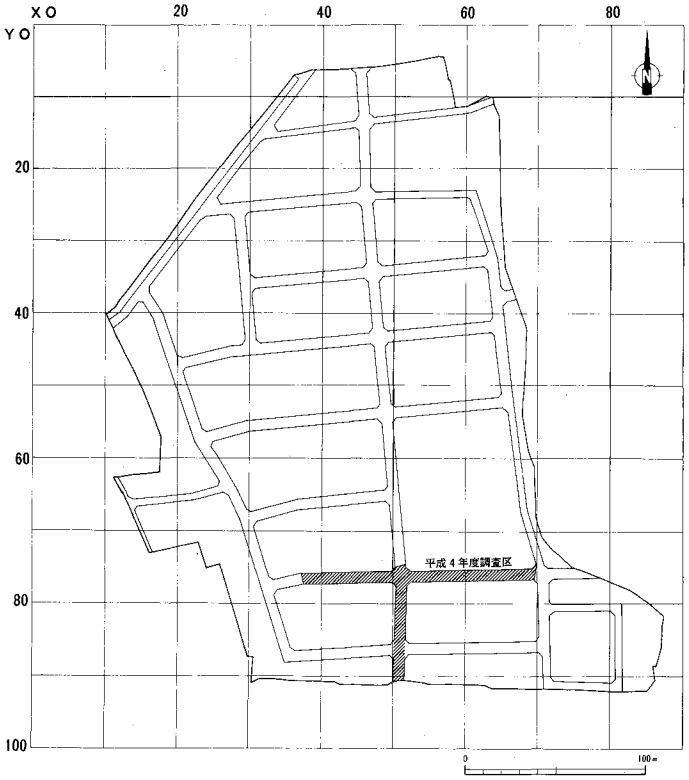


Fig. 4 グリット設定図

2 調 査 経 過

現地での発掘調査は委託契約の締結後、8月3日から始まった。まず、重機（バックフォー0.4㎥）により厚さ約20㎝の耕作土を除去後、平安時代遺構面の調査に入った。当地区ではローム層の堆積がほとんど認められず、粘性の強い黒褐色土層主体の地層構成のため、遺構の検出は難渋を極めたが、最初に着手したA区からは平安時代住居址群（9～10世紀）をはじめ、古墳時代鬼高期の住居址（6世紀前半）、さらには石田川式土器を伴う住居址（4世紀）がほぼ同じレベルから折り重なるように検出され、当地では、古墳時代から平安時代までの遺構が一面上に広がっていることが判明した。8月は、ほぼA区の遺構掘り下げに費やされた。9月に入っても依然として残暑の厳しい日々が続いたが、調査の対象はA区からC区へ移行した。C区では、A区よりも遺構数は少ないものの、ほぼ正方形の同一プラン上に重複する3基の大型古墳時代住居址の存在が確認された。これらの住居址は最終的に今回の発掘調査の中心的な遺構となったものであるが、どの遺構も遺物の保存状況は良好でかつ出土量も多く、かつてない貴重な成果を上げることができた。しかし、本地域特有の粘性の強い黒褐色土は一度表面にさらされると時間の経過とともに固く締り、移植ごてを全く受け付けなくなってしまう。掘り下げに入る前日に該当箇所に散水するのが日課となった。10月に入った時点での進捗状況は、先月までの予想以上の遺構検出量のため、当初予定より若干の遅れをきたしていた。この遅れを取り戻すべく、予算の支出状況と今後の予定を勘案しながら、でき得る限りの作業員の増員に踏み切った。10月の調査は、新しくC区未調査部分および当初の表土剥ぎでは遺構の確認されなかったB区二面目の掘り下げに着手した。

その結果、B区から新たに、溝址2条、掘立柱建物址1基および後に地下式土坑と判明した土坑1基外の存在を確認した。また、C区未調査部分からも表土剥ぎの結果、3～4軒の住居址のプランが確認されるなど、遺構検出数は先月を上回るほどであった。11月は先月までにほぼ検出し尽くした遺構の精査に全力を注いだ。毎日が時間との闘いの連続であったが、当初予想された縄文時代の遺構はついに確認されなかった。11月18日には全ての遺構の精査を終え、19日には遺跡全体測量およびハイライダーによる遺跡全体撮影を実施し、翌週24日からは調査区の埋め戻しとプレハブ現場事務所の撤収作業に入った。すべての、作業を終了した11月30日、依頼主および近隣の住民へ終了の挨拶をすませ現地発掘調査を完了した。なお、その後の整理作業は12月2日から翌年3月26日まで文化財保護課整理棟で行いすべての作業を完成させる運びとなった。

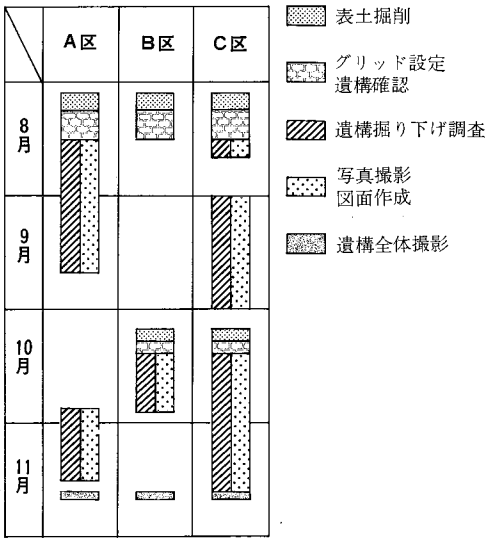
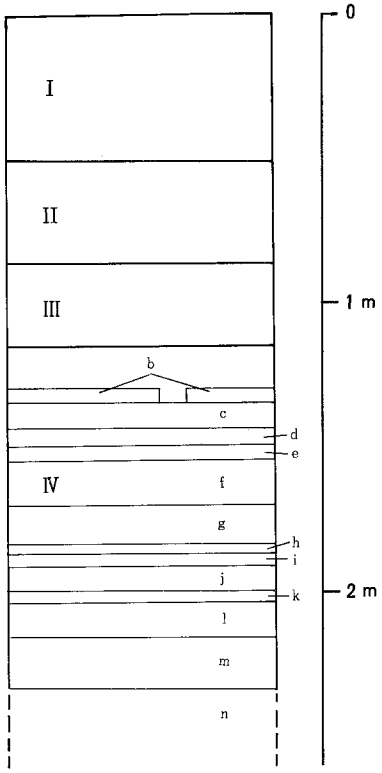


Fig. 5　調査経過図

Ⅳ　層　　序

本遺跡のほぼ中央に設定した深堀から観察される地層は基本的には、大きく２つに分類できる。上位の厚さ１ｍほどの黒褐色土層と下位に堆積するラミナ（縞目）状の硬くしまった砂とシルトの互層である。この灰褐色系統の砂層は総社、元総社付近を中心に利根川右岸一帯に広がっており、層厚は元総社市内の遺跡地（『元総社明神遺跡Ｘ』1991年）で約２～４ｍを計り、本遺跡のように５ｍを越える（天狗岩用水に接するの段丘崖）ところもある。本報告書はこの砂層を「総社砂層」と呼ぶことにする。この砂層はAs－Sj（浅間－総社軽石：約1.1万年前）を含む前橋泥炭層の上にあることからその堆積は約１万年前以降から始まったと推測されるが、正確な堆積年代は今のところ明らかにされていない。ただ今回の発掘で、縄文中期の加曽利Ｅ式土器が検出されたことや周辺遺跡の縄文土器出土状況（縄文中期に集中）から類推すれば、堆積期間は縄文時代前期（約6000年前）のころまでは続いていたと思われる。また総社砂層の上に乗る黒褐色土層は硬く、極めて粘性が強い。ただし調査区の東西にあたるＡ区、Ｃ区の一部ではこの黒褐色土層は見られず、代わりに淡い黄褐色土層が総社砂層の上に広がっていた。



Ⅰ　層：暗褐色粗砂層　耕作土。As－B（浅間Ｂテフラ；1108年）を若干含む。

Ⅱ　層：極暗褐色粗砂層　二次時堆積のAs－C（浅間Ｃテフラ；４世紀中頃）10%、およびHr－FP（榛名二ッ岳パミス；６世紀中頃）を若干含む。

Ⅲ　層：黒褐色細砂層　二次堆積のAs－C（浅間Ｃテフラ；４世紀中頃）20%、およびHr－FP（榛名二ッ岳パミス；６世紀中頃）を10%若干含む。

Ⅳ　層：総社砂層　砂、シルトの互層。

ａ…黄褐色シルト層　ｂ…褐色シルト層
ｃ…浅黄色シルト層　ｄ…にぶい黄褐色微砂層
ｅ…にぶい黄橙色シルト層　ｆ…褐色細砂層
ｇ…灰黄褐色粗砂層　ｈ…にぶい黄色シルト層
ｉ…にぶい黄褐色微砂層　ｊ…灰黄褐色粗砂層
ｋ…にぶい黄褐色微砂　ｌ…灰黄褐色細砂層
ｍ…にぶい黄褐色細砂層　ｎ…灰黄褐色粗砂層

Fig. 6　大屋敷遺跡標準土層図

V 遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構は竪穴住居址27軒、掘立柱建物址１軒、溝址２条、井戸址１基、落ち込み１基、土坑46基である。これらの遺構は、ほとんどが基本層序のⅡ層およびⅢ層面（As－CおよびHr－FPを二次堆積で含む粘性を帯びた黒褐色土層）を掘り込み構築されていたが、共に粘性を帯びた地山と覆土の区別がつきずらく、同一系統の色調であることも重なり、プラン確任は遺構床面直上といったケースもみられた。住居址の時代別内訳は古墳時代の石田川式土器を伴う住居址１軒、鬼高式土器を伴う住居址14軒（５世紀末葉～７世紀前半）、奈良時代（８世紀代）の住居址５軒、平安時代の住居址７軒となっている。また遺物では縄文包含層から中期加曽利E式を中心に391点の縄文土器片が検出されたほか、鬼高Ⅰ式土器を伴う住居址（H－12）から三ッ寺遺跡他に類例をもつ大型高坏が検出されたこと、C区を中心に検出された瓦類63点のうち25点が、八幡川を隔てて本遺跡地に程近い山王廃寺（放光寺）跡の創建時瓦に比定されるものとなったこと等があげられる。

１ 住　居　址

H－１号住居址（Fig. ９）

位　置　X66・67、Y76・77グリッド　　面　積　(7.72) ㎡　　方　位　N－87°－E

形　状　東西2.30m、南北（3.40）mの長方形を呈する。壁高は10㎝で立ち上がり角度は73°を測る。上部は耕作による削平を受け、竈を含め遺構の残り具合は悪い。

床　面　基本層序には見られない、粘性の少ない黄褐色細砂土層を掘り込み床面を構成している。全体に凹凸ぎみの床面である。

竈　東壁やや南よりに偏した位置に付設されている。本体は壁面より外側に設置されていたと思われるが全体に保存状態は不良である。

貯蔵穴　住居東南隅、竈右側に検出された。長軸49㎝、短軸43㎝、深さ19㎝の楕円形で底部より流れ込みによる土師器坏（１）が出土している。

遺　物　遺物総数は52点であるが、流れ込みによるものがほとんどであり、本住居址に所属する遺物は特定できなかった。

備　考　本住居址は調査区東端の天狗岩用水を見下ろす段丘崖に向かって、ゆるやかに東に傾く斜面上に存することから、住居内には流れ込みによる古墳時代の遺物が多く見られた。したがって遺物による本遺構の時代区分はできなかったが、その住居形態から平安時代の住居址であることは明らかである。

H－２号住居址（Fig. ９、PL. ３）

位　置　X65・66、Y76・77グリッド　　面　積　9.35㎡　　方　位　N－84°－E

形　状　東西2.70m、南北3.55mの長方形。壁高は11cmで壁の立ち上がり角度は68°を測る。
四方の壁にそって幅18cm、深さ8cmの周溝が付設されているが全周はしなかった。

床　面　基本層序には見られない粘性の少ない黄褐色細砂土層を掘り込み床面を構成している。
全体的に平坦な床面である。

竈　東壁の南寄り、南東コーナーに近い位置に設置されている。本体上部は耕作による削平をうけているが、竈両脇には左右の袖石が埋まっていたと思われるピットが検出された。このことから竈本体は壁外にあったことが確認できる。全長86cm、全幅97cmを測る。

貯蔵穴　住居東南隅、竈右側に検出された。長軸62cm、短軸52cmの楕円形で深さは16.5cmを測る。

遺　物　出土総数は466点で、うち図示できたものは土師器坏（2）、須恵器坏（3）、須恵器椀（4）、須恵器壺（5）である。

備　考　出土遺物と住居形態から平安時代の住居址と言える。

H－3号住居址（Fig. 9）

位　置　X64・65、Y76・77グリッド　　面　積　(7.22) ㎡　　方　位　N－85°－E

形　状　西側をH－5と重複し、南側が調査区外に伸びるため、完掘りはできなかったが確認できた規模は東西（2.23）m、南北（3.04）mでH－1・H－2と同様、長方形のプランを呈するものと思われる。遺構上部は削平を受けており、壁高は平均5.5cmしか残存していなかった。立上がり角度は47°を測る。

床　面　基本層序には見られない、粘性の少ない黄褐色細砂土層を掘り込み床面を構成している。
全体に凹凸の目立つ床面である。

竈　一部調査区外に伸びるため相対的な位置は不明であるが、H－1・H－2と同様、東壁やや南寄りに設置されているものと思われる。砂質凝灰岩製の支柱と左右の袖石が残存しており、本体は壁外にあったことがわかる。全長56cmで全幅94cmを測る。

重　複　H－5と重複するが本遺構の方が先行する。

備　考　住居および竈の形態から平安時代の住居址と言える。

H－4号住居址（Fig. 10、PL. 3）

位　置　X63・64、Y75・76グリッド　　面　積　(10.78) ㎡　　方　位　N－66°－E

形　状　遺構の北側半分が調査区外に伸びるため、完掘りはできなかったが、東西4.60m、南北(3.50) mの現存値から方形のプランを呈するものと思われる。壁高は44cmで、壁の立ち上がり角度は68°を測る。

床　面　黒褐色土層（Ⅲ層）を掘り込み床面としている。全体によく踏み固められており、平坦な面を構成している。

竈　竈の中心線から左半分が調査区外に伸びるため完掘りはできなかったが、保存状態は良好である。砂質凝灰岩を使用した支柱上には手捏土器が完形で出土した。

遺　物　遺物総数は798点を数え、図示できたものは手捏土器（6）、須恵器坏身（7）、土師

器小甕（8・9）、土師器甑（10）、土師器甕（11）である。

備　考　出土遺物の須恵器坏身は陶邑編年のＭＴ15頃に比定できる。また土師器小甕は鬼高Ｉ式に比定でき、須恵器坏身の時期と矛盾しない。したがって本遺構は６世紀前半の住居址と考えられる。

Ｈ－５号住居址（Fig. 10）

位　置　X63・64、Y75・76グリッド　　面　積　（7.94）㎡　　方　位　N－76°－E

形　状　一部調査区外に伸びるため完掘りはできなかったが、東西（2.88）m、南北3.10ｍの現存値から方形プランが想定できる。壁高は15㎝で、壁の立ち上がり角度は61°を測る。

床　面　二次堆積のAs－C軽石（浅間山起源；４世紀中頃）を10％含む締りと粘性の強い極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面を構成している。平坦な床面で、竈周辺を中心に堅緻面が広がっている。

竈　東壁の南端、南東コーナー付近に付設されている。保存状態は不良で、焼土・炭化物等は検出されなかった。砂質凝灰岩を使用した両袖石を壁面付近に有することから、本体を壁外にもつことがわかる。全長84㎝、全幅82㎝を測る。

重　複　Ｈ－３・Ｈ－６と一部重複し、Ｈ－６→本遺構→Ｈ－３の順で構築されている。

備　考　住居址と竈の形態から平安時代の住居址と言える。

Ｈ－６号住居址（Fig. 10、ＰＬ. 3）

位　置　X63・64、Y76グリッド　　面　積　（5.33）㎡　　方　位　N－85°－E

形　状　重複により西壁と東壁および南西コーナーが残存するのみであるが、東西2.85ｍ、南北（2.48）ｍを測り、方形プランを持つことが想定される。壁高26㎝で壁は67°の角度で立ち上がる。

床　面　極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面を構成している。堅く踏み固められた、極めて粘性の強い堅緻面がほぼ全面に広がり、遺構中央には炉址が確認された。

炉　長軸50㎝、短軸40㎝の楕円形で中央部は凹面を呈する。深さは床面から10㎝を測る。

重　複　Ｈ－４、Ｈ－５、Ｈ－７と重複するが本遺構が先行する。

遺　物　遺物総数は130点を数えるが、流れ込みの遺物がほとんどで、図示できたものは坩（12）と台付甕（脚部のみ；13・14・15）のみである。

備　考　遺物の特徴から石田川式土器を伴う４世紀後半の住居址と言える。

Ｈ－７号住居址（Fig. 11）

位　置　X64、Y76グリッド　　面　積　―　　方　位　N－80°－E

形　状　確認面が本住居址の下だったため竈部分のみの検出であった。
規模は現存値で全長（60）㎝、全幅（50）㎝である。

重　複　竈の位置から、住居址本体は石田川の住居址Ｈ－６と重複していたもの思われるがＨ－６より高レベルで構築されていたためか、Ｈ－６の遺構は損なわれていない。

備　考　残存する竈の形状から、東竈をもつ平安時代の住居址と推定される。

H－8号住居址（Fig. 11、PL. 3）

位　置　X59・60、Y75・76グリッド　　面　積　(11.0) ㎡　　方　位　N－161°－E

形　状　一部調査区外であるが、南竈を有する住居址で東西4.50m、南北（2.80）mの方形を呈する。壁高は35cmで壁は67°の角度で立ち上がる。

床　面　極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面を構成している。住居址中央部と竈付近を中心に堅緻面が広がっている。柱穴は検出できなかった。

竈　全長143cm、全幅102cm、焚口部幅48cmを測る。煙道の先端部分まで良好な状態で検出され、両袖は住居址内に58cmほど入る。内部の壁面は燃焼部を中心に焼土化している。

遺　物　埋土の小破片がほとんどで、図示できたものは土師器坏身（16）のみである。

備　考　遺物の土師器坏身は鬼高Ⅱ～Ⅲ式に比定され、本遺構は6世紀半ば過ぎの住居址と言える。

H－9号住居址（Fig. 12）

位　置　X54・55、Y76・77グリッド　　面　積　(7.40) ㎡　　方　位　N－86°－E

形　状　南側部分が調査区外に伸びているが、東西2.90m、南北（2.70）mの方形プランを呈するものと思われる。壁高は35cmで、壁の立ち上がり角度は67°であった。

床　面　黒褐色土層（Ⅲ層）を掘り込み床面としている。住居址内中央部は重複するO－1に削られていが残存部分は全体によく踏み固められている。

竈　南壁が調査区外にあるため相対的な位置は不明であるが、東壁ほぼ中央に設置され全長94cm、全幅86cm、焚口部幅26cmを測り煙道は44°の角度で立ち上がる。

重　複　O－1と重複し、本遺構が先行する。

遺　物　図示できたものは土師器坏（17）である。

備　考　出土遺物や竈の形態から6世紀半ば過ぎ、鬼高Ⅱ式にあたる住居址と言える。

H－10号住居址（Fig. 12、PL. 3）

位　置　X49・50、Y76・77・78グリッド　　面　積　(14.53) ㎡　　方　位　N－70°－E

形　状　一部調査区外に伸び、東側部分をW－1によって削られている。確認できた範囲では東西5.10m、南北5.20mのほぼ正方形のプランを呈する。壁高は46.5cmで壁の立ち上がり角度は79°を測る。

床　面　極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面を構成している。全体に平坦11A面である。

重　複　W－1と重複し、本遺構の方が先行する。

遺　物　遺物総数は565点を数え、図示できたものは土師器坏（18）、土師器甑（19）、土師器甕（20・21）、須恵器甕（22）がある。

備　考　出土した土師器器類は総じて鬼高Ⅱ～Ⅲ期に比定され、本遺構は6世紀半ば過ぎから7世紀にかけての住居址と思われる。

H－11号住居址（Fig. 13、PL. 4）

位　置　X48•49、Y75•76•77グリッド　面　積　(27.12) ㎡　方　位　N－63°－E

形　状　一部調査区外であるが、東西5.30m、南北5.64mのほぼ正方形のプランを呈する。壁高は38.5cmで、壁は55°の角度で立ち上がる。

床　面　極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面を構成している。全体に平坦な面を形成しており、特に竈周辺を中心に堅緻面が広がっている。

竈　東壁やや南寄りに付設されている。煙道先端部まで良好な形で検出された。全長1.28m、全幅66cm、焚口部幅18cmで、竈本体は壁内にある。

貯蔵穴　南東コーナーに長軸70cm、短軸60cm、深さ37.5cmのほぼ円形を呈する貯蔵穴が良好な形で検出された。粘性の強い黒褐色土層（Ⅲ層）を掘り込み、断面形は擂鉢状を呈する。底部より土師器長胴甕がほぼ完形で出土した。

重　複　H－12、H－14が重複する。構築順序はH－12→本遺構→H－14の順である。

遺　物　遺物総数は本遺跡最多の1772点を数える。図示できたものは土師器坏（23・24・25・26・27・28）、高坏（29）、土師器壺（30・32）、土師器甕（31・33）がある。

備　考　本遺構とこれに重複するH－12、H－14のうち本遺構とH－12の重複関係をみると、ほぼ同一プラン上に構築されている。また、両遺構の床面のレベル差はほぼ30cmであった。本遺構は出土遺物から鬼高Ⅰ式土器を伴う6世紀前半の住居址と言える。

H－12号住居址（Fig. 14・15、PL. 4）

位　置　X66・67、Y76・77グリッド　面　積　(26.48) ㎡　方　位　N－62°－E

形　状　東西5.35m、南北5.65mでほぼ正方形のプランを呈している。壁高は73cmで、壁は81°の角度で立ち上がる。

床　面　黒褐色土層（Ⅲ層）を掘り込み床面としている。全体に平坦な面を形成しており、特に竈周辺を中心に堅緻面が広がっている。柱穴4基、貯蔵穴1基が良好な形で検出された。

竈　東壁やや南寄りに、本体を壁内にもつ竈が良好な形で検出された。特に、左袖は長さ78cm、幅28cm、厚さ41cmの1個の砂質凝灰岩をそのまま利用している。全長142cm、全幅96cmで焚口部幅は36cmを測る。

貯蔵穴　竈右脇、南東コーナー付近に総社砂層を掘り込む貯蔵穴が検出された。平面形は東西80cm、南北61cmの長方形で、深さは72cmを測り、断面形は逆台形を呈する。

重　複　H－11、H－14と重複する。

遺　物　図示できたものは土師器坏（34・35・36・37・38・39・40・41）、土師器高坏（42）、土師器大高杯（47）、坩（43・53）、土師器小甕（44・45・48）、土師器甕（46・49・50・51・52）、土師器甑（54・55）、羽口（56）である。

備　考　竈の形状および出土遺物から鬼高Ⅰ式土器を伴う6世紀初頭の住居址と言える。
なお、検出された大高坏は坏部のみであるが、口径は28.2cmほどある大型のもので、類

例は元総社明神遺跡（Nトレンチ）、三ッ寺Ⅰ遺跡にみられるのみである。

H－13号住居址（Fig. 15）

位　置　X47・48、Y76・77グリッド　　面　積　(6.93) ㎡　　方　位　N－84°－E

形　状　南側部分が調査区外に伸びるが、東西2.85m、南北（2.45）mを測り、長方形のプランを呈するものと思われる。壁高は32.5cmで、壁の立ち上がり角度は80°を測る。

床　面　極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面を構成している。全体に凹凸の目立つ面で、特に堅緻面等は検出されなかった。

竈　東壁、調査区外にかかる位置に付設されている。残存状態は不良で壁外に存する燃焼部を中心に焼土が広がっていた。全長は60cmを測る。

重　複　北東コーナーをH－11、H－12とわずかに重複する。H－12→H－11→本遺構の順で構築されている。

遺　物　図示できたものは羽釜（57）1点である。

備　考　遺物、遺構の形態から平安時代の住居址といえる。

H－14号住居址（Fig. 15、PL. 5）

位　置　X48・49、Y76・77グリッド　　面　積　(5.38) ㎡　　方　位　N－89°－W

形　状　北側が調査区外に伸び、東側を特殊遺構によって削られている。また、確認面が一部、遺構の床面より低くなってしまったため部分的な調査となってしまった。現存値で東西（1.88）m、南北（4.40）mを測り、方形のプランを呈するものと思われる。壁高は26.5cmで壁の立ち上がり角度は58°を測る。

床　面　極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面を構成している。確認された範囲では、平坦な面を形成している。

竈　本遺跡では唯一、西壁に竈を付設している。燃焼部本体を壁外に有するもので両袖と支柱石には砂質凝灰岩を利用している。なお、両袖の砂質凝灰岩の間（焚口部幅）はわずかに6cmほどしかなく、原位置からは多少動いているものと思われる。現存値での規模は全長94cm、全幅76cmを測る。

遺　物　図示できたものはカワラケ（58）、土師器坏（59）、須恵器坏（60・61・62・63）、土師器高坏（64）、須恵器椀（65）、土師器甕（66）、須恵器大甕（67）がある。

備　考　出土遺物から鬼高Ⅱ～Ⅲ式土器を伴う6世紀後半から7世紀前半にかけての住居址と思われる。

H－15号住居址（Fig. 16）

位　置　X45・46・47、Y76グリッド　　面　積　(13.41) ㎡　　方　位　N－87°－E

形　状　ほぼ北側半分が調査区外に伸びているため完掘りはできなかったが、確認できた範囲では東西5.90m、南北2.55mで方形のプランを呈するものと思われる。壁高は38cmで、壁は82°の角度で立ち上がる。

床　面　極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面を構成している。全体に平坦な床面で、堅く締まった堅緻面が全面に広がっている。

遺　物　図示できたものは土師器坏（68）、須恵器坏（69）の２点である。

備　考　出土遺物から本遺構は６世紀後半から７世紀にかけての住居址と考えられる。

Ｈ－16号住居址（Fig. 16、ＰＬ. ５）

位　置　X57•58•59、Y75•76グリッド　面　積　（16.55）㎡　方　位　N－88°－E

形　状　一部調査区外のため完掘りはできなかったが、既存部分の形状から東西 4.30ｍ、南北（4.00）ｍの方形プランをもつものと思われる。壁高は39㎝で壁の立ち上がり角度は79°を測る。

床　面　極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面としている。全体によく踏み固められており、特に竈付近を中心に堅緻面が広がっていた。

竈　東壁やや南寄り位置に設置され、全長77㎝、全幅68㎝、焚口部幅38㎝を測り、煙道の立ち上がり角度は47°であった。

貯蔵穴　竈の右脇、南東のコーナー付近に検出された。形状は長軸55㎝、短軸54㎝で真円に近く、深さは29,5㎝を測る。

備　考　本住居址の床面約20㎝上に平安時代の住居址が存在していたようであり、プランは確認できなかったが、須恵器高台椀（70・71・72）がまとまって出土した。うち須恵器高台椀は口縁部を中心にすすが付着しており、灯明皿がわりに使用されたと思われ、時期的には10世紀前後の所産と考えられる。これら３点の遺物は本住居址の埋土として扱った。なお、本住居址からは図示できなかったが床面直上で外稜を有する土師器坏片が検出されているため、構築年代は６世紀半ば以降と位置づけた。

Ｈ－17号住居址（Fig. 17、ＰＬ. ５）

位　置　X55・56、Y75・76グリッド　面　積　（5.10）㎡　方　位　N－67°－E

形　状　北側部分が調査区外に伸び、西側部分がＨ－18と重複するため、完掘りはできなかったが、確認できた範囲では東西3.92ｍ、南北（2.40）ｍで直交することから、（長）方形を呈するものと思われる。壁高は12㎝で、壁は78°の角度で立ち上がる。

床　面　黒褐色土層（Ⅲ層）を掘り込み床面としている。平坦な面でよく踏み固められている。

竈　東壁やや南寄りに設置されているが、右袖を残して本体は調査区外に構築されているため、詳細は不明である。

重　複　西壁をＨ－18と重複するが、本遺構が先行する。

遺　物　図示できたものは土師器高坏（73）、土師器甑（74）の２点である。

備　考　出土遺物は鬼高Ⅰ式土器に比定され、本遺構は６世紀初頭の住居址と考えられる。

Ｈ－18号住居址（Fig. 18、ＰＬ. ５）

位　置　X53・54、Y75・76グリッド　面　積　（26.27）㎡　方　位　N－58°－E

形　状　北側部分が調査区外に伸びるため、完掘りはできなかった。東西7.70m、南北（4.65）mの方形プランを呈する。壁高は17cmで、壁は78°の角度で立ち上がる。

床　面　黒褐色土層（Ⅲ層）を掘り込み床面としている。平坦な面でよく踏み固められている。

竈　東壁やや南寄りに設置されているが、右袖を残して本体は調査区外に構築されているため、詳細は不明である。

貯蔵穴　竈の右脇、南東コーナー付近に総社砂層を掘り込む貯蔵穴が検出された。東西70cm、南北45cmの長方形で、深さは65cmを測る。断面は逆台形を呈し、内部からは土師器甕（77）が完形に近い形で検出された。

重　複　H－9、H－17およびO－1と重複し、H－17→本遺構→O－1の順で構築されている。

遺　物　遺物総数は367点を数えるが、図示できたものは土師器坏（75・76）、土師器甕（77・78）の4点である。この甕は全体に丸みを帯び、胴部ほぼ中央に最大径を有するもので鬼高Ⅰ式に比定される。

備　考　本遺構は出土遺物および住居形態から6世紀初頭の住居址と考えられる。

H－19号住居址（Fig. 17）

位　置　X61・62、Y75・76グリッド　　面　積　（10.62）㎡　方　位　N－63°－E

形　状　一部調査区外であるが、東西3.55m、南北（3.38）mの長方形を呈する。壁高は15cmで、壁は64°の角度で立ち上がる。

床　面　極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面を構成している。全体に平坦な床面であり、特に竈周辺を中心に堅緻面が広がっている。

竈　東壁やや南寄り南東コーナー付近に設置されている。保存状態は良好で、竈周辺には炭化物が広がっていた。両袖が壁内にあまり張り出さず、本体を壁外に持つ竈である。

備　考　本遺構の遺物は埋土遺物や小破片がほとんどであるが、高台椀の底部等が検出されており、構築時は8世紀から平安時代の頃としたい。

H－20号住居址（Fig. 19）

位　置　X50・51、Y75グリッド　　面　積　（5.80）㎡　方　位　N－52°－E

形　状　ほぼ北側半分が調査区外に伸びているため、完掘りはできなかった。確認できた範囲では東西3.50m、南北（2.10）mで、方形プランを呈するものと考えられる。壁高はわずかに8cmで、壁の立ち上がり角度は58°を測る。

床　面　極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面を構成している。やや凹凸の目立つ床面である。

備　考　住居址全体プランはつかめないが、出土遺物中、外稜を有する土師器片の特徴から鬼高Ⅱ～Ⅲ式に比定され、遺構の構築時期は6世紀後半から7世紀前半にかけてと思われる。

H－21号住居址（Fig. 19）

位　置　X52・53、Y76グリッド　　面　積　（4.10）㎡　方　位　N－70°－E

形　状　南側がW－1との重複て削られているが、規模は現存値で東西3.80m、南北（1.90）m

を測り、長方形のプランをもつと思われる。確認面が住居址の床面近くであったため、壁高は4㎝しかなかった。残存する壁面にそって幅16㎝、深さ7㎝の周溝が検出された。

床　面　極暗褐色土層（Ⅱ層）を掘り込み床面を構成している。極めて堅牢な床面である。

重　複　W－1と重複するが、本遺構が先行する。

備　考　残存する住居址の形態から平安時代の住居址と思われる。

H－22号住居址（Fig. 20、PL. 5）

位　置　X57•58•59、Y75•76グリッド　面　積　(25.80) ㎡　方　位　N－81°－E

形　状　北側が調査区外に伸びるが、確認できた範囲では東西4.90m、南北（5.45）mで長方形のプランを呈するものと思われる。壁高は30㎝で、壁の立ち上がり角度は78°を測る。

＊本住居址の東壁には2基の竈が並んで検出された。付けかえによって2基の竈を有する住居址とも思われたが、その後ほぼ同一レベル上に別の住居址のプランが確認されたため、別々の住居址と判断し、当初のプランに基づく本遺構と区別するためH－27とした。

床　面　黒褐色土層（Ⅲ層）を掘り込み床面としている。竈付近を中心に堅緻面が広がっている。全体にほぼ平坦な面である。壁高は30㎝で、壁は78°の角度で立ち上がる。柱穴は検出されなかった。

竈　東壁に設置されているが、相対的な位置は不明である。全長113㎝、全幅118㎝、焚口幅42㎝を測る。両袖が住居址内に伸び、燃焼部は壁内にある。

重　複　H－16、H－27と重複し、H－27→本遺構→H－16の順に構築されている。

遺　物　遺物総数は1133点を数えるが、少なからずH－27に属するべき遺物が含まれていると考えられる。図示できたものは土師器坏（79・80・81）、土師器甕（82）である。

備　考　出土した土師器坏3点はいずれも内部に暗紋状磨きが施され、うち2点は内斜口縁を有するもので鬼高Ⅰ式に比定される。本遺構は、6世紀初頭の住居址と言える。

H－23号住居址（Fig. 19、PL. 6）

位　置　X43・44、Y76グリッド　面　積　(6.00) ㎡　方　位　N－87°－E

形　状　北側約半分が調査区外に伸びるが、東西4.35m、南北（1.46）mの現存値から方形のプランを呈するものと考えられる。壁高は12.5㎝で壁の立ち上がり角度は73°を測る。

床　面　基本層序には見られない、粘性の少ない黄褐色細砂土層を掘り込み床面を構成している。多少凹凸の目立つ床面である。

重　複　H－24と重複し、H－24が先行する。

備　考　遺物は土師器と須恵器の小破片がほとんであるが、それらの特徴から判断して本遺構は8世紀代の住居址と推定できる。

H－24号住居址（Fig. 21、PL. 6）

位　置　X43・44、Y76グリッド　面　積　(15.06) ㎡　方　位　N－85°－E

形　状　一部調査区外であるが、東西4.20m、南北（3.50）mの現存値から方形プランを呈する

ものと思われる。壁高は18.5cmで壁の立ち上がり角度は77°を測る。

床　面　基本層序には見られない、粘性の少ない黄褐色細砂土層を掘り込み床面を構成している。多少凹凸の目立つ床面である。一部壁面にそって幅20cm、深さ6cmの周溝が検出された。

竈　東壁やや南寄りに付設されている。砂質凝灰岩の切石を組合わせて両袖を構成している。全長138cm、全幅122cmで焚口部長は36cmを測る。

重　複　H－23、H－25と重複するが、構築順序はH－25→本遺構→H－23の順である。

遺　物　図示できたものは土師器坏（83・84・85）、須恵器坏蓋（86）である。

備　考　出土遺物中の須恵器坏蓋は、内面の返りが消失しているところから8世紀頃の所産と考えられる。

H－25号住居址（Fig. 19、PL. 6）

位　置　X44・45、Y76・77グリッド　面　積　(3.59) ㎡　方　位　N－84°－E

形　状　遺構の北側がH－24、H－26によって削られているが、東西2.80m、南北（1.70）mの現存値から方形プランを呈するものと思われる。壁高は21.5cmで、壁の立ち上がり角度は73°を測る。

床　面　基本層序には見られない、粘性の少ない黄褐色細砂土層を掘り込み床面を構成している。多少凹凸の目立つ床面である。

重　複　H－24、H－26と重複するが、構築順序は、本遺構→H－26→H－24の順である。

遺　物　埋土の小破片が多かったため、図示できたのは土師器坏（87）1点である。

備　考　遺物の特徴およびH－24との重複関係から本遺構は7世紀後半の時期が与えられる。

H－26号住居址（Fig. 22、PL. 6）

位　置　X45、Y76・77グリッド　面　積　(5.39) ㎡　方　位　N－84°－E

形　状　東西（2.30）m、南北2.56mの方形プランを呈する。壁高は15.5cmで、壁の立ち上がり角度は62°を測る。

床　面　基本層序には見られない、粘性の少ない黄褐色細砂土層を掘り込み床面を構成している。全体になだらかな床面であるが堅緻面は確認できなかった。

竈　東壁の南東コーナーに近い位置に付設されている。本体を壁外にもち、両袖に砂質凝灰岩を使用している。規模は全長78cm、全幅72cm、焚口部幅24cmであった。

備　考　遺物は埋土の小破片がほとんどで、本遺構に所属する遺物は確認できなかった。したがって、本住居址の構築年代は判然としないが、竈の形態や重複関係から7世紀後半ないしは8世紀前半の時期で押さえておきたい。

H－27号住居址（Fig. 23、PL. 5）

位　置　X57・58・59、Y75・76・77グリッド　面　積　(39.76) ㎡　方　位　N－54°－E

形　状　一部調査区外に伸びるが、東西7.00m、南北6.40mで長方形のプランを呈する。壁高は46cmで、立ち上がり角度は78°を測る。

床　面　黒褐色土層（Ⅲ層）を掘り込み床面としている。竈右脇には貯蔵穴が検出されたほか柱穴４基も確認された。竈周辺および柱穴の内側は、特に堅牢な堅緻面が広がっている。

竈　Ｈ－22に付属する竈の右隣に良好な形で検出された。両袖が住居址内に張り出し、支柱石から先の燃焼部も住居址内にある。規模は全長184cm、全幅106cm、焚口部幅52cmを測り、煙道の立ち上がり角度は34°であった。

貯蔵穴　竈右脇に総社砂層を掘り込む東西77cm、南北67cm、深さ73.5cmの貯蔵穴が検出された。

重　複　Ｈ－16、Ｈ－22と重複し、本遺構→Ｈ－22→Ｈ－16の順に構築されている。

遺　物　図示できたものは土師器坏（88）である。

備　考　出土遺物の土師器坏は内部に暗紋状磨きを施し、内斜口縁の特徴を有するもので、鬼高Ｉ式に比定される。したがって本遺構は６世紀初頭の住居址と考えられる。また、重複するＨ－22との時期差はほとんどないものと思われる。

2　堀建柱建物址

Ｂ－１号建物址（Fig. 24、ＰＬ. ２・６）

位　置　X50・51、Y84.85グリッド　　床面積　10.3㎡　　方　位　Ｎ－86°－Ｗ

形状等　東西２本×南北４本の８本柱からなり、全体としては東西2.40×南北4.30ｍの南北に長い長方形を呈する。隣り合う柱穴間の寸法は東西が2.39ｍ、南北1.43ｍの平均値を測る。柱穴の形状はいずれも円形または楕円形であるが、深さは最小で22cm（Ｐ－４）、最大で30.5cm（Ｐ－２）を測り、若干のひらきがある。なお、本遺構からの出土遺物は皆無であったが、同レベルで近接する土坑群のなかに中世の地下式土坑（Ｄ－７）があることから、中世以降のものと思われる。

3　溝　　址

Ｗ－１号溝址（Fig. 25、ＰＬ. ７）

位　置　X50～53、Y76～82ライン

形　状　Ａ区とＢ区にまたがる形で検出された。途中に重複する古墳時代および平安時代の遺構を削って形成されていることから中世以降に構築されたものと思われる。総延長は35.70ｍで、幅0.52～2.20ｍ、確認面からの深さは4.5cm～28.5cmを測る。

Ｗ－３号溝址（Fig. 25、ＰＬ. ７）

位　置　X50・51、Y82・83ライン

形　状　Ｂ区を東西に横切る形で検出された。総延長（5.35）ｍ、幅0.69ｍ～1.72ｍ、深さ7.5cm～14.0cmを測る。

4 井　戸　址

Ⅰ－1号井戸址（Fig. 24、PL. 6）

位　置　X53、Y76・77グリッド

形　状　総社砂層を掘り抜き形成されている。安全面を考慮し完掘りは実施しなかった。長軸122cm、短軸105cmの楕円形を呈し、深さは（3.09）mを測る。

重　複　H－21、W－1と重複している。H－21が先行し、W－1および本遺構がそれに続く。

遺　物　石臼1点ほか古墳時代、平安時代の土器片が検出されている。

備　考　出土遺物から構築時期は中世以降と考えられる。

5 落　込　み

O－1号落込み（Fig. 24）

位　置　X53・54・55、Y76・77グリッド

形　状　一部調査区外であるが東西7.5m、南北（2.38）mの隅丸方形を呈する。基本層序のⅡ層から総社砂層を掘り込み、形成されている。断面形はゆるやかな擂鉢状であった。重複　H－9、H－18およびW－1と重複する。H－9、H－18が先行し、W－1と本遺構が後になる。

備　考　埋土遺物や重複の関係から、本遺構の構築時期は中世以降と考えられる。

6 石敷遺構（Fig. 15、PL. 5）

形状等　C区のH－14の床面とほぼ同レベル上に、H－14を削る形で河原石や廃棄遺物を敷き詰めた遺構が検出された。石敷の範囲は幅約1.1×長さ（4.45）mで、ほぼ南北に屈曲して伸びる道路を想像させるものである。遺構としての確認が遅れたため、平面図はほとんどの河原石および瓦類を除去後のものになってしまったが、この石敷および重複するH－14の埋土中に検出された瓦類のほとんどが『山王＝秋間系』と確認され、八幡川を隔てて本遺跡と隣接する山王廃寺跡との関連が深まった。なお、本遺構の構築年代は遺物中に須恵器羽釜の破片が含まれていたことから、平安時代以降と思われる。

7 土　　坑

本遺跡から検出された土坑総数は46基である。ほとんどが遺物を伴わない小土坑群であったため、それらは遺跡・遺構全体図（Fig. 8）に図示するに止め、ここでは特徴的なもののみを記述した。

D－1号土坑（Fig. 26、PL. 7）　　位　置　X67、Y76グリッド

形状等　長径112×短径88cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは61cmを測る。基本層序のⅢ層

の３層および総社砂層を擂鉢状掘り込み形成されている。遺物総数は64点を数えるが、図示できたものは須恵器坏（89）のみである。

Ｄ－２号土坑（Fig. 26）　　位　置　Ｘ64、Ｙ75・76グリッド

形状等　長径48×短径40cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは58cmを測る。Ⅲ層をほぼ垂直に掘り込み形成されている。Ｈ－４とわずかに重複するため柱穴とも考えられたが確認できず、別個の遺構として扱った。

Ｄ－３号土坑（Fig. 26、ＰＬ. ７）　　位　置　Ｘ59・60、Ｙ76グリッド

形状等　長径127×短径55cmの長方形に一部張り出し部をもつ不整形を呈し、確認面からの深さは47cmを測る。Ⅱ層およびⅢ層をほぼ垂直に掘り込み、断面形は逆台形を呈する。壁面はよく焼けており、内部からは炭化した木片、焼石、灰および骨片が検出された。なお、張り出し部は自然石を利用した石囲が施され、ここを中心に焼土が広がっている。

Ｄ－４号土坑（Fig. 26）　　位　置　Ｘ63、Ｙ76グリッド

形状等　長径70×短径57cmの不整形を呈し、確認面からの深さは56cmを測る。Ⅲ層をほぼ垂直に掘り込み形成されている。Ｈ－４と重複し、付設する柱穴とも考えられたが確認できず、別遺構とした。

Ｄ－５号土坑（Fig. 26、ＰＬ. ７）　　位　置　Ｘ50、Ｙ79グリッド

形状等　長径120×短径90cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは49.5cmを測る。Ⅲ層と総社砂層を掘り込み、断面形はゆるやかな擂鉢状である。別記するＤ－６、Ｄ－７と同様にＷ－１に重複するため、これらの土坑はＷ－１と関連をもつ中世の遺構と考えられる。

Ｄ－６号土坑（Fig. 26、ＰＬ. ７）　　位　置　Ｘ50、Ｙ79・80グリッド

形状等　長径208×短径156cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは83cmを測る。Ⅲ層と総社砂層を掘り込み形成されている。Ｗ－１と関連をもつ中世の遺構と考えられる。

Ｄ－７号地下式土坑（Fig. 26、ＰＬ. ７）

位　置　Ｘ50・51、Ｙ80・81グリッド

形状等　不整形を呈し、確認面から床面までの深さは3.55ｍを測る。Ⅲ層と総社砂層を掘り込み形成されている。いわゆる地下式土坑に比定されるものであるが、遺構中央部の天井にあたる部分はすでに崩落しており、床面に厚く堆積している。床面はほぼ円形を呈し、平坦な面を形成している。また、入口に当たる部分が東西に１カ所ずつあり、どちらか一方に特定できない。遺物は、天井崩落後の流れ込みと思われる縄文土器片や羽釜片等で床面直上の遺物は皆無であった。

8　グリッド出土遺物

縄文時代

大屋敷遺跡の縄文時代の調査は遺溝は発見できず、包含層として遺物が確認されたにとどまっ

た。道路部分の調査ということで、調査区設定が細長いことも一因であろう。遺跡周辺では、縄文時代遺溝のある遺跡も少なからずあるので、今後の調査如何では検出される可能性はある。

土　　器（Fig. 39・40、ＰＬ. 8）

縄文土器は中期前半の阿玉台式土器、中期後半の加曽利Ｅ式、後期初頭の称名寺Ｉ式土器が出土した。このうち大半が加曽利Ｅ式（Ｅ４）に相当するもので、総点数417点のうち約98％を占める。次に称名寺Ｉ式土器・阿玉台式と続くが、極端に減少する。縄文土器の分布は調査区のＡ区を中心にほぼ全域にわたって確認された。しかし、いずれの土器も破片のみであり、個体を復元できる物の出土には至らなかった。

石　　器（Fig. 41・42、ＰＬ. 14・15）

石器は総点数65点出土している。器種別には、打製石斧（４点）、削器（３点）、石鏃（３点）が目立っている。打製石斧の量の多さは、中期が中心の大屋敷遺跡の性格を物語るものといえよう。また、敲石は12点、凹石・石皿は１点ずつ出土している。古墳時代の住居址からの出土もあり、縄文石器を古墳時代に利用したことも当然考えられる。また、古墳時代に作られた石器については別項を参照されたい。石材としては、黒色頁岩が際立って多く、この周辺地域の縄文時代における石材利用と合致している。

Tab. 1　包含層出土の縄文土器一覧

分　　類		点数	割合
中期前半　阿玉台式		2	0.4
中期後半　加曽利Ｅ式		520	99.0
（うち加曽利Ｅ４式）		518	98.7
	沈線＋縄文	(104)	
	微隆起＋縄文	(44)	
	沈線	(75)	
	微隆起	(35)	
	条線	(11)	
	縄文部	(121)	
	無文部	(128)	
後期初頭　称名寺Ｉ式		3	0.6
合　　計		525	100%

Tab. 2　縄文時代石器石材一覧

石材群	第1群石材			第2群石材					第3群石材			第4群石材	第5群石材		その他	合計
石材種類	A 黒曜岩	B チャート	C 珪質頁岩	D 黒色頁岩	E 頁岩	F 黒色安山岩	G 灰色安山岩	H 細粒安山岩	I 石英閃緑岩	J ひん岩	K ホルンフェルス	L 雲母石英片岩	M 粗粒安山岩	N 砂岩	O その他	
石鏃	1	1		1												3
削器				2	1											3
打製石斧			1					1			2					4
敲石											2	1	7		2	12
敲石＋凹石										1						1
凹石													1			1
磨石									1							1
石皿													1			1
剥片・砕片			4	19	5	1	2	3						3	2	39
合計	1	1	5	22	6	1	2	4	1	1	4	1	9	3	4	65

註）石材群については、石材産地との距離、大きさ、硬さ、緻密さ、粘りなどから便宜的に第１～５群まで分類した。
その他の石器は、石鏃・変玄武岩１点、打製石斧・変質玄武岩１点、剥片・凝灰岩質砂岩１点、石英１点である。

Ⅵ　ま　と　め

大屋敷遺跡は、八幡川と天狗岩用水に挟まれた台地上に立地しており、特に今年度の調査箇所は両川の合流点に隣接する段丘崖沿いにあたることから、当初より相当数の遺構・遺物の存在が予想された。調査の結果を地区ごとにみると、東西に伸びるA区、C区からは縄文時代の遺物および古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺構・遺物がまとまって検出され、本遺跡の主体をなす地区となった。一方、南北に伸びるB区からは質・量ともA区、C区には及ばないが、地下式土坑や掘立柱建物跡など特徴的な遺構が検出された。以下、時代区分ごとに調査の成果をまとめてみたい。

◎ 縄文時代

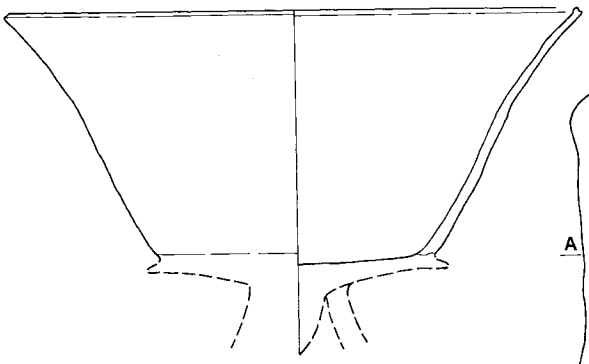
大屋敷遺跡の縄文時代は、道路部分の調査ということで調査範囲が限られた。そのためか遺構は発見できずに遺物包含層の調査にとどまった。出土地点は、C区が中心であり、標高の低いA区・B区からの出土は少なかった。今後北西側の高台に調査が進めば、遺溝が確認できる可能性もあるだろう。さて縄文土器は、中期前半の阿玉台式土器から後期初頭の称名寺Ⅰ式土器まで3形式417点を出土した。その中でも中期後半の加曽利E式（主にE４）土器がそのほとんどを占め総点数の98%に達する。後期になると土器は激減し、称名寺Ⅰ式がわずかに見られるだけである。また、石器については打製石斧を中心とするなど、この遺跡の性格が中期を中心とするものであることがよくわかる。今後の調査で中期から後期へのつながりが、より明確になることを期待したい。

◎ 古墳時代

古墳時代の遺構では住居址15軒および土坑１基を確認できた。うち、H－６は石田川式土器を伴う４世紀後半の住居址である。また、６世紀代を中心とする鬼高式土器を伴う住居址では６世紀前半の鬼高Ⅰ期にあたる住居址が７軒、６世半ば過ぎから７世紀前半の鬼高Ⅱ～Ⅲ期にあたるものが７軒という内容になっている。

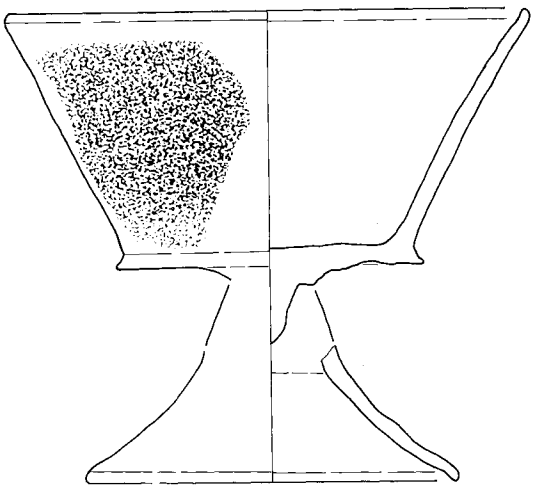
これらのうち鬼高Ⅰ期に位置付けたH－12では、遺物総数は1000点を越え、竈周辺を中心に坏・高坏・甕・甑類の完形遺物がセットで出土した。なかでも特筆すべきものとしては、口径30.6cmを測る大型の高坏（47）がある。底部と脚部を欠損することが悔やまれるが、胎土は非常によく精選され、色調は橙色を呈する。外面は全体に滑らかで、調整は指による横方向の撫でが、かすかに認められる程度で整美な仕上がりとなっている。類例は三ッ寺Ⅰ遺跡および元総社明神遺跡Ⅴ（Nトレンチ）にある。今のところ、本遺構で３例目と思われるが、類例の二遺跡はいずれも古墳時代居館址に関連するものである。(注1)

従来、この大型高坏に固有な名称は与えられていなかったが、本報告書では便宜上、『三ッ寺型高坏』と呼ぶことにする。既存する二遺跡の報告書によれば、出土場所が前者では濠内、後者



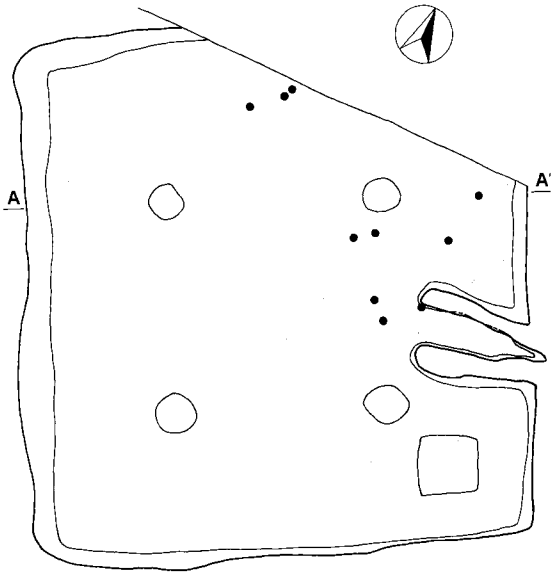
大屋敷遺跡出土

三ッ寺Ⅰ遺跡出土

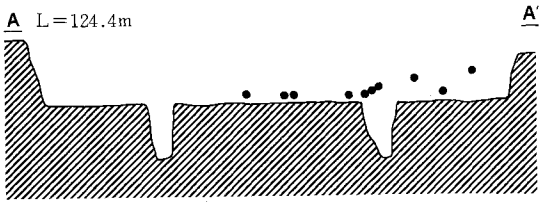


元総社明神遺跡Ⅴ出土

0　1：4　20cm



平面分布図



垂直分布図

0　1：80　4m

H－12号住居址出土三ッ寺型高坏分布図

Fig. 7　「三ッ寺型高坏」の比較と出土位置

では溝内で、共にＦＡ（榛名山起源；６世紀初頭）下の出土(注2)であるのに対し、本遺跡ではＦＡ純層の堆積が認められないため確実な時代判定は下せないが、Ｈ－12竈周辺の完形土師器類は５世紀第４四半期に逆上る可能性はある。接合された三ッ寺型高坏の遺物分布状況（Fig. 7）をみると、レベル的には床面から10cm～34cmの範囲内に点在し、かつ北東方面からの流れ込みを想定させる分布となっている。また、Ｈ－12の同プラン上に後続し、かつ鬼高Ｉ式土器を伴う住居址Ｈ－11からの破片検出はみられなかった。本項では、Ｈ－12構築→埋没時における高坏片の流れ込み→Ｈ－11の構築という一連の過程が５世紀末葉から６世紀初頭の範囲内におこったものとしておきたい。時期区分等、多少の誤認はあると思われるが、以上のような状況からして本遺跡と居館址との関連性が新たに浮上してきたと言え、一歩進めて述べるならば、総社古墳群の南側に位置し、山王廃寺（放光寺）、国分寺・国分尼寺、国府域といった古墳時代から律令期にかけての中心的建造物を半径１km内におさめる本遺跡の周辺に、三ッ寺居館址とほぼ同時期に併存した居館址を想定することもできるであろう。

◎ 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は住居址では、８世紀代に位置付けられる住居址が調査区西側のＣ区を中心に５軒、９世紀代に位置付けられる住居址が東側のＡ区を中心に７軒検出され、合計12軒を確認することができた。そのほかＣ区からは古墳時代鬼高Ⅱ～Ⅲ期に位置付けたＨ－14を壊す形で重複する石敷遺構１基が検出された。また、竈の形状が確認可能な住居址は全て東竈を有するもので、特に残存状況が比較的良好であったＨ－24では竈両袖に砂質凝灰岩の切石を組合わせ使用したものであった。８世紀代の住居址は、総じて竈本体の位置がほぼ壁面ライン上にあり、住居址内に本体を有する鬼高期や壁外に本体を付設する平安時代の遺構と併せて竈の形態変遷を跡づけることができた。７世紀後期に建立された山王廃寺（放光寺）創建時に比定された瓦類がまとまって検出された石敷遺構は、鬼高Ⅱ～Ⅲ期の住居址Ｈ－14掘り下げ中偶然の検出であり、判然としない部分があるが、多数の河原石とともに破片の状態で整地目的で散布された可能性が高い。山王廃寺廃絶時が現在のところ As－Ｂ軽石（浅間山起源；1108年）以前とされているところから、石敷遺構自体は平安時代の所産とした。

◎ 中　　世

中世の遺構は、地下式土坑１基、掘立柱建物址１基、井戸址１基、溝址２条、土坑37基、落ち込み１基が確認された。このなかで地下式土坑（Ｄ－７）は、天井部分を残して内部をドーム状に掘り抜いたものであるが本遺跡の場合、入口部分が東西の２カ所に存することが注目される。

本遺構は、厚く堆積した総社砂層を確認面から２ｍほどほりさげたもので、遺構確認時にはすでに天井部は崩落しており、内部に堆積していた。床面での平面形はほぼ楕円形を呈する。床直の遺物は皆無で使用目的も不明であるが、前橋市教育委員会および前橋市埋蔵文化財発掘調査団の前橋市内の遺跡からも類例があり、現在のところ直葬の墓壙としての見方が一般的である。

◎ 今後に向けて

総社地区内にある本遺跡は、周知のごとく古代上毛野国の中枢地域に属し、本遺跡の主要遺構群である古墳、奈良・平安時代の住居址はこの関連の下に捉えるべきものであろう。また、今年度の発掘調査で検出された『三ッ寺型高坏』および山王廃寺（放光寺）創建時の瓦類は、来年度以降の調査に新たな方向性を与えるものと言えよう。今年度の調査箇所は台地の南端部分であったが、次年度は八幡川を望む最南端部分および北に広がる台地の中央部が調査対象に予定されている。道路建設に伴う限られた調査ではあるが、今回確認された『三ッ寺型高坏』および山王廃寺（放光寺）創建時の瓦類に関しても、より具体的な事実が判明するものと思われる。

（注１）元総社明神遺跡と居館址との関連については、元総社明神遺跡Ⅴ（前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986）において走行方位Ｎ－26°－Ｗ、深さ1.9ｍ、総延長32ｍ（部分）のＦＡ層を上層で含む溝（Ｗ－17）から、「大型高坏」（三ッ寺型高坏）や「赤彩が認められる高坏」、「祭祀的色彩が濃い須恵器大甕」の検出がみられながらも、Ｗ－17を「集落を画するもの」とのみ結論づけている。調査範囲が狭小であることと上部の削平から居館址自体の確認はできなかったが、Ｗ－17は居館址を画する溝と考えられる。

（注２）三ッ寺居館址の大型高坏がＦＡ下の出土である点については、発掘担当者の下城　正氏の御教授による。

参　考　文　献

群　　馬　　県（1988）　『群馬県史　資料編１　原始古代１』群馬県史編さん室

前　　橋　　市（1971）　『前橋市史　第１巻』前橋市史編さん委員会

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団（1988）　『群馬の考古学』

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団（1988）　『三ッ寺Ⅰ遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1986）　『元総社明神遺跡Ⅴ』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1989）　『熊野谷遺跡』

付編　大屋敷遺跡の野外地質観察

古環境研究所

1．はじめに

大屋敷遺跡の発掘調査に伴って、深掘トレンチが作成された。そこで野外地質観察を行い、ここで観察された地層について記載を行った。

2．大屋敷遺跡の周辺の地形と地質

大屋敷遺跡は、榛名火山南東麓に広がる相馬ケ原扇状地の扇端部に位置している。相馬ケ原扇状地は、約1.4万年前に榛名火山で発生した山体崩壊とそれに起因する岩屑なだれの流下堆積後に形成された火山麓扇状地である（早田,1990）。扇状地を構成する堆積物は、扇頂部では礫に富む砂礫層、扇央部から扇端部にかけては砂に富む砂礫層からなる。

相馬ケ原扇状地のうち扇頂部での離水は非常に早い段階に行われ、約1.3～1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間－板鼻黄色軽石（As－YP,新井,1962,町田ほか,1984）の降灰時には、すでに離水している。これに対して扇央部から扇端部にかけての離水年代は遅れ、As－YP降灰後も砂礫の堆積が続いたようである。またこの地域では砂礫の堆積後も完全な陸化は行われておらず、泥炭地が形成されたようである。この時に形成された泥炭層の中には、浅間－総社軽石（As－Sj,早田,1990）が検出される。元総社明神遺跡では、As－Sj直下の泥炭層から11,170±190y. B. P.（GaK－14760）の14C年代が獲られている（前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1990）ことから、この泥炭地が形成された年代は約1.1万年前前後と推定される。

泥炭層の堆積の後、再び扇状地性の地層が開始された。この堆積物は礫がわずかに含まれる砂層で、すでに形成されていた扇状地の扇央部から扇端部を覆って分布した。早田（1990）はこの堆積物を扇状地本体を構成する堆積物と区別するため、「総社砂層」と呼んだ。なお扇状地本体の堆積物は、狭義の「相馬ケ原扇状地堆積物」と呼んでいる。総社砂層の堆積終了時期について、地質学の手法による詳細な検討はまだ行われていない。

3．大屋敷遺跡の地質層序

大屋敷遺跡深掘トレンチで観察された地層を柱状図にして図1に示す。地層は大きく下位の成層した水成堆積物と、上位の土壌に区分される。水成堆積物は、下位より硬く締まった不淘汰な灰色砂礫層（層厚30cm以上）、褐色砂礫層（層厚21cm）、シルトと砂の互層（層厚17cm）、灰色砂礫層（層厚12cm）、シルトと砂の互層（層厚7cm）、葉理が発達した灰色砂層（層厚15cm）、シルトと砂の互層（層厚40cm）、灰色シルト質砂層（層厚21cm）の連続から構成される。これら一連の地層は、層相から相馬ケ原扇状地堆積物に対比される。含まれる礫は亜円礫で、その最大

径は62㎜である。

土壌は、下位より黒色黒ボク土（層厚27㎝）、黒褐色黒ボク土（層厚16㎝）、灰色軽石混じりの黒褐色黒ボク土（層厚29㎝）、砂質暗褐色黒ボク土の連続からなる。これらのうち灰色軽石はよく発泡しており、岩相から４世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As－C, 新井, 1979, 石川ほか, 1984）に同定される。最上位の暗褐色黒ボク土に含まれる「砂」は、淡褐色の細粒の軽石質粗粒火山灰からなる。このことから、このテフラは1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As－B, 新井, 1979）に同定される。

発掘調査では、黒褐色黒ボク土とその上位の灰色軽石（As－C）混じりの黒褐色黒ボク土から縄文時代中期以降奈良平安時代の遺物が検出されている。これらの遺物の層位は、テフラの降灰層準と大きく矛盾しない。

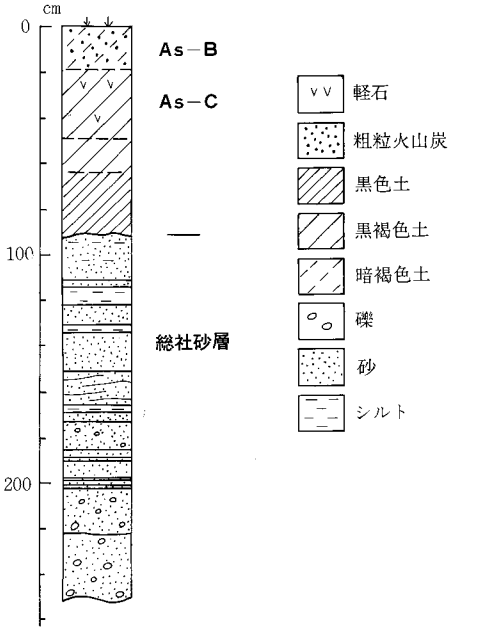


図１　大屋敷遺跡深堀トレンチの地質柱状図

４．ま と め

大屋敷遺跡深掘トレンチにおいて、地層の記載を行った。その結果大屋敷遺跡では、成層した厚い水成堆積物の上位に土壌が形成されていることが明らかになった。下位の水性堆積物は、総社砂層に対比される。また上位の土壌からは、浅間Ｃ軽石（４世紀中葉）と浅間Ｂテフラ（1108年）が検出された。

文　献

新井　房夫（1962）　関東盆地北西部地域の第４紀編年．群馬大学紀要，自然科学編，10，P．１－79.

新井　房夫（1979）　関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．
考古学ジャーナル，no．157，P．41－52.

石川正之助・井上　唯雄・梅沢　重昭・松本　浩一（1979）
火山堆積物と遺跡Ⅰ．考古学ジャーナル，no．157，P．３－40.

町田　　洋・新井　房夫・小田　静夫・遠藤　邦彦・杉原　重夫（1984）
テフラと日本考古学－考古学研究にと関係するテフラのカタログ－．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，P．865－928.

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1990）　元総社明神遺跡Ⅷ．P．116

早田　　勉（1990）　群馬県の自然と風土．群馬県史，通史編，１，P．35－129.

Tab. 3 古墳、奈良・平安時代 土器観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	挿図 Fig
1	H－1	土師坏	(13.4)	[4.8]	①細粒②良好③橙④1/3	内斜口縁。篦削り。	篦削り。		27
2	H－2	土師坏	13.0	3.4	①②③橙④4/5	内湾ぎみ。篦削り。	篦削り。	摩耗している。	27
3	H－2	須恵坏	12.4	3.8	①細粒②良好③緑灰④ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。		27
4	H－2	須恵椀	(11.6)	6.2	①②③灰白④1/2	やや内湾ぎみ。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。	二次焼成を受けている。	27
5	H－2	須恵壺	－	[13.8]	①②③明オリーブ灰④1/5	口縁部欠損。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。		27
6	H－4	手捏ね	7.9	4.4	①細粒②極好③にぶい橙④完形	外傾。指押さえ。	指押さえ。	全面に指頭痕あり。	27
7	H－4	須恵坏身	(13.6)	5.1	①粗粒②不良③灰④1/2	内傾。明瞭な外稜有り。	肥厚な底部を形成。		27
8	H－4	土師小甕	(11.6)	8.6	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	直立ぎみ。篦削り。			27
9	H－4	土師小甕	12.8	14.2	①細粒②不良③にぶい橙④ほぼ完形	外反。篦削り。			27
10	H－4	土師甑	(23.6)	31.7	①細粒②良好③淡黄④1/2	わずかに外反。篦削り。		口縁部に最大径を有する。	27
11	H－4	土師甕	(15.8)	[15.2]	①細粒②不良③明赤褐④1/4	外反。篦削り。			28
12	H－6	土師坩	10.4	6.2	①中粒②不良③明黄褐④完形	外傾。篦削り。	胴部に沈線による稜を形成。		28
13	H－6	土師台付甕	－	[4.6]	①粗粒②不良③オリーブ灰④1/5	欠損。	内面へ折り返し。	外面に刷毛目。	28
14	H－6	土師台付甕	－	[5.5]	①中粒②不良③灰黄④不明	欠損。	内面へ折り返し。	外面に刷毛目。	28
15	H－6	土師台付甕	－	[6.7]	①中粒②極好③暗赤褐④口縁部のみ	欠損。	内面へ折り返し。	外面に刷毛目。	28
16	H－8	土師坏	(14.0)	[4.6]	①細粒②不良③明褐灰④1/4	直立ぎみ。篦削り。	篦削り。	外稜を有する。	28
17	H－9	土師坏	13.0	3.5	①細粒②良好③橙④1/3	外反。篦削り。	篦削り。	外稜を有する。	28
18	H－10	土師坏	11.4	4.2	①細粒②良好③浅黄橙④3/4	直立ぎみ。篦削り。	篦削り。	外稜を有する。	28
19	H－10	土師甑	－	[3.6]	①細粒②極良③橙④底部のみ	欠損。欠損。	刺突による孔有り。		28
20	H－10	土師甕	(20.4)	37.7	①細粒②良③にぶい④4/5	外反。篦削り。	丸底、篦削り。	口縁部に最大径を有する。	28
21	H－10	土師甕	18.2	[23.0]	①細粒②不良③淡赤橙④1/3	外反。篦削り。	欠損。	口縁部に最大径を有する。	29
22	H－10	須恵甕	(21.6)	[15.0]	①中粒②極良③緑灰④1/6	外反。 頸部、波状紋。 胴部外面叩き目。 内面青海波を有する。			29
23	H－11	土師坏	(10.4)	3.2	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	内湾。篦削り。	篦削り。		28
24	H－11	土師坏	(11.2)	3.8	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	内湾。篦削り。	篦削り。		28
25	H－11	土師坏	12.4	5.1	①細粒②良好③橙④完形	緩やかに外反。篦削り。	篦削り。	外稜を有する。	28
26	H－11	土師坏	12.0	[5.5]	①細粒②良好③橙④5/6	緩やかに外反。篦削り。	篦削り。	外稜を有する。	29
27	H－11	土師坏	14.4	5.1	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	内斜口縁。篦削り。	篦削り。		29
28	H－11	土師坏	(17.4)	6.5	①細粒②良好③橙④1/2強	内湾。篦削り。	篦削り。		29
29	H－11	土師高坏	14.0	9.3	①細粒②良好③橙④3/4	緩やかに内湾。篦削り。	横撫で。	内面に暗紋状磨き。	29
30	H－11	土師壺	(18.0)	[7.6]	①中粒②良好③橙④口縁部1/2	有段口縁。横・縦方向の篦磨き。	欠損。		29
31	H－11	土師甕	15.8	28.7	①中粒②不良③にぶい橙④1/2	緩やかに外反。篦削り。		胴部に最大径を有する。	30
32	H－11	土師壺	(13.2)	20.4	①細粒②良好③赤橙④2/3	外反。篦削り。			30
33	H－11	土師甕	18.4	33.4	①中粒②良好③にぶい褐④ほぼ完形	外反。篦削り。		胴部に最大径を有する。	30
34	H－12	土師坏	(13.8)	5.4	①細粒②良好③橙④1/2	緩やかに外反。篦削り。	篦削り。	外稜を有する。	30
35	H－12	土師坏	12.8	4.7	①細粒②極良③橙④完形	緩やかに外反。篦削り。	篦削り。	外稜を有する。	30
36	H－12	土師坏	12.8	5.6	①細粒②良好③明赤褐④ほぼ完形	緩やかに外反。篦削り。	篦削り。	外稜を有する。	30
37	H－12	土師坏	(12.0)	5.2	①細粒②極良③橙④3/4強	緩やかに外反。篦削り。	篦削り。	外稜を有する。	31
38	H－12	土師坏	(12.5)	[5.6]	①細粒②良好③橙④1/4	緩やかに外反。篦削り。	篦削り。	外稜を有する。	31
39	H－12	土師坏	(12.0)	[5.3]	①細粒②極良③明赤褐④1/2	緩やかに外反。篦削り。	篦削り。	外稜を有する。	31
40	H－12	土師坏	(12.0)	6.5	①細粒②良好③明赤褐④2/5	内湾。篦削り。	篦削り。	内面に暗紋状磨き。	31
41	H－12	土師坏	14.6	8.3	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	内斜口縁。篦削り。	篦削り。	内面に暗紋状磨き。	31
42	H－12	土師高坏	(14.2)	9.9	①中粒②良好③橙④1/2	内斜口縁。篦削り。	横撫で。	内面に暗紋状磨き。	31
43	H－12	土師坩	10.0	13.4	①細粒②良好③赤橙④2/3	外傾、横撫で。暗紋。	篦削り。	外面縦方向の暗紋状磨き。	31
44	H－12	土師小甕	11.6	10.5	①中粒②不良③にぶい橙④4/5	直立、横撫で。篦削り。		胴部に最大径を有する。	31
45	H－12	土師小甕	11.6	16.8	①中粒②良好③淡赤橙④完形	短く外反。篦削り。		胴部に最大径を有する。	31
46	H－12	土師甕	17.4	[12.5]	①中粒②不良③にぶい黄橙④1/2	外反、横撫で。篦削り。	欠損。		31
47	H－12	土師大高坏	(28.2)	[12.6]	①細粒②極良③橙④1/3	外反ぎみ。横撫で。	欠損。	口唇部凹線を有す。	31
48	H－12	土師小甕	13.6	15.5	①中粒②良好③にぶい黄橙④ほぼ完形	外反、横撫で。篦削り。		胴部に最大径を有する。	32
49	H－12	土師甕	16.6	21.4	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外反で横撫で。篦削り。		胴部に最大径を有する。	32
50	H－12	土師甕	(13.0)	[16.0]	①細粒②極良③橙④1/2	短く外反。不定方向篦磨き。		内面に輪積痕。	32

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	挿図 Fig
51	H－12	土師甕	20.5	[11.5]	①細粒②良好③淡い赤橙④1/3	外反、横撫で。篦削り。	欠損。		32
52	H－12	土師甕	－	[22.1]	①中粒②良好③明赤褐④口縁部以外	欠損。篦削り。	摩耗が著しい。		32
53	H－12	土師坩	－	[12.3]	①粗粒②不良③橙④1/3	欠損。篦削り。	篦削り。		32
54	H－12	土師甑	20.4	24.2	①中粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	外反、横撫で。篦削り。		口唇部に凹線を有す。	33
55	H－12	土師甑	(22.2)	[16.5]	①細粒②極良③赤橙④1/5	外反、横撫で。篦削り。		胴部、指頭痕。	33
56	H－12	羽口	3.8	7.6	①中粒②良好③橙④完形	指撫で。	指撫で。		33
57	H－13	須恵羽釜	－	[5.7]	①細粒②良好③にぶい褐④口縁部のみ	直立、横撫で。轆轤。	欠損。		33
58	H－14	カワラケ	9.8	2.6	①細粒②良好③にぶい橙④4/5	外傾。轆轤。	右回転糸切り痕。		33
59	H－14	土師坏	(17.2)	4.7	①細粒②良好③橙④1/4	内湾、横撫で。篦削り。	篦削り。		33
60	H－14	須恵坏	9.6	2.6	①細粒②良好③オリーブ灰④ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。		33
61	H－14	須恵坏	10.4	3.1	①細粒②良好③灰④完形	内湾、横撫で。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。		33
62	H－14	須恵坏	9.7	3.7	①細粒②良好③灰白④2/3	直立、横撫で。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。		33
63	H－14	須恵坏	(9.6)	[3.3]	①細粒②良好③褐灰④1/2	直立、横撫で。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。		33
64	H－14	土師高坏	11.5	5.4	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外傾、横撫で。篦削り。	篦削り。	外稜を有す。	33
65	H－14	須恵椀	(17.8)	7.2	①細粒②良好③緑灰④1/3	外傾。轆轤。	回転糸切り後調整。	高台後付け。	33
66	H－14	土師甕	－	[16.5]	①中粒②良好③黄橙④1/4	欠損。篦削り。	胴部内面指圧痕。		34
67	H－14	須恵大甕	(22.2)	44.9	①細粒②極良③緑灰④1/3	外反。外面に叩き目。	丸底。	胴部内面青海波。	34
68	H－15	土師坏	10.7	3.3	①細粒②良好③にぶい赤褐④ほぼ完形	内湾、横撫で。篦削り。	篦削り。		34
69	H－15	須恵坏	9.0	3.3	①細粒②極良③暗緑灰④ほぼ完形	直線的に外傾。轆轤。	右回転篦切り。		34
70	H－16	須恵高台椀	13.4	4.8	①中粒②良好③橙④3/4	端部外反。轆轤。	回転糸切り痕。	高台後付け。	34
71	H－16	須恵高台椀	12.8	4.4	①中粒②良好③灰白④ほぼ完形	端部外反。轆轤。	右回転糸切り痕。	高台後付け。ススト付着。	34
72	H－16	須恵高台椀	(13.0)	4.9	①細粒②極良③灰黄褐④3/4	端部外反。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。	高台後付け。	34
73	H－17	土師高坏	(8.0)	[11.6]	①細粒②極良③橙④脚部2/3のみ	欠損。脚部に暗文。			34
74	H－17	土師甑	(21.6)	22.9	①中粒②良好③橙④脚部1/2	「く」の字状口縁。篦削り。		口縁部に最大径を有す。	35
75	H－18	土師坏	(12.5)	[4.8]	①細粒②良好③にぶい橙④1/3	やや内湾。外稜有り。	篦削り。		35
76	H－18	土師坏	(13.4)	[4.2]	①細粒②良好③灰褐④1/3	やや内湾。外稜有り。	篦削り。	内部まばらな暗文有り。	35
77	H－18	土師甕	16.8	28.4	①中粒②良好③明黄褐④ほぼ完形	外反。縦方向篦削り。	篦削り。	胴部に最大径を有す。	35
78	H－18	土師甕	19.6	[31.5]	①中粒②良好③にぶい橙④2/3	短く外反。縦方向篦削り。	欠損。	口縁部に最大径を有す。	35
79	H－22	土師坏	12.5	4.5	①中粒②良好③赤褐④4/5	やや内湾、横撫で。	篦削り。	内面放射状暗文有り。	35
80	H－22	土師坏	(13.4)	4.2	①細粒②極良③橙④1/2	内斜口縁。横撫で。	篦削り。	内面放射状暗文有り。	35
81	H－22	土師坏	13.7	5.3	①細粒②良好③赤褐④ほぼ完形	内斜口縁。横撫で。	篦削り。	内面放射状暗文有り。	36
82	H－22	土師甕	－	[6.1]	①中粒②良好③明赤褐④1/6	欠損。篦削り。		ほとんど底部のみ残存。	36
83	H－24	土師坏	(11.4)	3.5	①細粒②不良③にぶい赤褐④1/2	やや外傾。横撫で。	全体にひび割れ。	全体に粗雑なつくり。	36
84	H－24	土師坏	(13.6)	4.0	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	内湾、横撫で。篦削り。	篦削り。	底部の削りが目立つ。	36
85	H－24	土師坏	(14.4)	3.9	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	直線的に外傾。篦削り。	篦削り。	内面放射状暗文有り。	36
86	H－24	須恵坏蓋	(17.0)	2.8	①細粒②極良③灰黄④1/2	天井部のつまみに右回転糸切り痕。	口縁部の返り消失。	外面に自然釉。	36
87	H－25	土師坏	10.8	3.6	①細粒②良好③橙④2/3	内湾、横撫で。	篦削り。		36
88	H－27	土師坏	12.2	7.5	①細粒②良好③明赤褐④1/2	内斜口縁。篦削り。	篦削り。	内面放射状暗文有り。	36
89	D－1	須恵坏身	10.4	4.6	①細粒②良好③緑灰④1/2	内傾。稜は短い。	回転篦調整。	口縁端部に凹線。	36
90	X47Y76	土師坏	13.8	3.5	①細粒②良好③にぶい褐④ほぼ完形	直立、横撫で。	篦削り。		36
91	X48Y76	須恵高台椀	(16.0)	8.7	①細粒②極良③褐灰④1/3	外傾。轆轤。	回転糸切り後調整。	高台後付け。	36
92	X51Y75	須恵高台椀	14.5	5.9	①中粒②良好③にぶい黄橙④3/4	直線的に外傾。轆轤。	回転糸切り痕。	高台後付け。	36
93	X58Y76	須恵高台椀	12.4	4.6	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	端部わずかに外反。轆轤。	右回転糸切り痕。	高台後付け。	36
94	C区覆土	須恵坩	(8.0)	8.8	①細粒②極良③灰白④1/3	やや内湾。轆轤。	回転篦調整。	底部肥厚	36

観察表　註）表の記載は以下の基準で行った。

1．胎土は細粒（0.9㎜以下）、中粒（1.0～1.9㎜）、粗粒（2.0㎜以上）とし、特殊な鉱物が入る場合に鉱物名を記載。

2．焼成は極良・良好・不良の３段階評価。

3．色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1976）によった。

4．大きさ、重さの単位はそれぞれ㎝、ｇであり、現存値を［ ］、復元値を（ ）で示した。

Tab. 4 瓦 観 類 察 表

No.	出土地	瓦の種別	厚さ(cm)	胎土 素地	胎土 夾雑物	焼成 焼き上り	焼成 色調	成形技法 粘土版剥取 凹面	成形技法 粘土版剥取 凸面	成形技法 作り	成形技法 桶寄木痕	成形技法 粘土版合せ目	成形技法 布の合せ目	成形技法 叩目	整形技法 轆轤痕	整形技法 篦削	整形技法 布の擦消 凹面	整形技法 布の擦消 凸面	整形技法 側部面取	摘要	Fig
1	H－2	女瓦	1.9	密	少	硬	灰白			桶巻	○				○轆轤					秋間	37
2	H－2	女瓦	1.4	密	少	硬	灰	○		桶巻	○	○S			○轆轤					秋間	37
3	H－7	女瓦	1.9	密	少	硬	灰褐			一作										藤岡	37
4	H－8	女瓦	2.1	並	並	硬	灰白	○		桶巻	○		○		轆轤					秋間	37
5	H－9	女瓦	2.4	密	少	締	灰			桶巻	○				轆轤		○		側3	秋間	37
6	H－9	男瓦	1.2	密	少	硬	灰白			半截					轆轤					秋間	37
7	H－14	女瓦	2.7	密	少	硬	暗灰	○		桶巻	○			縄単	轆轤				端1	秋間	37
8	H－14	男瓦	1.2	密	少	締	暗灰			半截		○S							側2	秋間	37
9	H－14	男瓦	1.1	密	少	締	暗灰			半截			○							秋間	37
10	H－14	女瓦	1.5	並	少	硬	灰白			桶巻	○			平行						秋間	37
11	H－14	女瓦	1.7	密	少	硬	灰			桶巻	○			縄単						秋間	37
12	H－16	女瓦	1.4	密	少	硬	灰	○		桶巻	○				轆轤					秋間	37
13	石敷遺構	女瓦	2.2	密	少	締	灰	○		桶巻	○				轆轤					秋間	37
14	石敷遺構	女瓦	1.5	密	少	締	灰	○		桶巻	○			縄単密						秋間	38
15	石敷遺構	女瓦	1.9	並	少	硬	黄灰	○		桶巻				轆轤				単3		秋間	38
16	石敷遺構	女瓦	2.5	密	並	硬	灰			桶巻					轆轤		○			秋間	38
17	石敷遺構	女瓦	2.1	密	少	締	灰			桶巻	○				轆轤					秋間	38
18	石敷遺構	女瓦	1.6	密	少	硬	灰褐			桶巻					縦篦撫					乗附	38
19	O－1	女瓦	1.2	密	少	硬	灰			桶巻	○				轆轤				端2	秋間	38
20	O－1	男瓦	1.2	並	少	軟	灰白			紐作		○Z			轆轤				端2	秋間	38
21	X51-Y77	女瓦	2.1	並	少	軟	黄灰		○	桶巻					轆轤縦撫					乗・藤	38
22	X52-Y77	男瓦	1.2	密	少	硬	灰	○		半截			○	縄密轆轤撫	轆轤					秋間	38
23	X51-Y80	女瓦	1.9	密	少	締	灰	○		桶巻		○Z			轆轤					秋間	38
24	X51-Y82	熨斗瓦	2.0	密	少	硬	灰					○Z			轆轤				側5	秋間	38
25	X56-Y76	女瓦	2.0	並	少	硬	黒灰			一か							○			笠懸	38
26	C区フク土	女瓦	2.3	密	少	締	灰	○		桶巻	○	○Z			轆轤				側2	秋間	38

大屋敷遺跡出土の瓦類について

木 津 博 明 （財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団）

大屋敷遺跡の発掘調査の出土遺物中に瓦類が26点あった。筆者は、市教育委員会より『元総社明神遺跡』同様に、瓦類の観察依頼を受けた。観察の方法・趣旨は元総社明神遺跡と同一であるので同書を参照して戴きたい。今次の調査は、後年も継続調査が実施される予定であるのと、それに伴い瓦類の出土も見込まれる為、以下には、観察一覧表と特に指摘出来ることに就いて記述しておく。

出土した瓦類は、広義の“山王＝秋間系”瓦が大半であるものの、国分寺創建瓦が１点含まれている。この“山王＝秋間系”が大半を占める要因として、大屋敷遺跡の立地に最大要因が因在する。この立地とは、大屋敷遺跡は、八幡川と天狗岩用水が合流する地帯である。近接する遺跡には、総社古墳群と八幡川を隔て至近の位置に放光寺跡（山王廃寺）が位置している。だが、「放光寺」（山王廃寺）の西側に近接する国分境遺跡では、“山王＝秋間系”より、国分寺系瓦が主体を占めるという相反する実態がある。この両者の在り方は、「放光寺」（山王廃寺）と係わり方に内在すると考えられる。則、大屋敷遺跡は、「放光寺」（山王廃寺）と密接な関係にあったことを物語ている。

今次の報告では、上記の点を指摘するに留め、今後の新たな発見に期待したい。

註１，大江正行「田端遺跡出土の瓦類について」『田端遺跡』財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　昭和61年

註２，拙稿「周辺遺跡」『上野国分僧寺・尼寺中間地域３』財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　昭和62年、「古代群馬郡考」『群馬文化』

Tab. 5 縄文土器観察表

番号	出土位置	①胎土	②焼成	③色調	④残存	文様要素	文様構成・器形の特徴	備考
1	表採	①中粒(金雲母)	②極良	③にぶい褐	④胴部	微隆起 平行沈線	大屋敷遺跡の縄文土器構成は、大きく分けて阿玉台式・加曽利E式・称名寺I式に分類される。 阿玉台式土器（1・2）には、大きな目印となる金雲母が、胎土に含まれている。（2）は微隆起上に刻みが入り、その周囲に2列の縦長の刺突を持つ。 加曽利E式土器（3～27）は、そのほとんどをE4式に細分できる。（3）は、細分は避けたが、撚糸文を持ちこの時期では類例は稀な存在である。（4）は、2条の微隆起を持つE3式に分類できる。 さて、E4式の文様構成は、主に4つに分けられる。①微隆起とその区画内に縄文を充填するもの、②沈線文とその区画内に縄文を充填するもの、③条線、④集合沈線である。その中で中心となるものは、①と②であり、これでその大多数を占める。（7）は、微隆起上に縄文が入る。(16) は文様構成に刺突が加わる。称名寺式との関連も考えられるが、縦長の刺突であることから加曽利E式に分類した。(25) は、口縁部に微隆起を持ちその下に縄文と沈線区画を入れている。沈線区画を内は無文となっている。 称名寺I式は3点のみの出土である。(28・29) は口縁に特徴的な2列の円形刺突を持つ。さらに (29) は、その下に沈線による区画を持ち縄文を充填している。(30) は、胴部に刺突が入る。	阿玉台
2	X48Y77	①中粒(金雲母)	②極良	③にぶい赤褐	④胴部	微隆起 刺突		阿玉台
3	X46Y77	①細粒	②良好	③にぶい黄褐	④胴部	撚糸文		加曽利E
4	X47Y76	①細粒(白色鉱物)	②良好	③にぶい黄褐	④胴部	微隆起 縄文LR		加曽利E3
5	表採	①中粒	②良好	③にぶい黄橙	④胴部	集合沈線		加曽利E4
6	X46Y77	①中粒(黒雲母)	②良好	③橙	④口縁	沈線 縄文RL		加曽利E4
7	X44Y76	①中粒	②良好	③にぶい黄橙	④口縁	微隆起 縄文RL		加曽利E4
8	X47Y76	①中粒(白色鉱物)	②不良	③黄褐色	④胴部	微隆起 縄文LR		加曽利E4
9	X47Y76	①細粒(白色鉱物)	②良好	③浅黄	④口縁	沈線 縄文LR		加曽利E4
10	X47Y76	①中粒(石英)	②不良	③にぶい黄褐	④口縁	微隆起 縄文LR		加曽利E4
11	X47Y77	①中粒(石英)	②良好	③明黄褐	④口縁	沈線 条線		加曽利E4
12	X50Y75	@中粒	②良好	③にぶい黄橙	④胴部	条線 沈線 縄文LR		加曽利E4
13	X47Y76	①中粒	②良好	③明黄褐	④胴部	微隆起 縄文LR		加曽利E4
14	表採	①細粒	②良好	③にぶい黄褐	④口縁	微隆起 縄文LR		加曽利E4
15	X47Y76	①細粒(白色鉱物)	②極良	③明黄褐	④胴部	微隆起 縄文LR		加曽利E4
16	X47Y76	①中粒(白色鉱物)	②良好	③にぶい褐	④口縁～胴部	微隆起 縄文LR		加曽利E4
17	X46Y77	①中粒	②良好	③にぶい黄褐	④胴部	縄文RL		加曽利E4
18	X48Y77	①細粒(白色鉱物)	②良好	③にぶい黄褐	④把手	刺突 沈線 縄文LR		加曽利E4
19	表採	①細粒	②極良	③明褐	④胴部	沈線 縄文RL		加曽利E4
20	X47Y76	①細粒	②良好	③明黄褐	④胴部	微隆起 縄文LR		加曽利E4
21	表採	①中粒	②不良	③浅黄	④胴部	集合沈線		加曽利E4
22	X48Y77	①細粒(石英)	②良好	③浅黄	④口縁	羽状縄文上段RL下段LR		加曽利E4
23	表採	①細粒	②良好	③にぶい黄橙	④口縁	沈線 縄文RL		加曽利E4
24	表採	①中粒(石英)	②良好	③明黄褐	④口縁	集合沈線		加曽利E4
25	X47Y77	①中粒	②不良	③にぶい黄	④胴部	集合沈線		加曽利E4
26	X48Y77	①中粒(石英)	②良好	③にぶい黄褐	④口縁	微隆起 沈線 縄文LR		加曽利E4
27	表採	①中粒(石英)	②極良	③明黄褐	④胴部	沈線 縄文RL		加曽利E4
28	X46Y76	①細粒	②極良	③にぶい褐	④胴部	沈線 縄文LR		加曽利E4
29	表採	①中粒	②良好	③にぶい黄褐	④胴部	渦巻文 縄文LR		加曽利E4
30	X46Y77	①細粒	②極良	③橙	④口縁	刺突		称名寺I
31	X46Y76	①細粒(黒雲母)	②良好	③橙	④口縁	刺突 沈線 縄文LR		称名寺I
32	X48Y77	①細粒	②不良	③にぶい黄褐	④胴部	刺突 縄文RL		称名寺I

註）表の記載は以下の基準で行った。

① 胎土は、細粒（0.9㎜以下）、中粒（1.0～1.9㎜）、粗粒（2.0㎜以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載。

② 焼成は、極良・良好・不良の三段階。

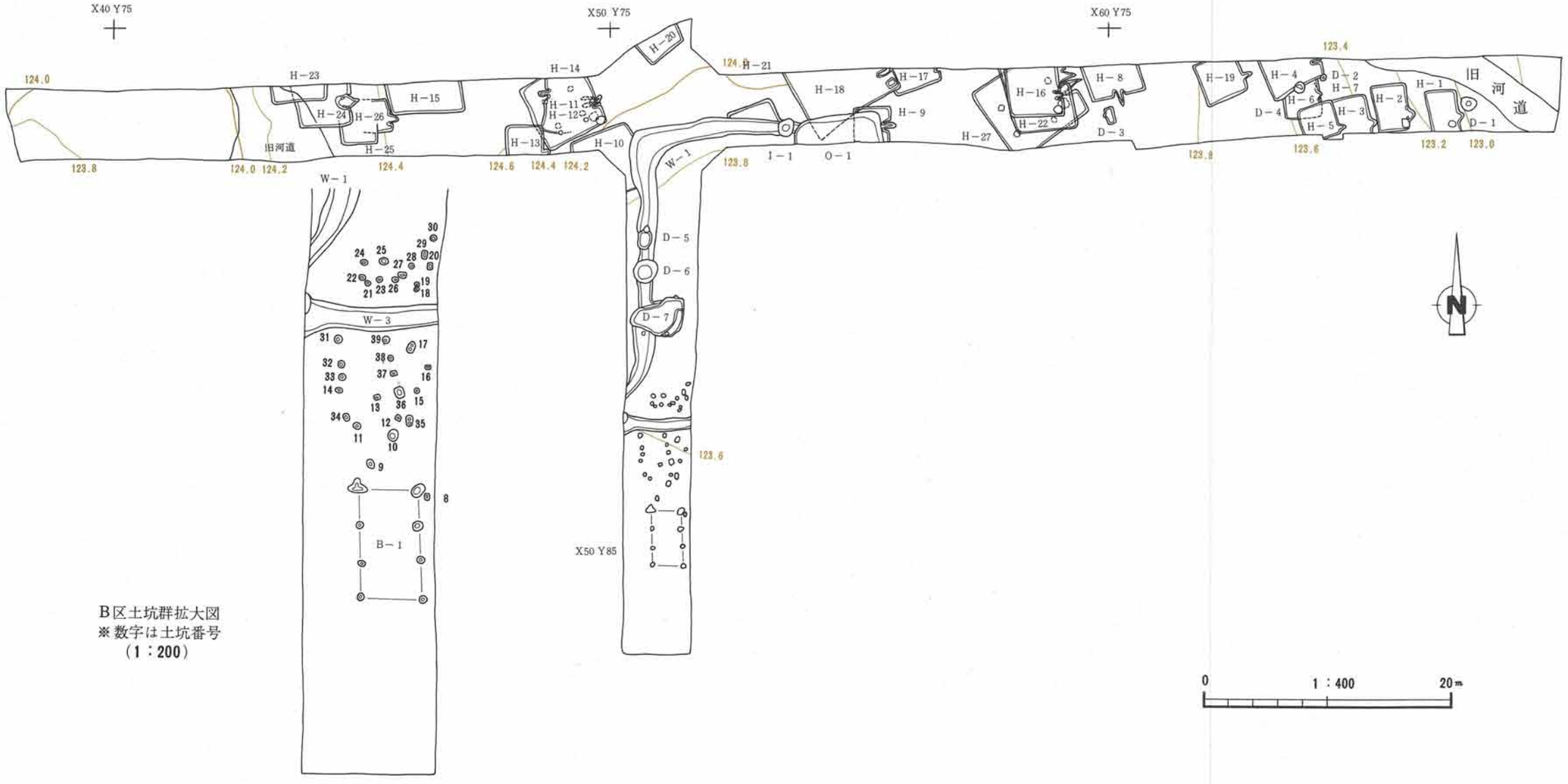
③ 色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳（小山・竹原1976）によった。

④ 残存は復元個体に限って記載。その他の小片については所属部位を記載した。

Tab. 6　石器・石製品観察表

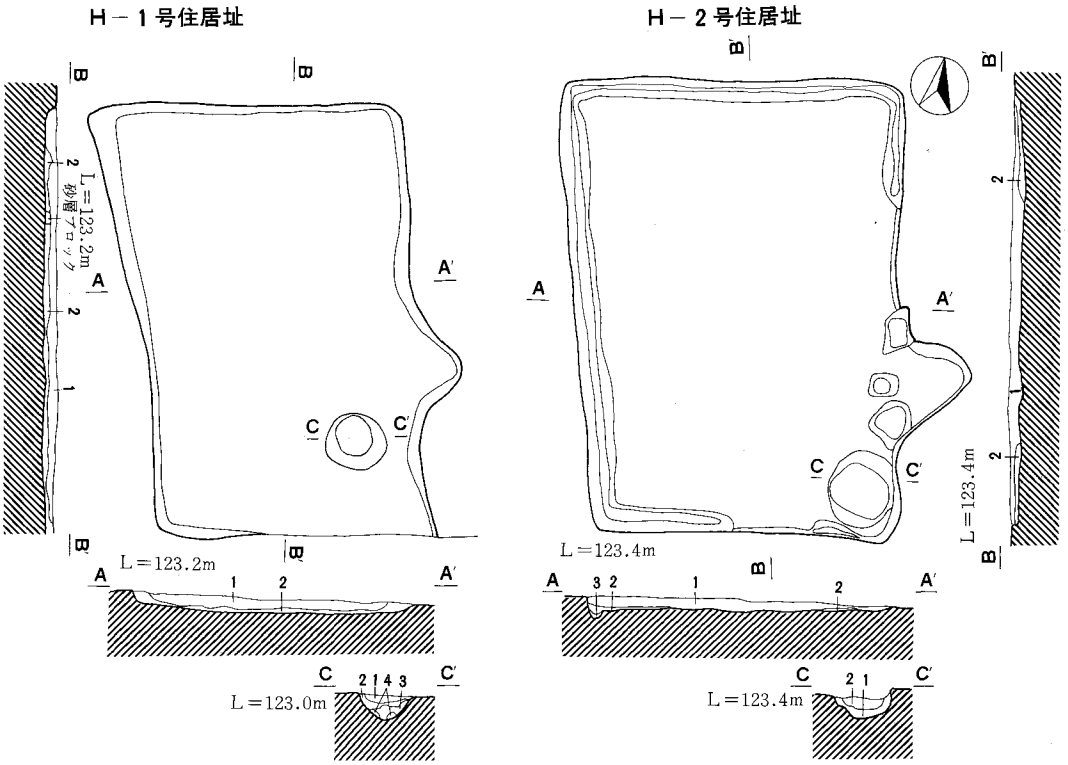
番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	備考	
1	X47Y77	石鏃	[1.5]	[1.5]	[0.3]	[0.5]	黒曜石	先端部と左側縁の欠損。	縄文石器
2	X49Y75	石鏃	[2.2]	[1.0]	[0.3]	[0.7]	変玄武岩	右側縁と先端部のの欠損。凹基無茎鏃。	
3	X48Y77	石鏃	2.6	[1.9]	0.3	[1.4]	チャート	幅広な凹基無茎鏃の右側縁の欠損品。	
4	X47Y77	削器	2.1	6.0	0.7	7.8	頁岩	上端に自然面を残す。	
5	X51Y79	削器	[5.3]	[3.9]	0.7	[25.0]	黒色頁岩	打製石斧の欠損を再利用したもの、欠損部にも細かい調整を加える。	
6	X50Y77	削器	[5.9]	5.8	0.7	[27.8]	黒色頁岩	凹基無茎鏃の先端部の欠損品。	
7	X46Y76	打製石斧	[3.5]	[3.6]	[0.7]	[11.0]	ホルンフェルス	胴部～刃部の欠損。基部上端に自然面を残す。	
8	X50Y83	打製石斧	[6.9]	[4.9]	1.6	[67.2]	珪質頁岩	基部の欠損。表面に自然面が見られる。短冊型	
9	X47Y77	打製石斧	[5.8]	5.1	1.3	[71.0]	変質玄武岩	基部の欠損。裏面に使用痕が見られる。表面に自然面を残す。	
10	X47Y76	打製石斧	[7.1]	4.5	1.4	[5.2]	細粒安山岩	刃部の一部と基部の欠損。表面に自然面が見られる。撥型打製石斧。	
11	X54Y76	打製石斧	14.7	5.8	1.3	210.0	ホルンフェルス	大型の横長剥片を利用。器体上部が内湾。基部上端に自然面を残す。	
12	H－17	敲石	[4.9]	[7.8]	[6.0]	[348.0]	粗粒安山岩	敲石・凹石・磨石・石皿は、14点出土した。これらは、そのほとんどが古墳時代の住居址からの出土である。縄文時代の石器を古墳時代に転用する場合も十分考えられるので、出土位置は住居址番号とした。 敲石は、偏平の楕円礫を使用し上下両方もしくは片方に敲打痕が観察できるものが中心である。その中で（13）は、楕円礫の偏平面に敲打痕が来る。（21）は楕円礫の長辺端部を使用せず短辺の両端に敲打痕が見られる。 石材は、14点中8点と半数以上が粗粒安山岩で占められる。（15）は雲母石英片岩を使用し三波石系統のものである。	
13	X48Y76	敲石	[7.1]	7.0	2.6	[223.0]	粗粒安山岩		
14	H－9	敲石	[7.9]	6.2	5.3	[424.0]	粗粒安山岩		
15	H－13	敲石	[11.0]	4.1	1.6	[111.0]	雲母石英片岩		
16	H－25	敲石	12.1	4.3	3.2	235.0	粗粒安山岩		
17	H－10	敲石	13.2	6.6	3.7	510.0	石英閃緑岩		
18	H－22	敲石	14.8	6.3	4.2	510.0	ホルンフェルス		
19	H－10	敲石	14.4	6.6	4.5	570.0	粗粒安山岩		
20	H－22	敲石	13.9	8.3	4.2	550.0	粗粒安山岩		
21	H－18	敲石	12.7	9.3	4.9	580.0	粗粒安山岩		
22	H－18	敲石＋凹石	14.5	5.8	3.5	419.0	ひん岩		
23	H－10	凹石	[10.2]	[7.7]	[4.1]	[249.1]	粗粒安山岩		
24	H－9	磨石	10.1	[6.6]	3.2	[414.0]	石英閃緑岩		
25	H－15	石皿	[6.5]	[8.0]	[3.8]	[232.0]	粗粒安山岩		
26	X51Y80	磨石＋凹石	8.6	6.5	2.3	146.0	二ツ岳軽石	古墳時代以降の石器は、二ツ岳の軽石を使用した磨石＋凹石（26）と蜂の巣石（36）の2点である 。いずれも加工が容易なことから軽石が利用されたのであろうが、時代の違いをよく物語っている。 石製品は、H－11号住居址からは臼玉が、H－12・27号住居址からは剣形品が出土しており、これ以外の住居址からは出土していない。このようなことから、3軒の関係が注目される。 （35）は五輪塔で、火輪の部分である。この石材も二ツ岳軽石を使用している。	古墳時代以降
27	H－11	臼玉	0.7	0.7	0.3	0.2	滑石質蛇紋岩		
28	H－27	剣形品	[1.7]	[2.0]	[2.5]	[2.1]	緑色片岩		
29	H－12	剣形品	3.6	2.5	0.5	6.3	滑石		
30	H－12	剣形品	[2.0]	[1.3]	[0.4]	[9.2]	滑石		
31	X61Y77	紡錘車	[1.5]	[3.2]	[2.1]	[9.2]	滑石		
32	B区フク土	砥石	[5.1]	2.2	1.5	[26.2]	流紋岩		
33	H－9	石臼	[9.5]	[2.5]	[4.4]	[126.0]	粗粒安山岩		
34	I－1	石臼	[10.8]	[8.4]	[7.9]	[900.0]	粗粒安山岩		
35	H－15	五輪塔	[8.3]	[23.8]	[8.2]	[1100.0]	二ツ岳軽石		
36	X47Y76	蜂の巣石	247.0	33.4	17.0	18500.0	二ツ岳軽石		

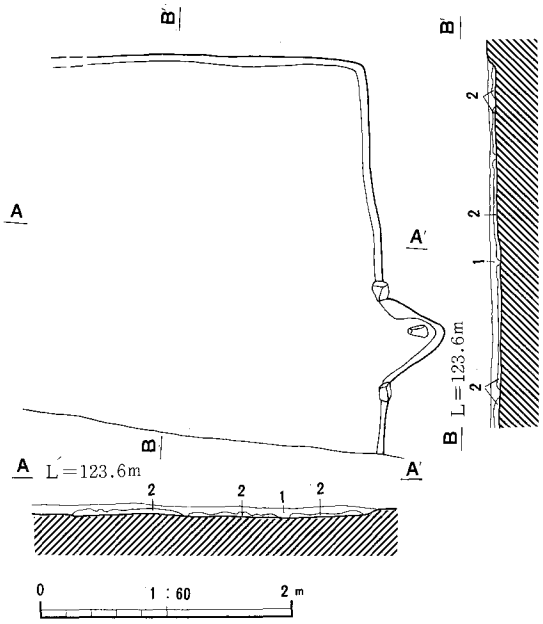
註）表の記載で、大きさと重さについての単位は㎝、gであり、現存値は［ ］で示した。
　1～25は、縄文時代の石器。26～36は、古墳時代以降の石器もしくは石製品である。



B区土坑群拡大図
※数字は土坑番号
（1：200）

Fig. 8　遺跡遺構全体図





H－1号住居址

1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締まりあり。
　　Hr－FP10%、As－Cともに5%含む。

2　層　褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。砂層を10%含む。

H－1号住居址P1

1　層　褐色細砂層　粘性あり、締まりあり。
　　二次堆積のAs－C20%（φ3㎜）、炭化物粒5%含む。

2　層　にぶい褐色細砂層　粘性あり、締まりあり。
　　As－C5%、炭化物粒、焼土粒若干含む。

3　層　褐色細砂層　粘性あり、締まりあり。
　　総社砂層10%、炭化物粒若干含む。

4　層　明褐色微砂層　総社砂層20%、炭化物粒若干含む。

H－2号住居址

1　層　褐色細砂層　粘性強、締まり強。
　　As－C10%、白色鉱物若干含む。

2　層　暗褐色細砂層　粘性強、締まり強。炭化物5%含む。

3　層　暗褐色細砂層　粘性強、締まり強。
　　As－Cをわずかに含む。

H－2号住居址P1

1　層　黒褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
　　灰30%、焼土10%含む。

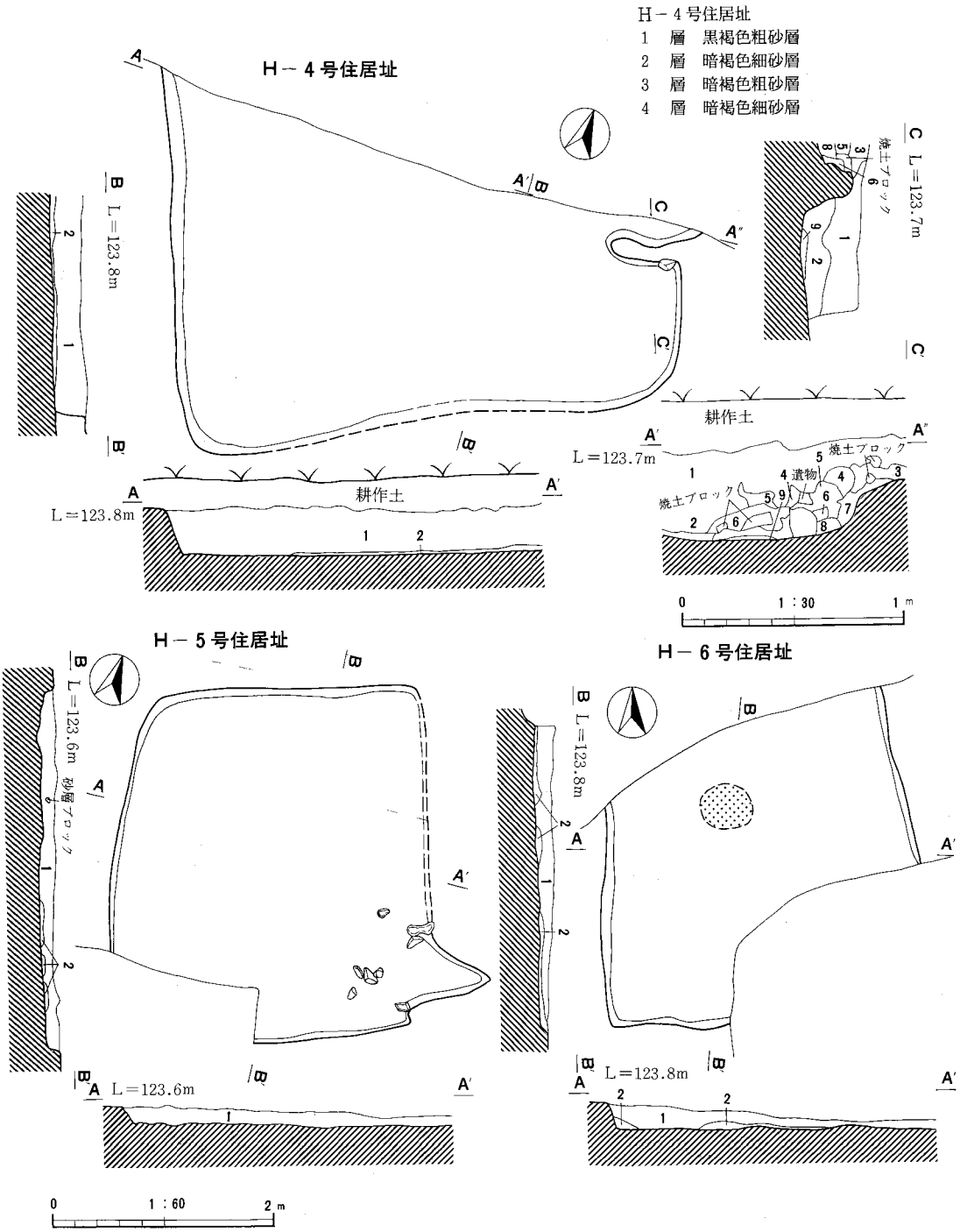
2　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締まりあり。
　　灰20%、焼土5%含む。

H－3号住居址

1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締まりあり。
　　Hr－FP5%含む。

2　層　褐色砂層　粘性弱　締まり強。
　　砂層まじり。

Fig. 9　H－1～3号住居址



H－4号住居址竈

1　層　黒褐色粗砂層　粘性弱、締まり強。
2　層　暗褐色細砂層　粘性あり、締まり強。
3　層　暗褐色粗砂層　焼土ブロック10％、Hr－FP若干、As－C５％含む。
4　層　にぶい黄褐色細砂層　砂層50％、焼土ブロック５％、As－C５％含む。
5　層　暗褐色細砂層　焼土ブロック30％、As－C５％、砂層10％含む。
6　層　褐色細砂層　砂層30％、焼土ブロック５％、As－C５％含む。
7　層　暗褐色粗砂層　焼土ブロック10％含む。
8　層　黒色細砂層　灰、炭中心(70％以上)。焼土ブロック５％含む。
9　層　赤褐色微砂層　焼土中心。

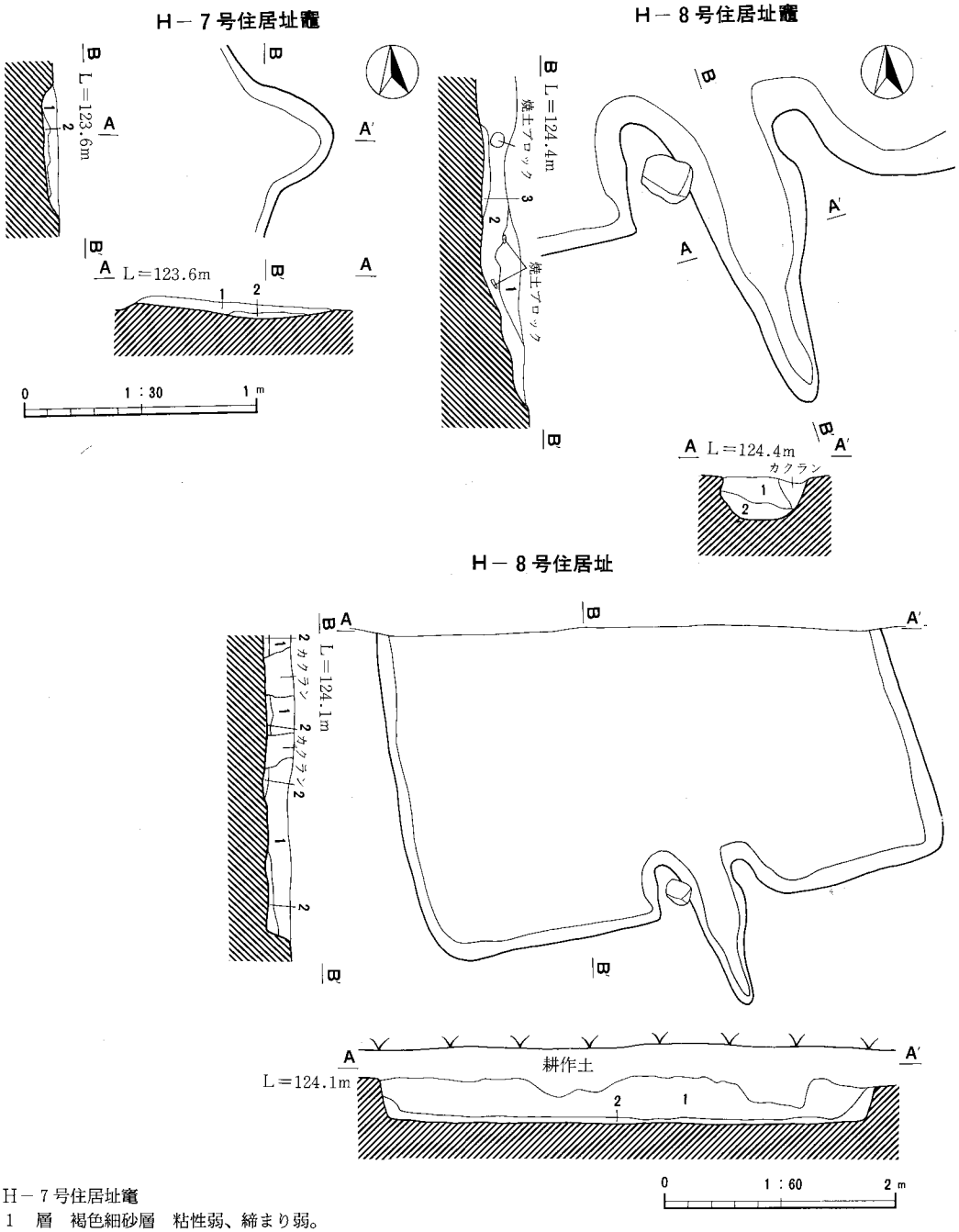
H－5号住居址

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層

H－6号住居址

1　層　黒褐色粗砂層
2　層　暗褐色細砂層

Fig.10　H－4～6号住居址

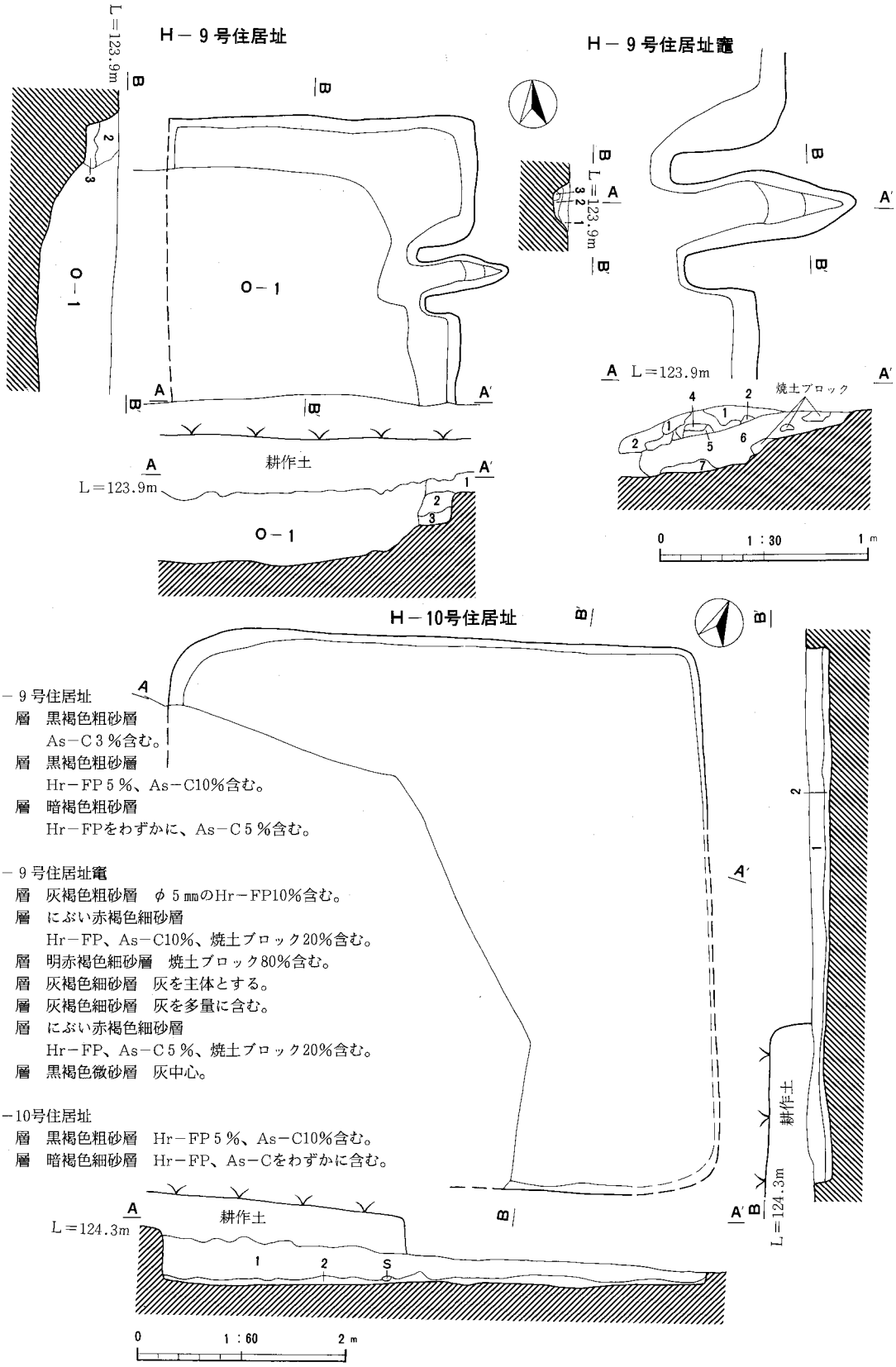


H－7号住居址竈
1　層　褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
　　焼土10%、炭をわずかに含む。
2　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締まりあり。
　　焼土5%、炭、灰をわずかに含む。

H－8号住居址
1　層　褐色粗砂層　粘性あり、締まりあり。
　　φ5㎜のHr－FP40%、φ2～3㎜のAs－C10%、
　　焼土粒若干含む。
2　層　暗褐色細砂層　粘性あり、締まり強。
　　φ3㎜のHr－FP10%、焼土粒、炭化物粒若干含む。

H－8号住居址竈
1　層　極暗赤褐色粗砂層　粘性あり、締まり弱。
　　焼土ブロック20%含む。
2　層　極暗褐色粗砂層　粘性あり、締まり弱。
　　焼土ブロック10%、灰10%、As－Cをわずかに含む。
3　層　暗赤褐色細砂層　粘性弱、締まりあり。
　　焼土粒60%含む。

Fig.11　H－7・8号住居址

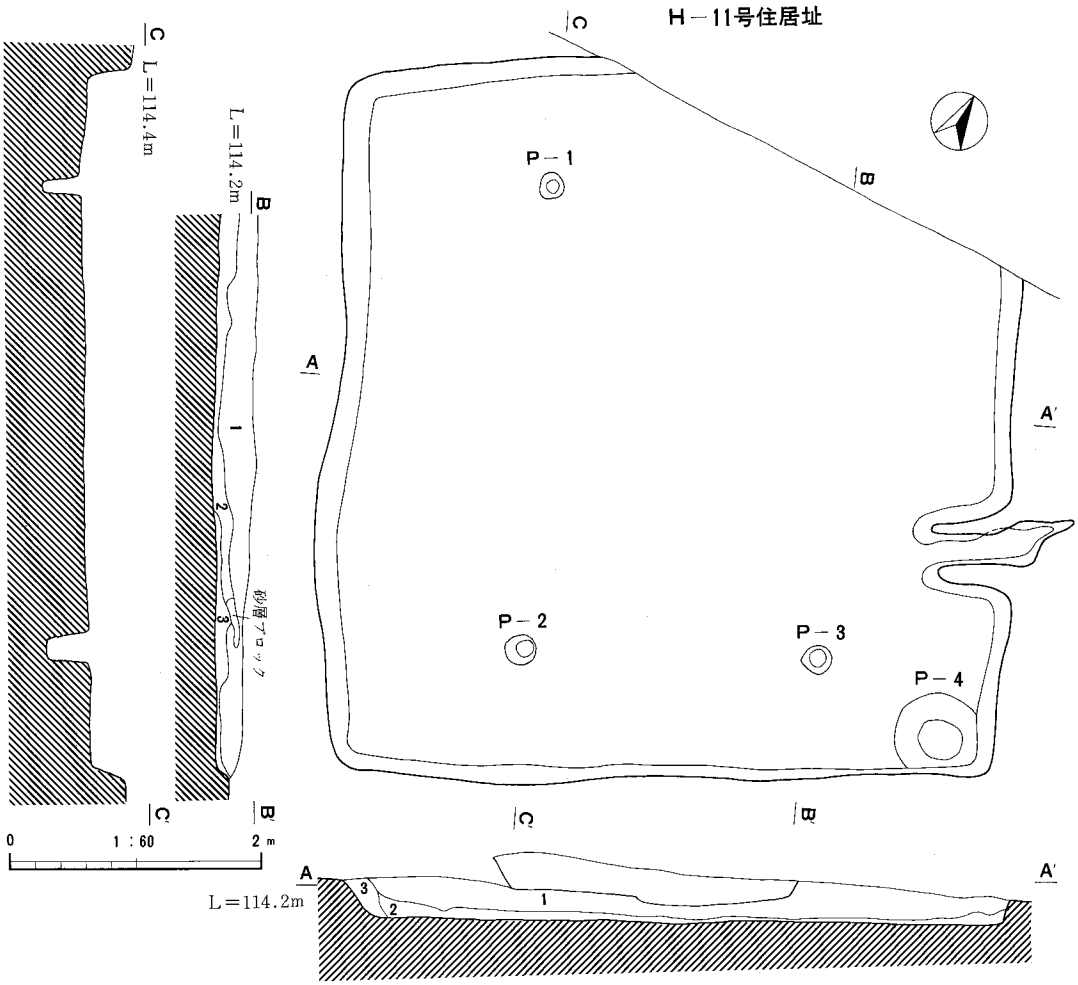


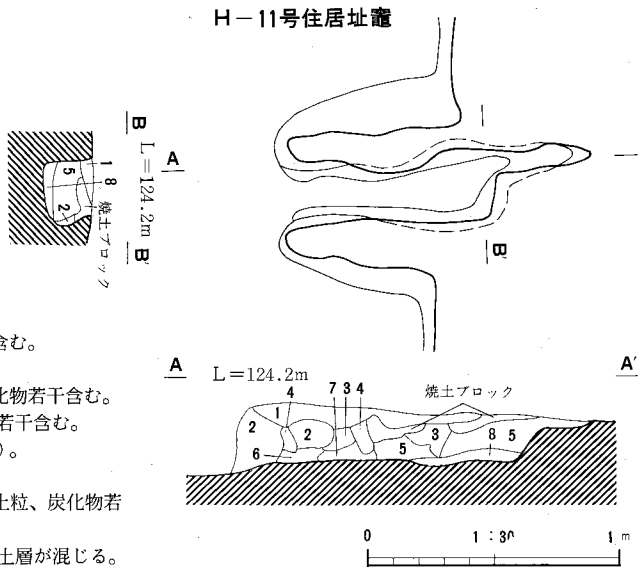
H－9号住居址
1　層　黒褐色粗砂層
　　As－C 3％含む。
2　層　黒褐色粗砂層
　　Hr－FP 5％、As－C10％含む。
3　層　暗褐色粗砂層
　　Hr－FPをわずかに、As－C 5％含む。

H－9号住居址竈
1　層　灰褐色粗砂層　φ 5 mmのHr－FP10％含む。
2　層　にぶい赤褐色細砂層
　　Hr－FP、As－C10％、焼土ブロック20％含む。
3　層　明赤褐色細砂層　焼土ブロック80％含む。
4　層　灰褐色細砂層　灰を主体とする。
5　層　灰褐色細砂層　灰を多量に含む。
6　層　にぶい赤褐色細砂層
　　Hr－FP、As－C 5％、焼土ブロック20％含む。
7　層　黒褐色微砂層　灰中心。

H－10号住居址
1　層　黒褐色粗砂層　Hr－FP 5％、As－C10％含む。
2　層　暗褐色細砂層　Hr－FP、As－Cをわずかに含む。

Fig.12　H－9・10号住居址





H－11号住居址

1　層　褐色細砂層
　　Hr－FP 5 %、炭化物粒10%含む。

2　層　にぶい褐色細砂層
　　総社砂層ブロック（φ10㎜）をまばらに10%含む。

3　層　暗褐色細砂層
　　Hr－FP 5 %、As－C 5 %、焼土粒、炭化物を若干含む。

H－11号住居址竈

1　層　暗赤褐色粗砂層
　　φ 5 ㎜のHr－FP20%、焼土粒10%含む。

2　層　にぶい橙色粗砂層
　　φ10㎜のHr－FP、As－C20%、炭化物若干含む。

3　層　暗赤褐色細砂層　焼土粒、炭化物を若干含む。

4　層　灰褐色細砂層　灰を主体（80%以上）。

5　層　灰赤色細砂層
　　φ 5 ㎜のHr－FP、As－C10%、焼土粒、炭化物若干含む。

6　層　灰褐色細砂層　焼土粒10%、灰と黒土層が混じる。

7　層　赤褐色細砂層　灰を主体とし、焼土を若干含む。

8　層　極暗赤褐色細砂層　灰と焼土を主体とする。

Fig.13　H－11号住居址

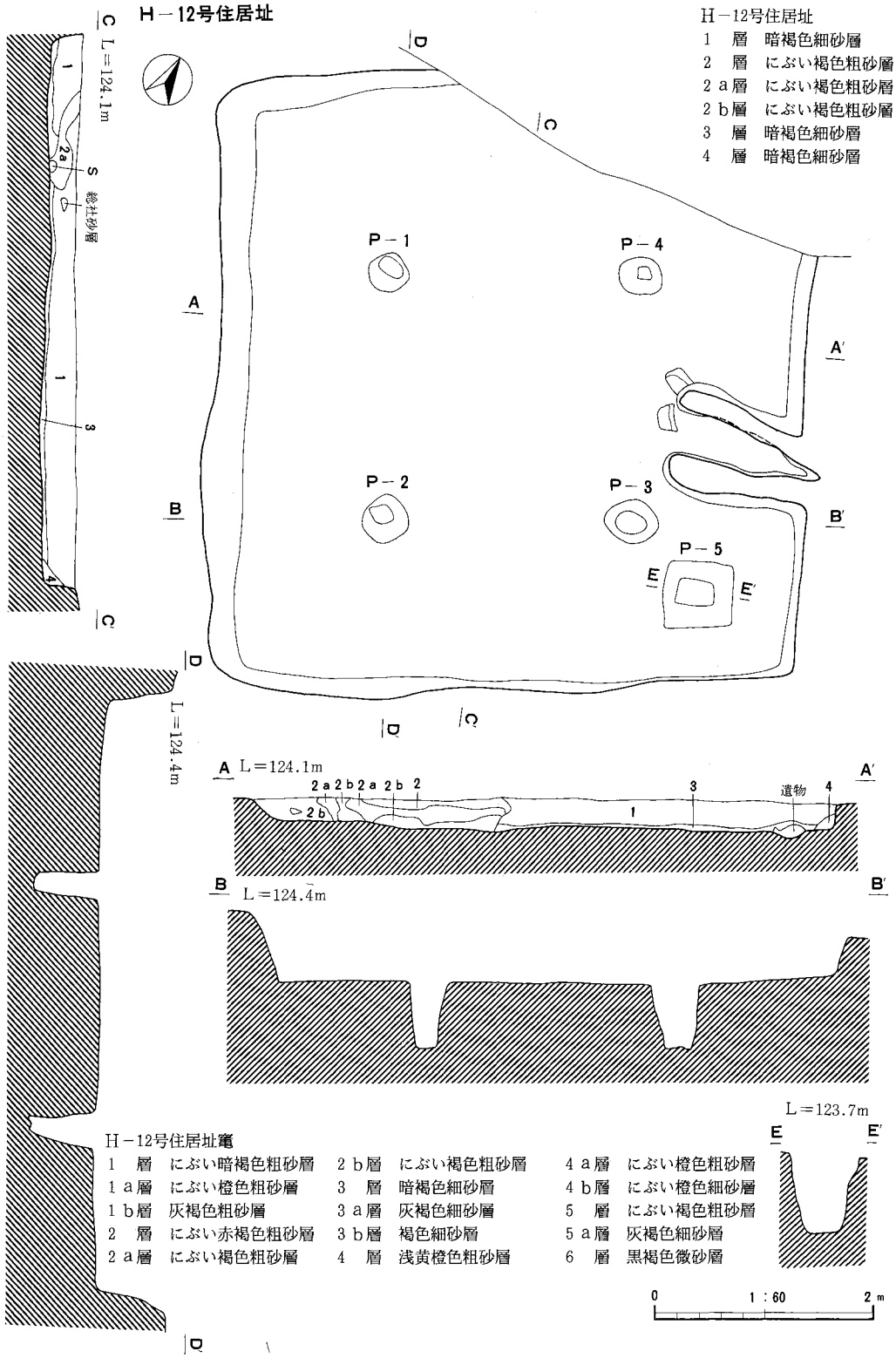
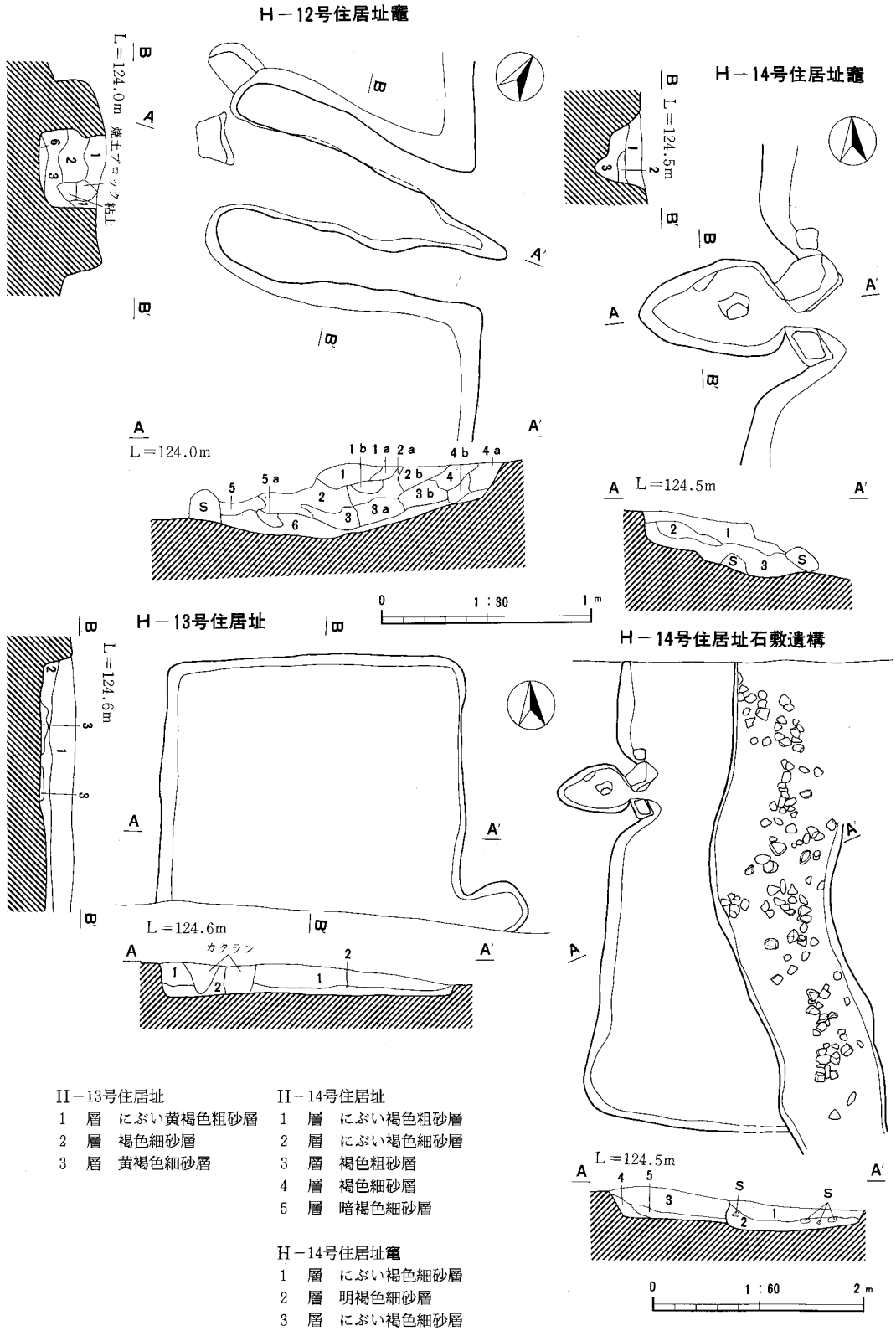


Fig.14　H－12号住居址

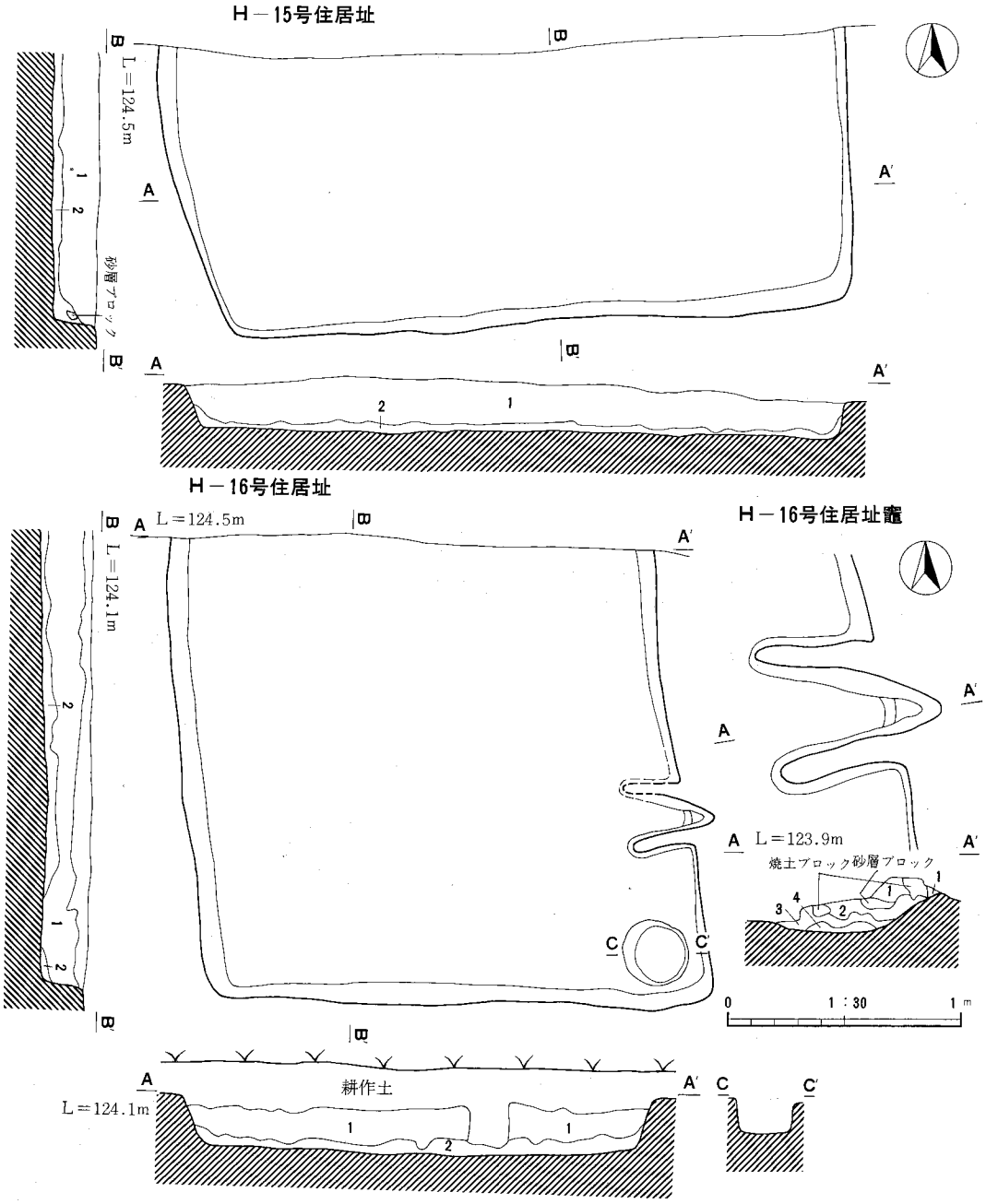


H－13号住居址
1　層　にぶい黄褐色粗砂層
2　層　褐色細砂層
3　層　黄褐色細砂層

H－14号住居址
1　層　にぶい褐色粗砂層
2　層　にぶい褐色細砂層
3　層　褐色粗砂層
4　層　褐色細砂層
5　層　暗褐色細砂層

H－14号住居址竈
1　層　にぶい褐色細砂層
2　層　明褐色細砂層
3　層　にぶい褐色細砂層

Fig.15　H－12～14号住居址



H－15号住居址

1　層　黒褐色粗砂層　Hr－FP15%、As－C10%含む。

2　層　暗褐色細砂層　Hr－FP、As－Cともにわずか含む。

H－16号住居址

1　層　暗褐色細砂層
Hr－FP５%、As－C10%含む。

2　層　褐色細砂層
Hr－FP、As－Cともにわずかに、砂層ブロック10%含む。

H－16号住居址竈

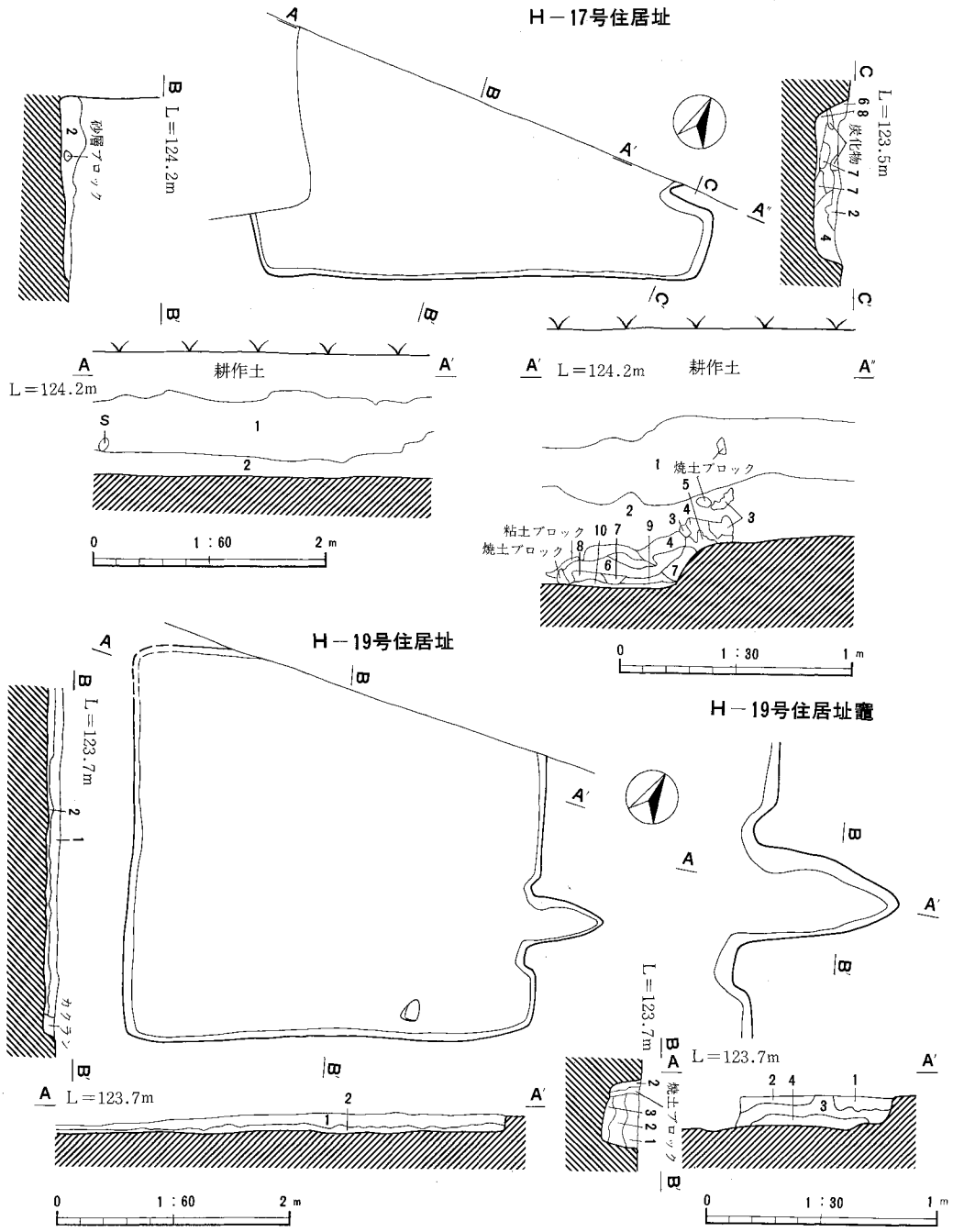
1　層　暗褐色粗砂層
As－Cをわずかに、焼土ブロック（φ１～５mm）５%含む。

2　層　暗赤褐色細砂層
焼土ブロック（φ10～30mm）40%含む。

3　層　黒褐色微砂層
焼土ブロック（φ５～20mm）10%、灰40%含む。

4　層　褐色細砂層
焼土ブロック（φ５～10mm）10%、砂層ブロック20%含む。

Fig.16　H－15・16号住居址



H－17号住居址竈

1　層　黒褐色粗砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　赤褐色細砂層
4　層　褐色細砂層
5　層　褐色細砂層
6　層　赤褐色細砂層
7　層　にぶい黄褐色微砂層
8　層　黒褐色細砂層
9　層　黒色細砂層
10　層　極暗褐色細砂層

H－19号住居址

1　層　黒褐色細砂層
2　層　暗褐色細砂層

H－19号住居址竈

1　層　褐色粗砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　極暗赤褐色細砂層
4　層　暗赤褐色微砂層

Fig.17　H－17・19号住居址

H－18号住居址竈

1　層　赤黒色微砂層

2　層　黒褐色細砂層
　　焼土粒（φ２～５㎜）５％含む。

3　層　にぶい黄褐色細砂層
　　白色粘土40％、φ５～20㎜の焼土粒10％含む。

4　層　褐色粗砂層
　　φ５～20㎜の焼土20％、白色粘土20％含む。

5　層　暗赤褐色粗砂層　φ10～30㎜の焼土30％含む。

6　層　暗褐色細砂層　焼土10％、白色粘土10％含む。

7　層　黒褐色細砂層
　　灰中心。φ５～20㎜の焼土粒10％含む。

8　層　暗褐色細砂層
　　φ10～30㎜の焼土粒20％、灰10％含む。

9　層　暗赤褐色微砂層　焼土中心。

10　層　極暗赤褐色微砂層

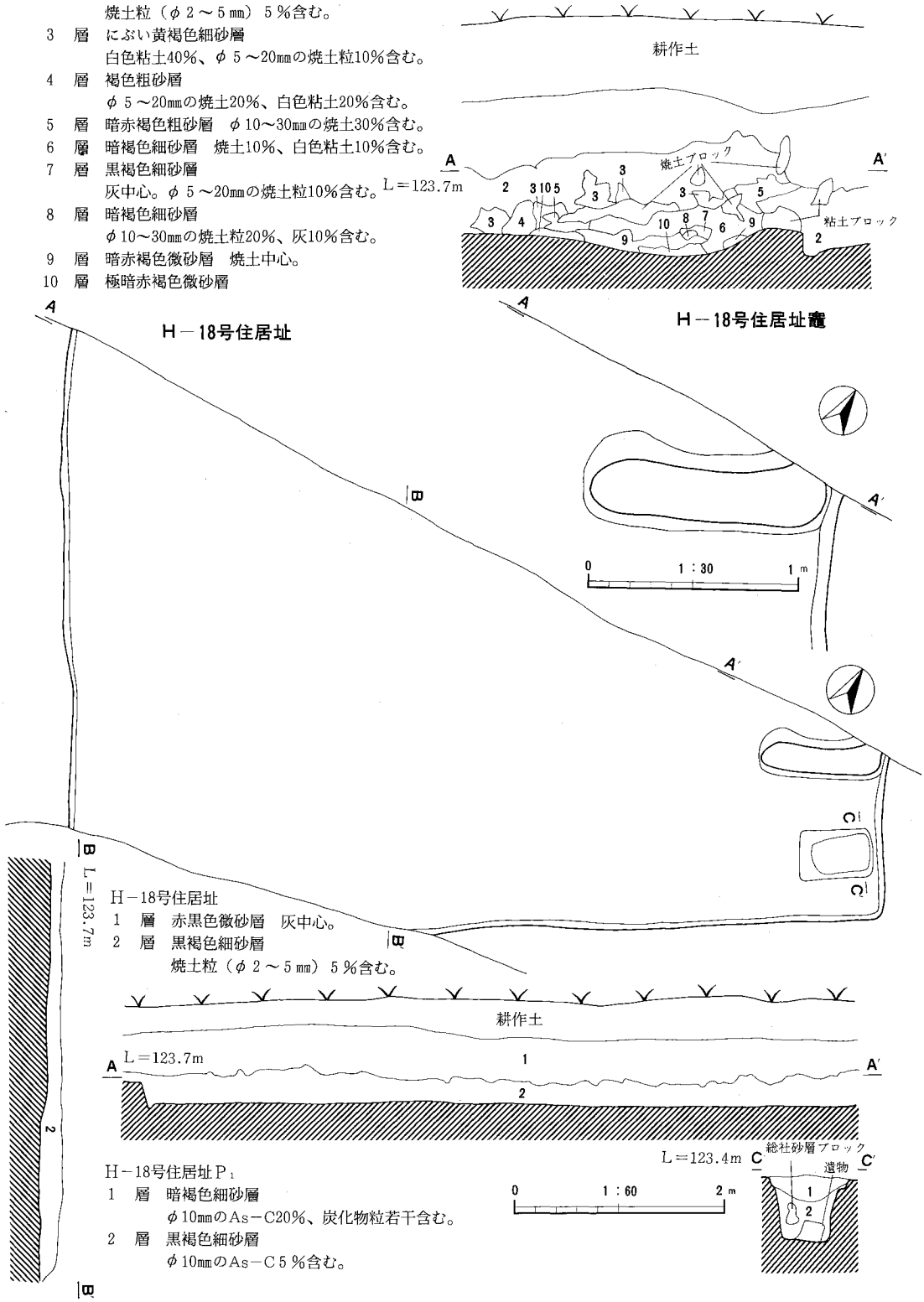


Fig.18　H－18号住居址

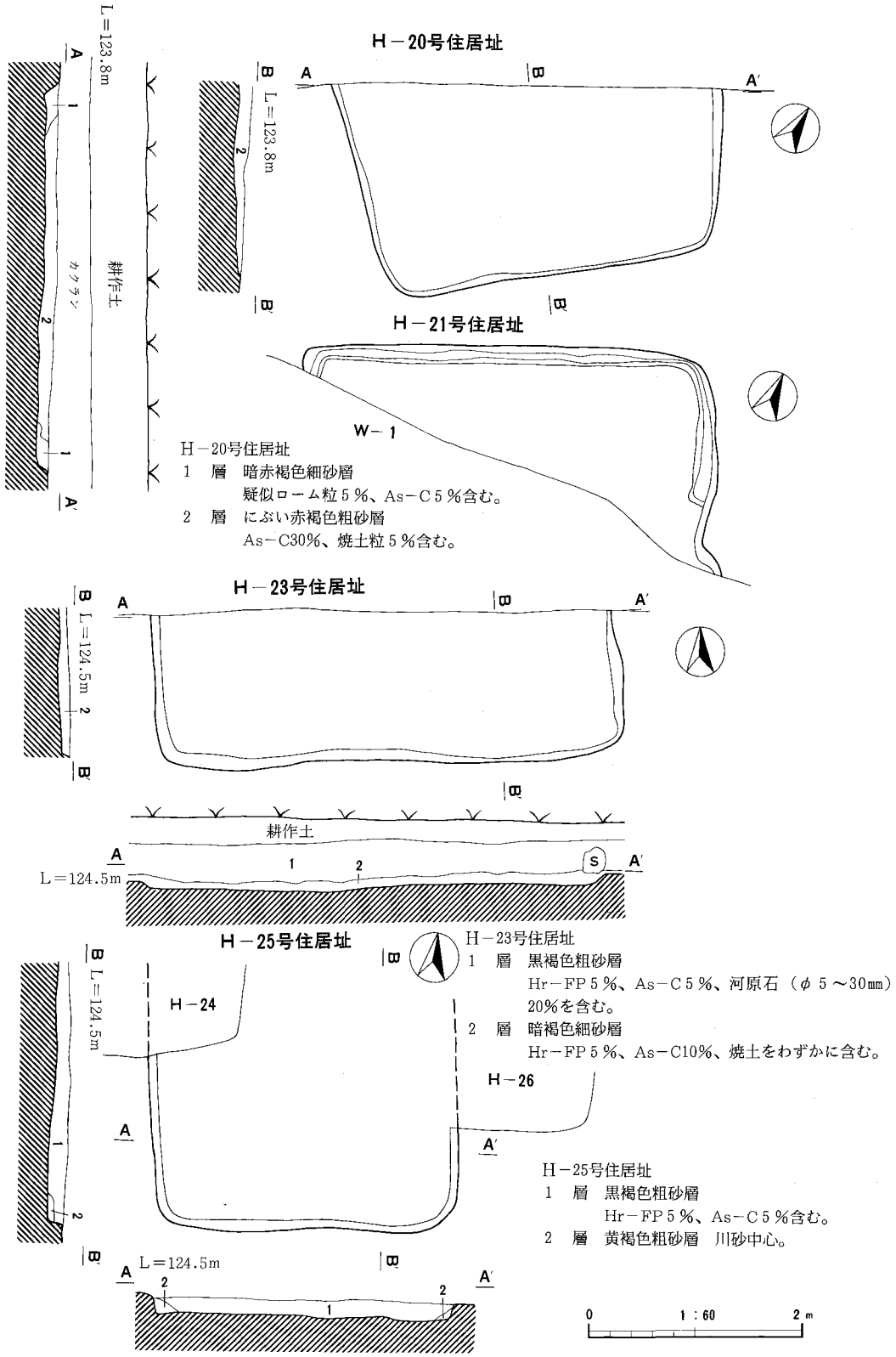
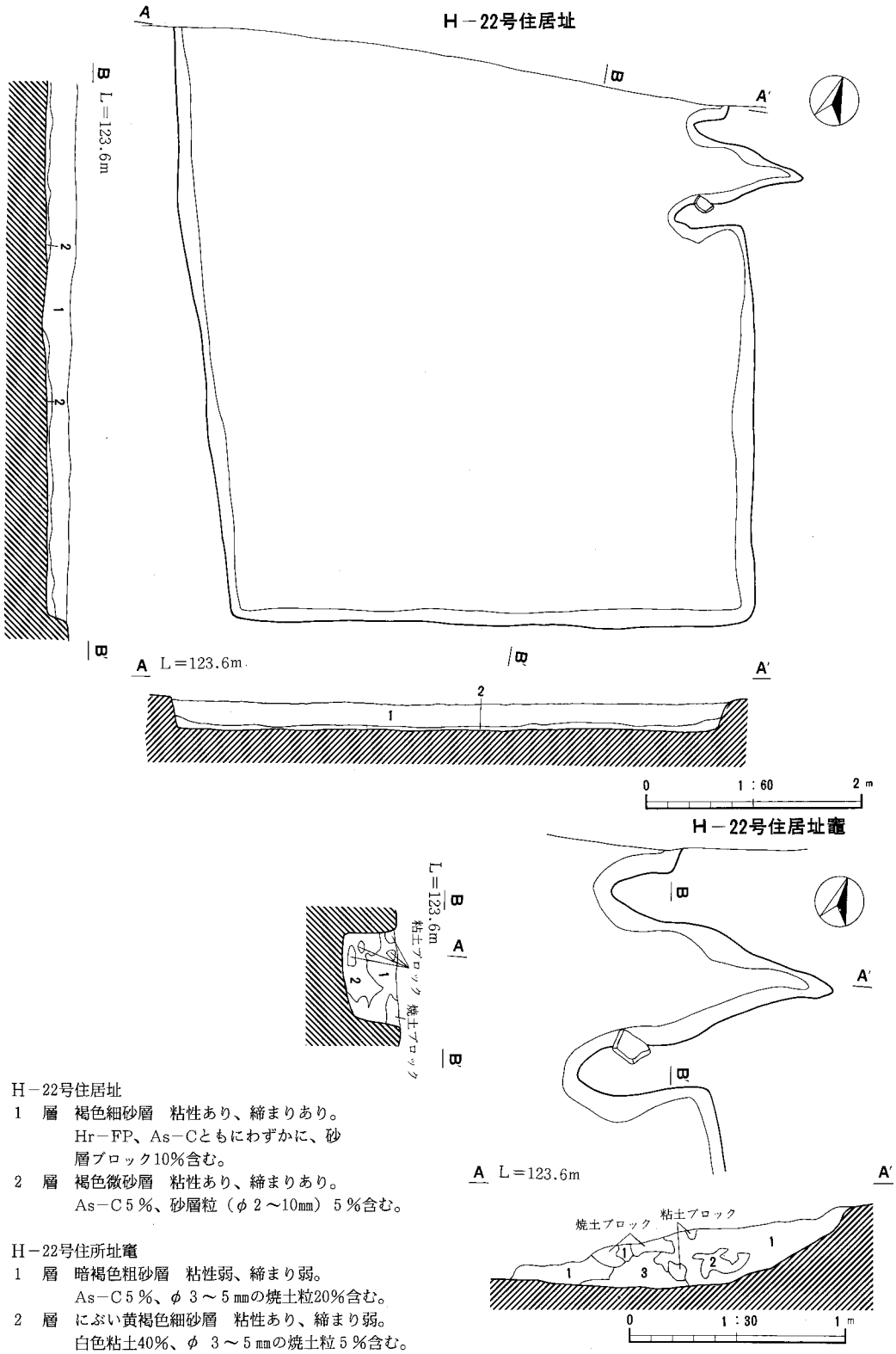


Fig.19　H－20・21・23・25号住居址



H－22号住居址

1　層　褐色細砂層　粘性あり、締まりあり。
　　Hr－FP、As－Cともにわずかに、砂層ブロック10％含む。

2　層　褐色微砂層　粘性あり、締まりあり。
　　As－C５％、砂層粒（φ２～10mm）５％含む。

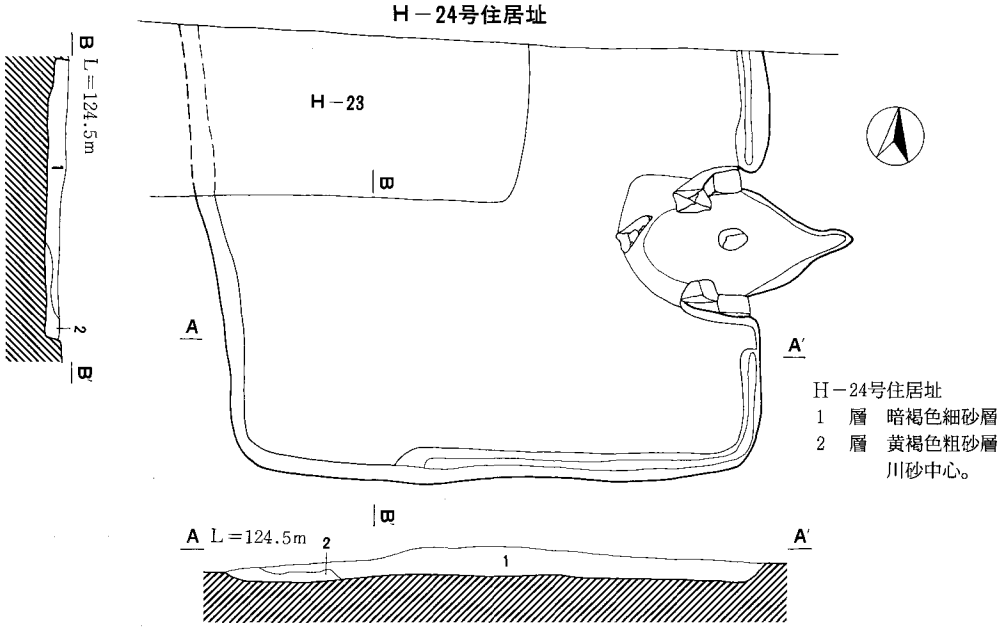
H－22号住所址竈

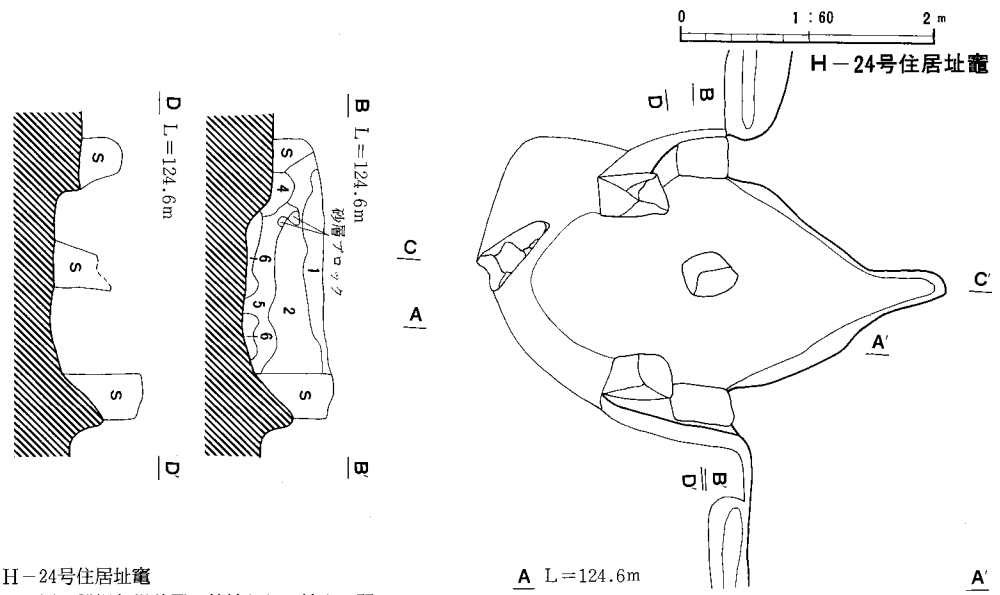
1　層　暗褐色粗砂層　粘性弱、締まり弱。
　　As－C５％、φ３～５mmの焼土粒20％含む。

2　層　にぶい黄褐色細砂層　粘性あり、締まり弱。
　　白色粘土40％、φ３～５mmの焼土粒５％含む。

3　層　赤褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
　　φ５～20mmの焼土粒40％含む。

Fig.20　H－22号住居址





H－24号住居址竈

1　層　黒褐色粗砂層　粘性なし、締まり弱。
　　As－C10%、Hr－FP、焼土をわずかに含む。

2　層　褐色粗砂層　粘性なし、締まり弱。
　　Hr－FP、As－Cをわずかに、焼土粒（φ5～10mm）20%、粘土粒10%含む。

3　層　暗褐色粗砂層　粘性なし、締まり弱。
　　Hr－FP、As－Cをわずかに、焼土粒10%含む。

4　層　暗赤褐色粗砂層　粘性弱、締まり弱。
　　焼土40%、粘土粒、灰をわずかに含む。

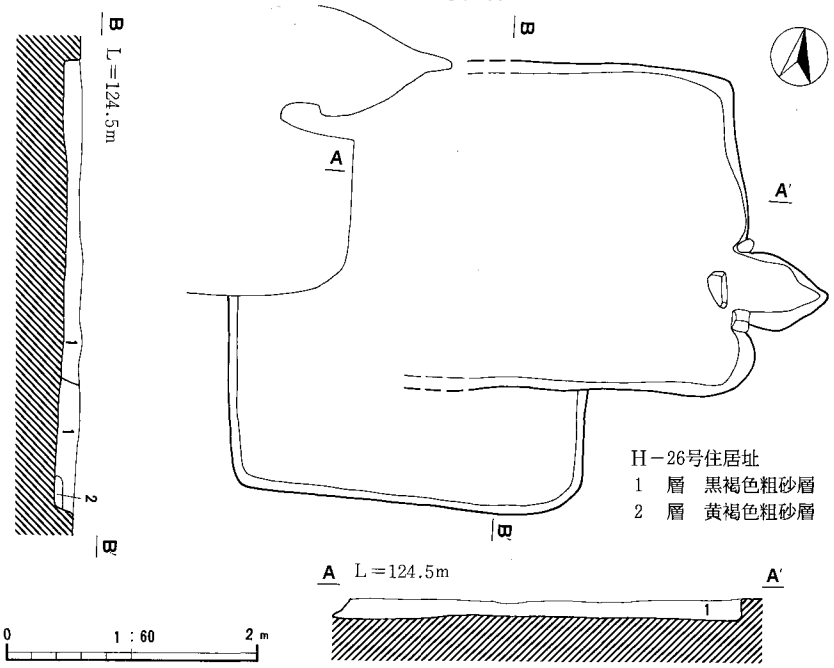
5　層　褐灰細砂層　粘性なし、締まりなし。
　　As－C10%、焼土粒30%、灰を主体とする。

6　層　極暗赤褐色粗砂層　粘性弱、締まり弱。
　　砂層5%含む。

7　層　暗褐色粗砂層　粘性弱、締まり弱。
　　焼土、粘土ともにわずかに含む。

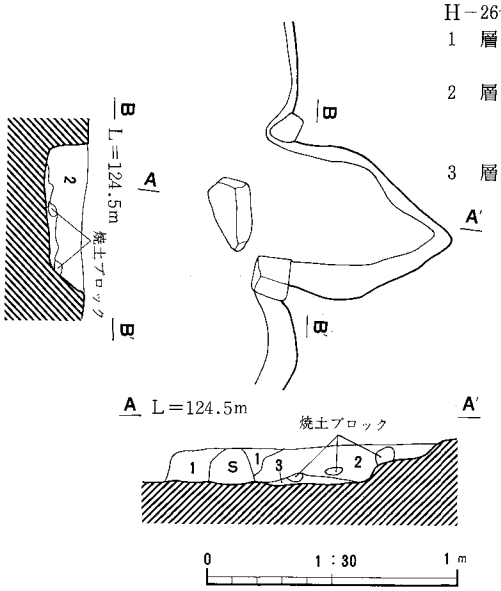
Fig.21　H－24号住居址

H－26号住居址



H－26号住居址
1　層　黒褐色粗砂層
2　層　黄褐色粗砂層　川砂中心。

H－26号住居址竈



H－26号住居址竈
1　層　暗褐色粗砂層
　　Hr－FP５％、As－C15％、焼土をわずかに含む。
2　層　褐色粗砂層
　　Hr－FPをわずかに、As－C５％、焼土粒（φ５～10㎜）10％を含む。
3　層　黒褐色細砂層
　　灰50％、焼土、砂層ともにわずかに含む。

H－27号住居址竈
1　層　暗赤褐色細砂層
　　焼土粒（φ10～30㎜）20％、粘土粒10％含む。
2　層　暗褐色細砂層
　　Hr－FPをわずかに、As－C５％含む。
3　層　極暗赤褐色微砂層
　　灰10％、焼土粒（φ10～20㎜）10％含む。
4　層　黒色細砂層
　　灰中心。焼土粒（φ10～20㎜）10％含む。
5　層　灰褐色細砂層
　　焼土粒（φ５～30㎜）20％、粘土粒（φ10～30㎜）20％含む。

H－27号住居址P_5
1　層　黒褐色粗砂層
　　Hr－FPをわずかに、As－C10％、焼土わずかに含む。
2　層　暗褐色細砂層
　　砂層（φ５～10㎜）10％、As－Cをわずかに含む。

H－27号住居址P_1～P_4
1　層　黒褐色細砂層
　　As－C10％、焼土粒（φ２～５㎜）10％含む。
2　層　暗褐色微砂層　As－C５％含む。
3　層　褐色微砂層　砂層混じり（20％）。

Fig.22　H－26号住居址

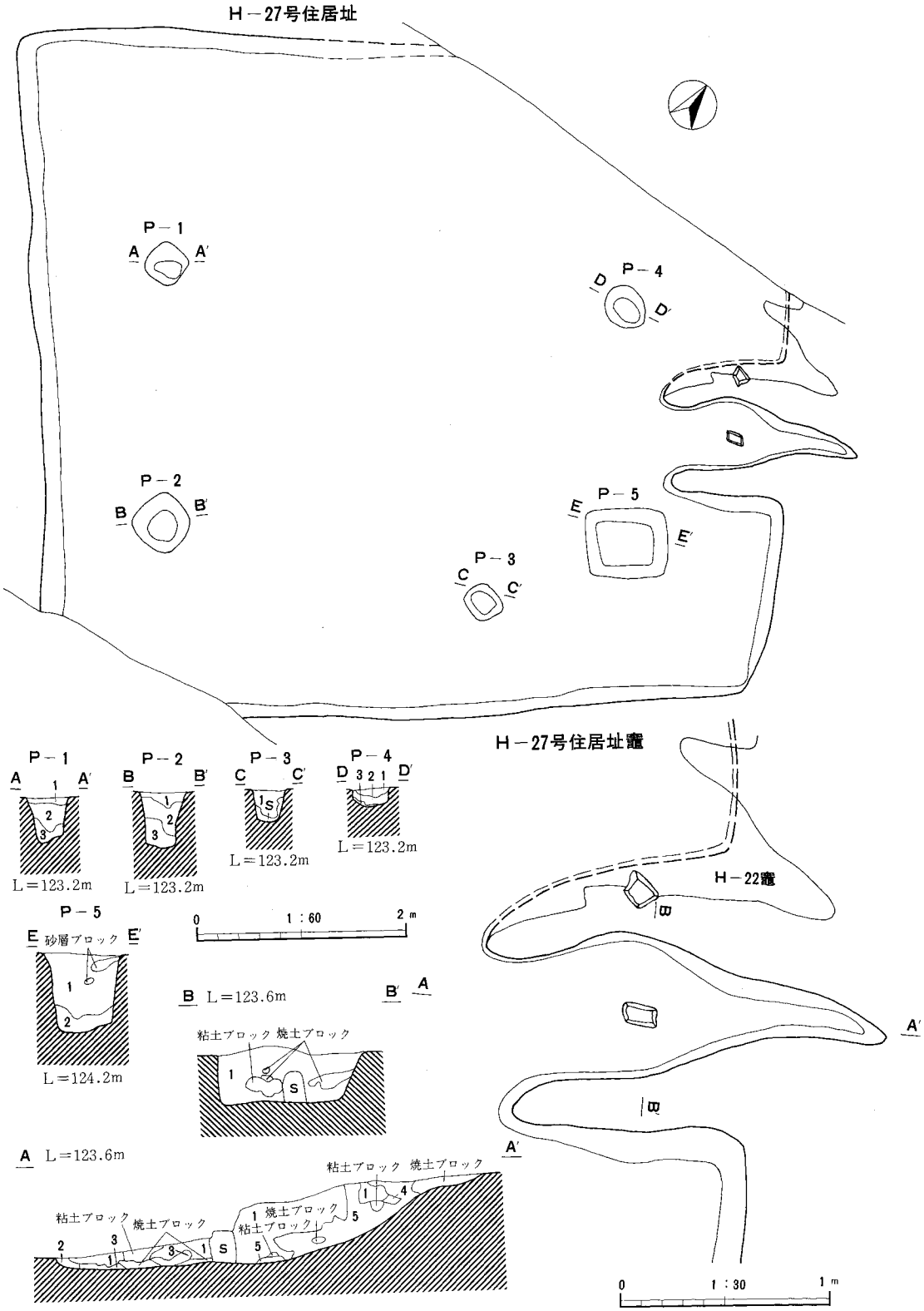
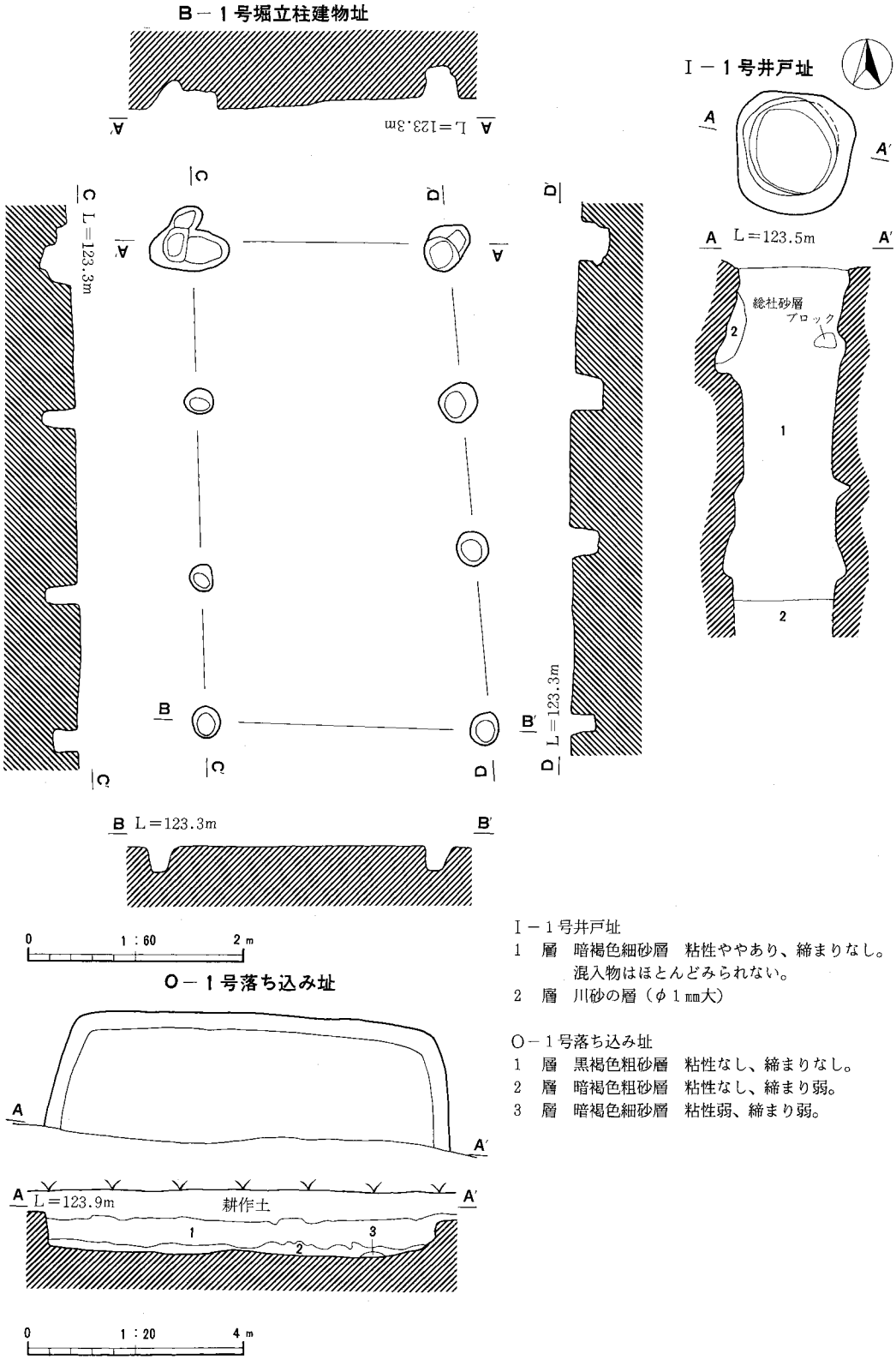


Fig.23　H－27号住居址



I－1号井戸址
1　層　暗褐色細砂層　粘性ややあり、締まりなし。
　　混入物はほとんどみられない。
2　層　川砂の層（φ1㎜大）

O－1号落ち込み址
1　層　黒褐色粗砂層　粘性なし、締まりなし。
2　層　暗褐色粗砂層　粘性なし、締まり弱。
3　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。

Fig.24　堀立柱建物址他

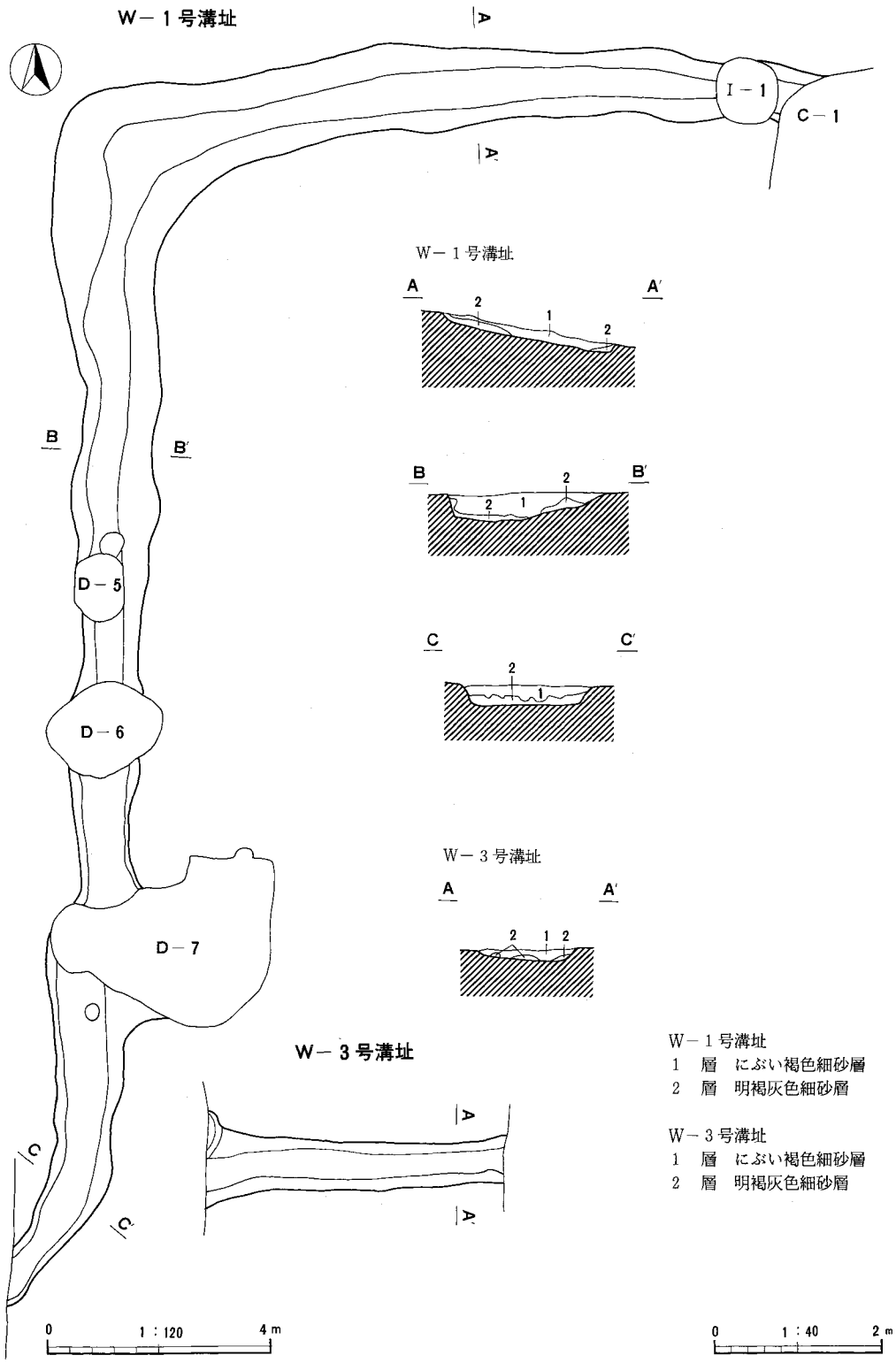
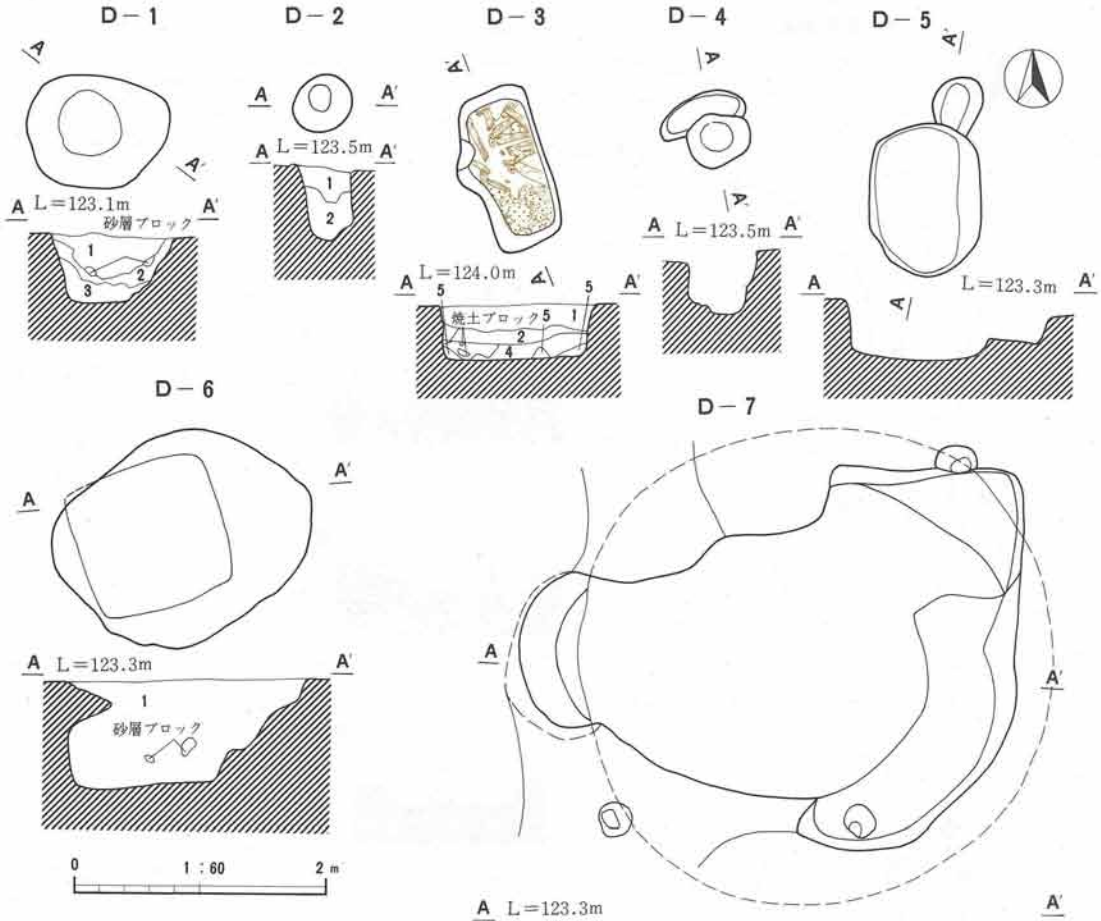
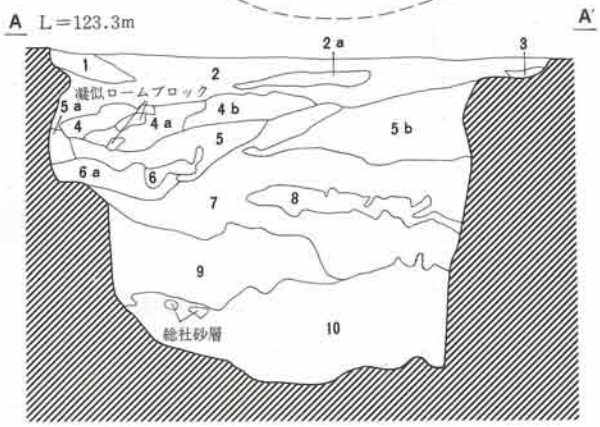


Fig.25　W－1・3号溝址





D－1号土坑
1　層　暗褐色粗砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　黒褐色粗砂層

D－2号土坑
1　層　暗褐色細砂層
2　層　黒褐色微砂層

D－3号土坑
1　層　褐色細砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　赤褐色粗砂層
4　層　黒色細砂層
5　層　暗褐色細砂層

D－4号土坑
1　層　暗褐色微砂層
2　層　暗褐色微砂層
3　層　黒褐色細砂層

D－6号土坑
1　層　褐色細砂層

D－7号土坑
1　層　明黄褐色細砂層
2　層　にぶい褐色粗砂層
2 a 層　にぶい褐色細砂層
3　層　浅黄色細砂層
4　層　黒褐色細砂層
4 a 層　褐色細砂層
4 b 層　にぶい黄褐色細砂層
5　層　灰黄褐色細砂層
5 a 層　灰黄褐色細砂層
5 b 層　にぶい黄褐色細砂
6　層　暗灰黄色細砂層
6 a 層　暗灰黄色細砂層
7　層　灰黄色細砂層
8　層　暗褐色細砂層
9　層　にぶい黄褐色粗砂層
10　層　暗褐色細砂層

Fig.26　D－1～7号土坑

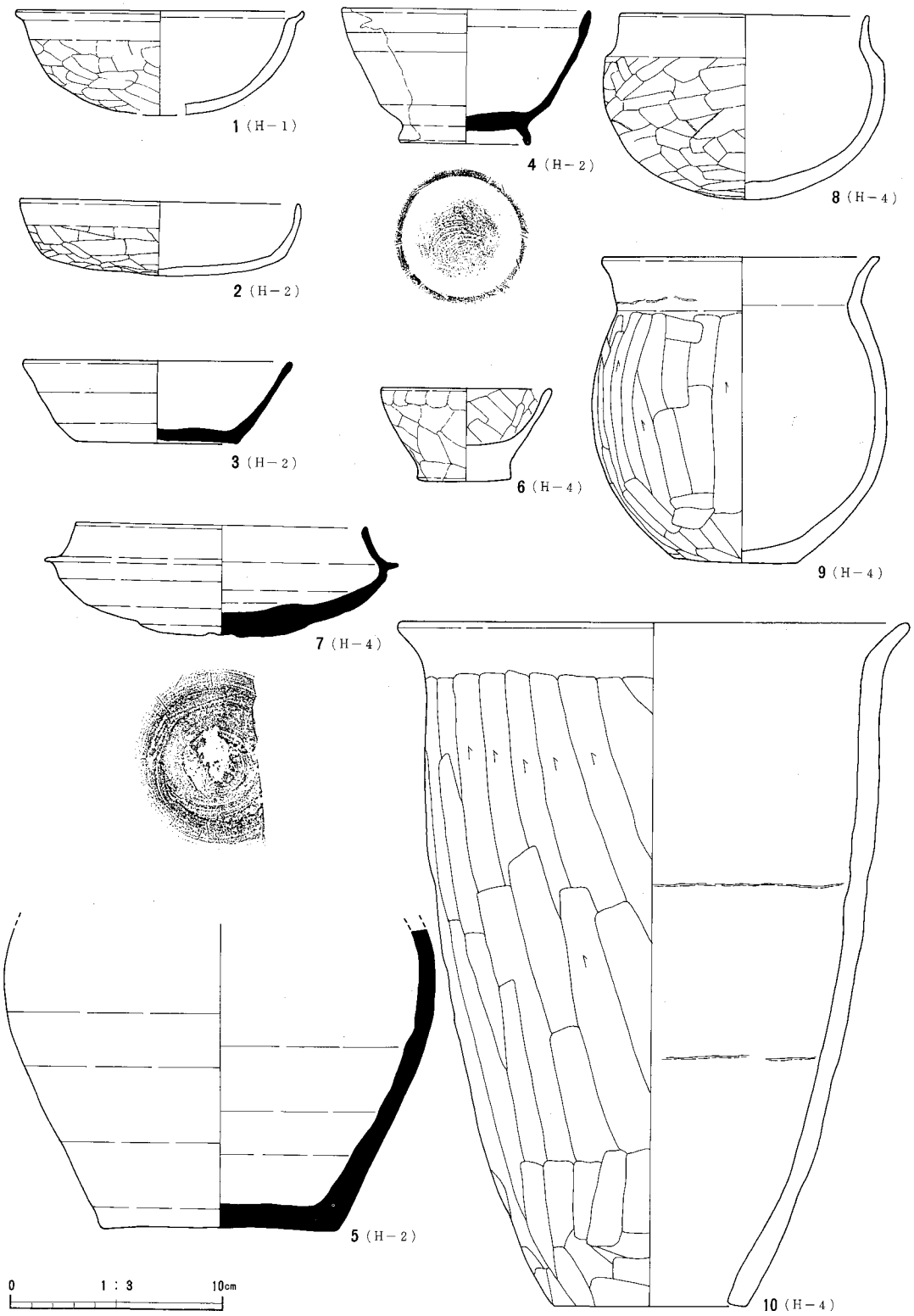


Fig.27　古墳～平安時代の土器(1)

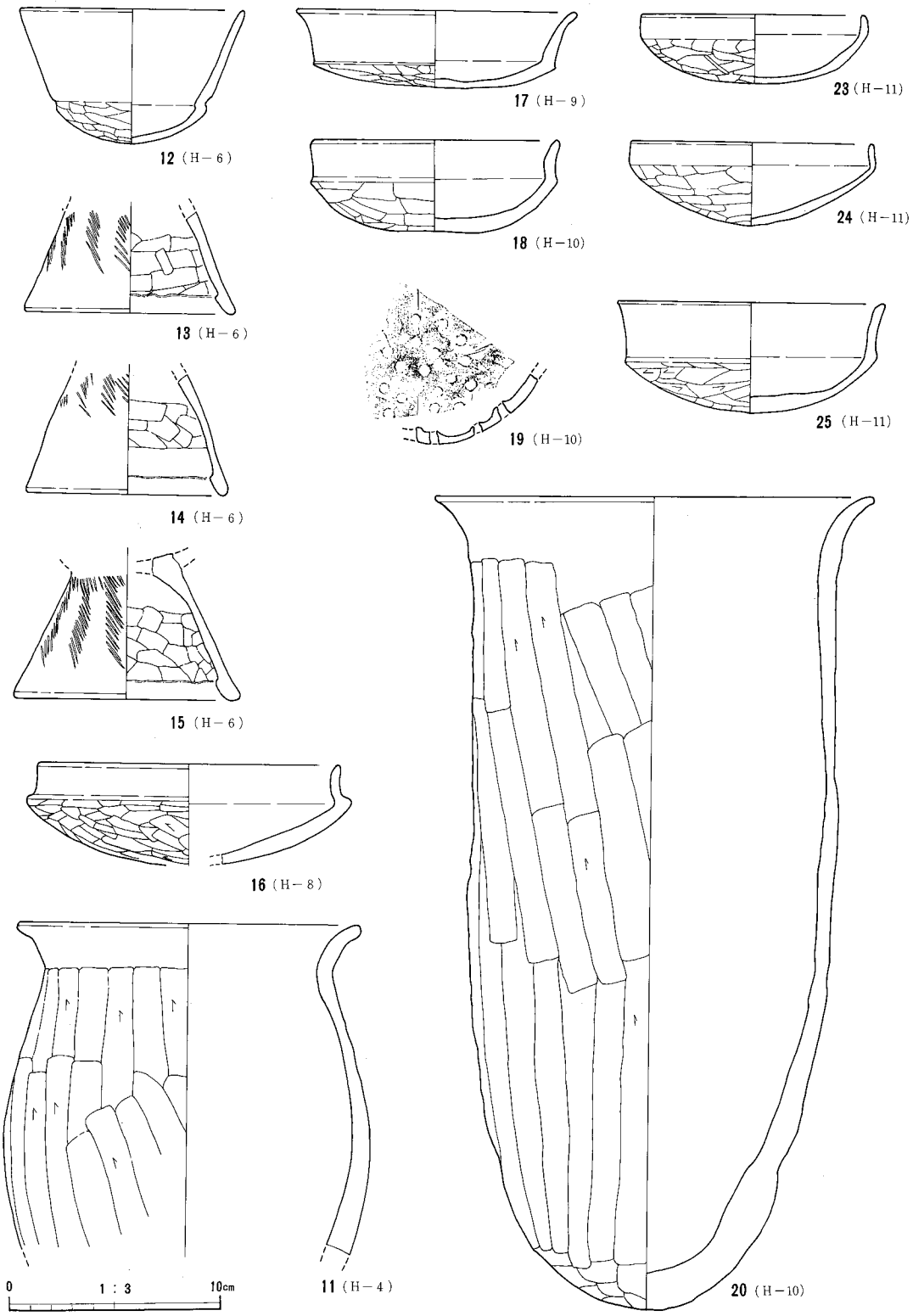


Fig. 28　古墳～平安時代の土器(2)

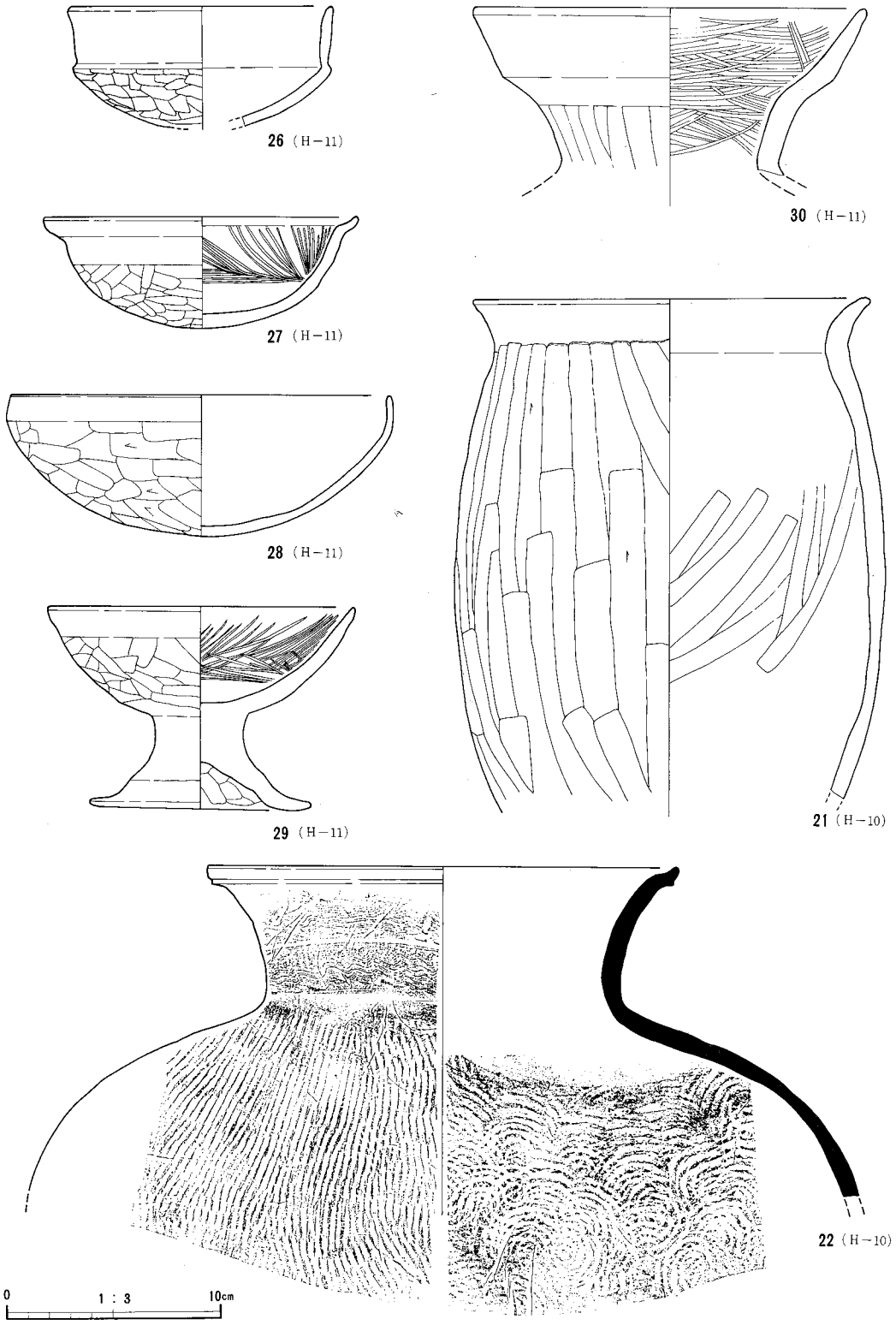


Fig. 29　古墳～平安時代の土器(3)

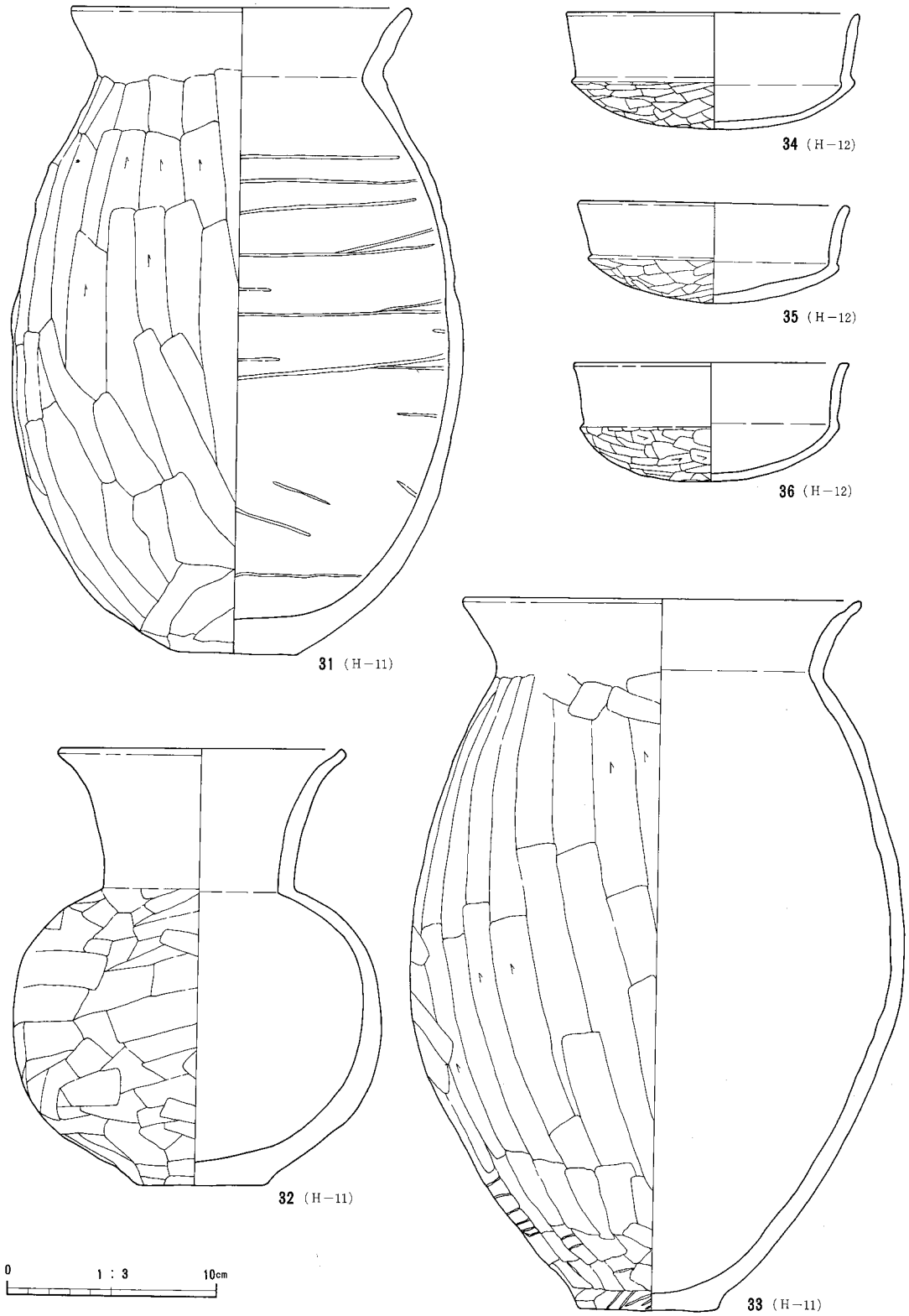


Fig.30　古墳～平安時代の土器(4)

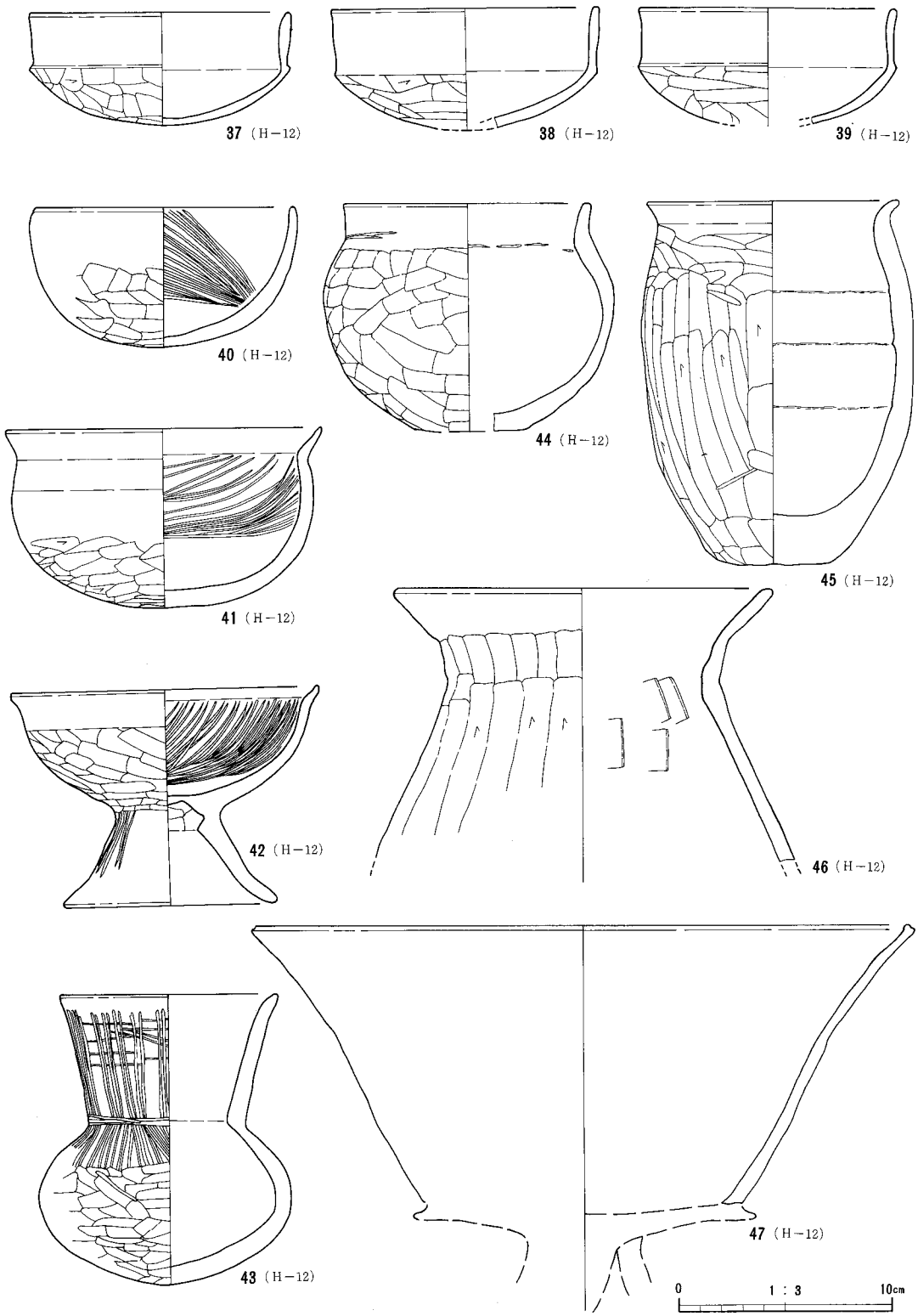


Fig. 31　古墳～平安時代の土器(5)

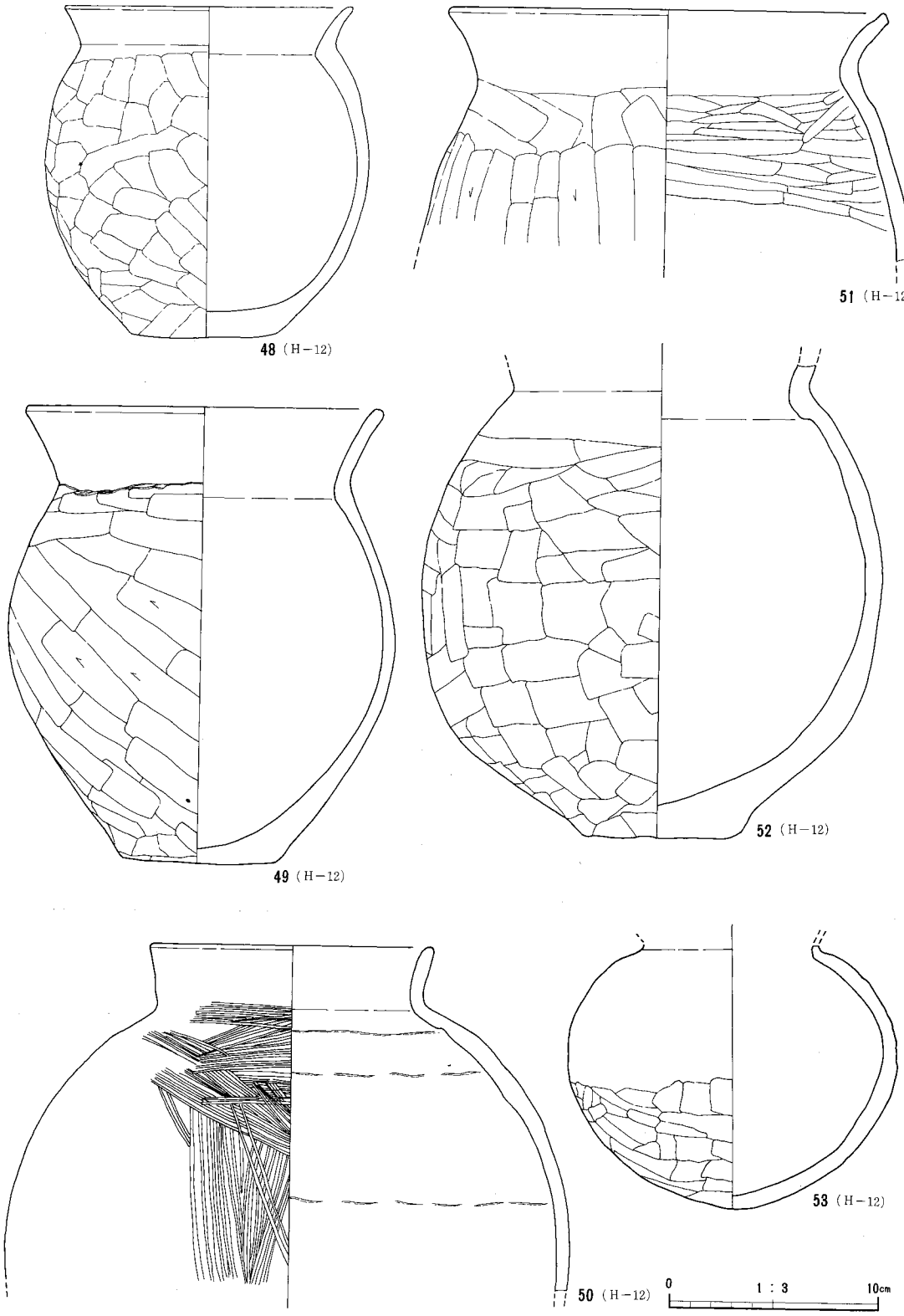


Fig. 32　古墳～平安時代の土器(6)

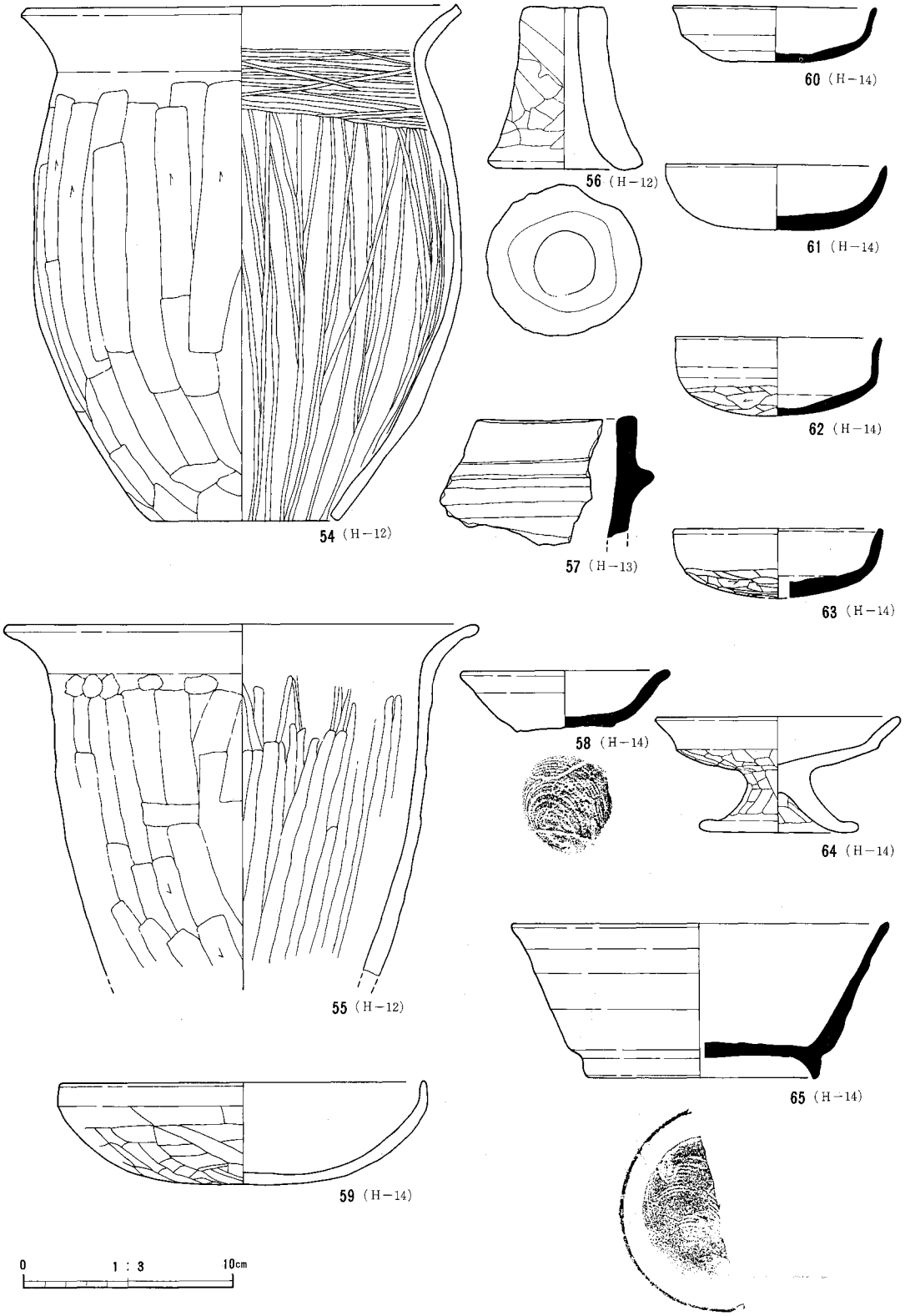


Fig. 33　古墳～平安時代の土器(7)

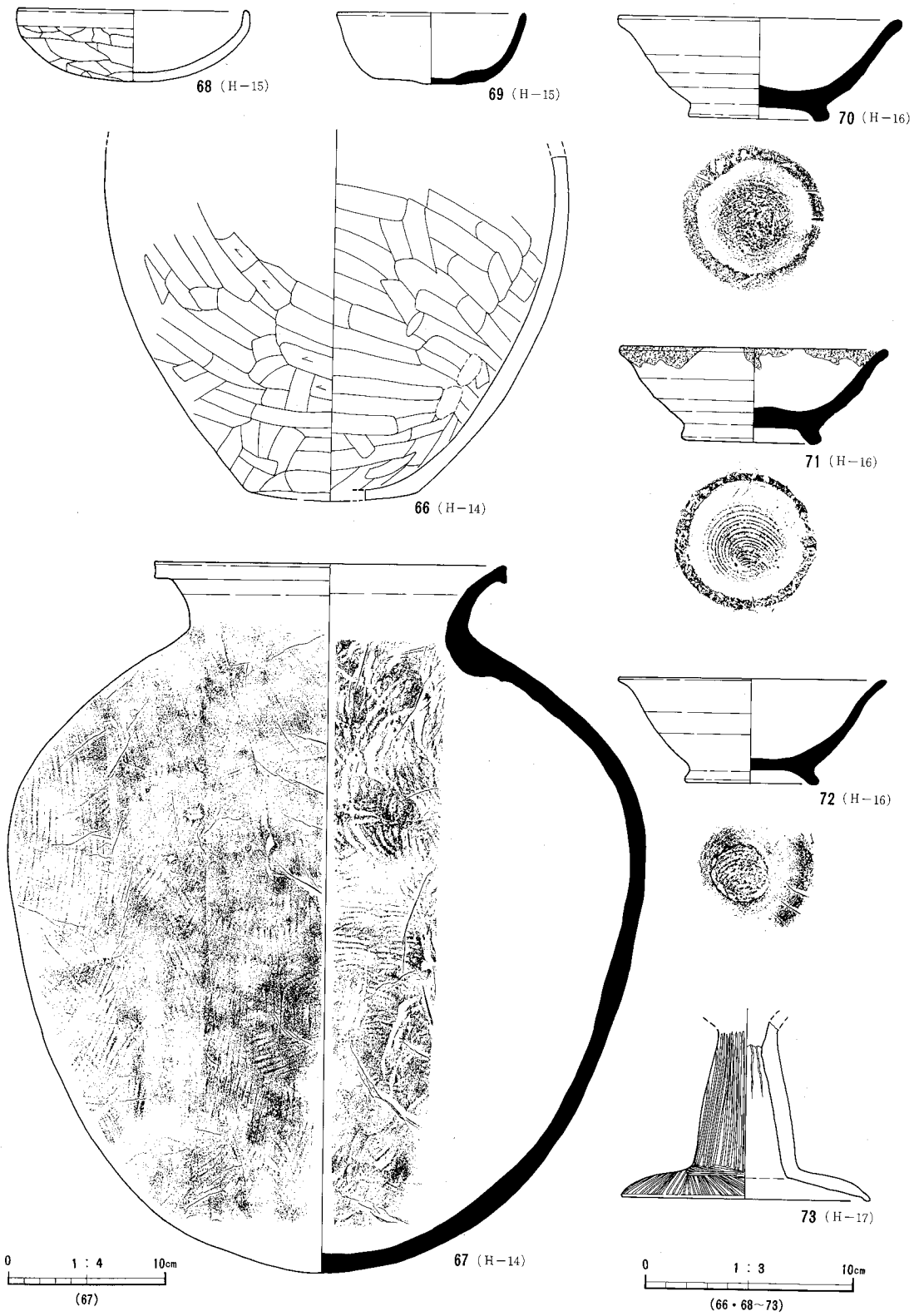


Fig. 34　古墳〜平安時代の土器(8)

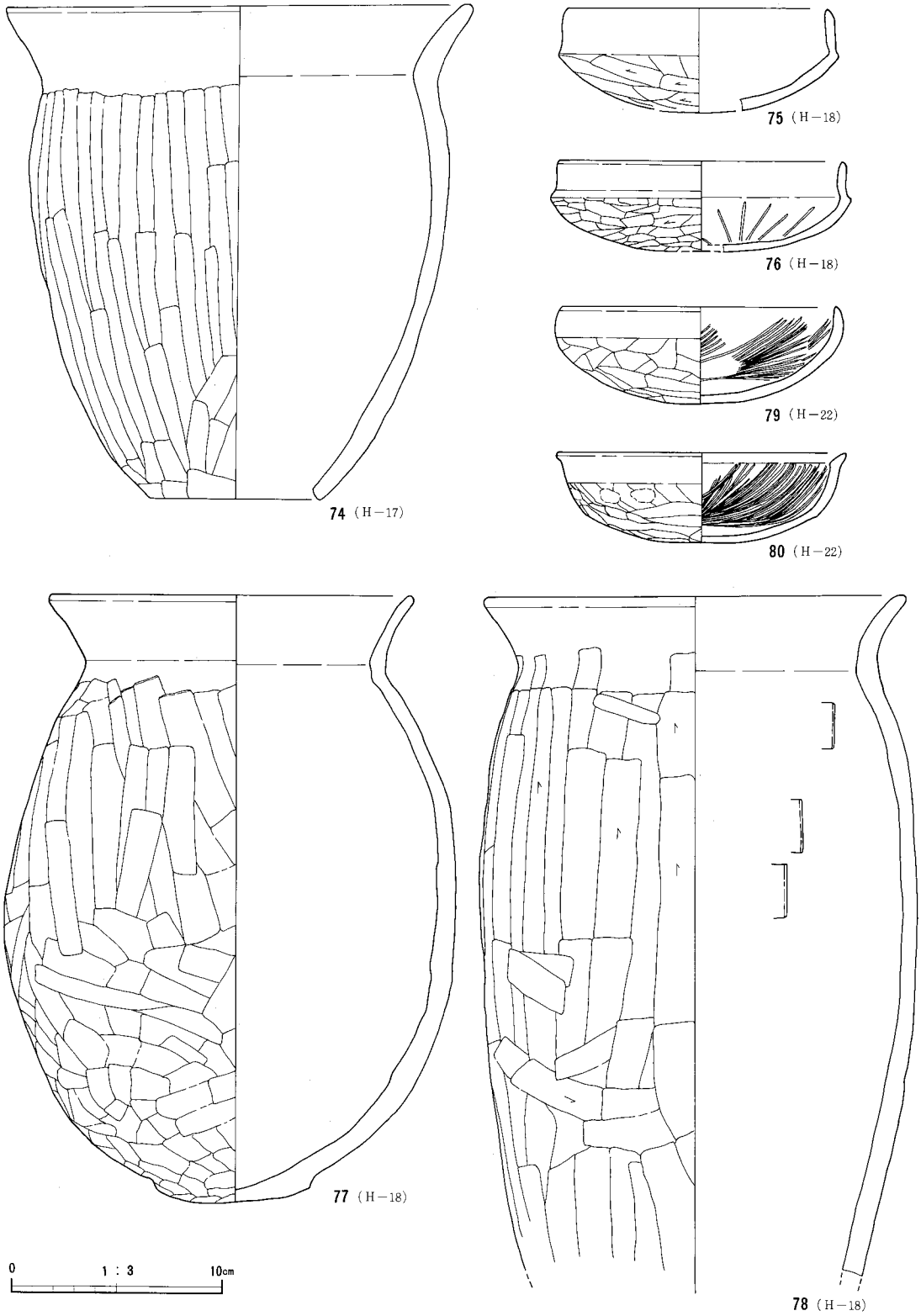


Fig. 35　古墳～平安時代の土器(9)

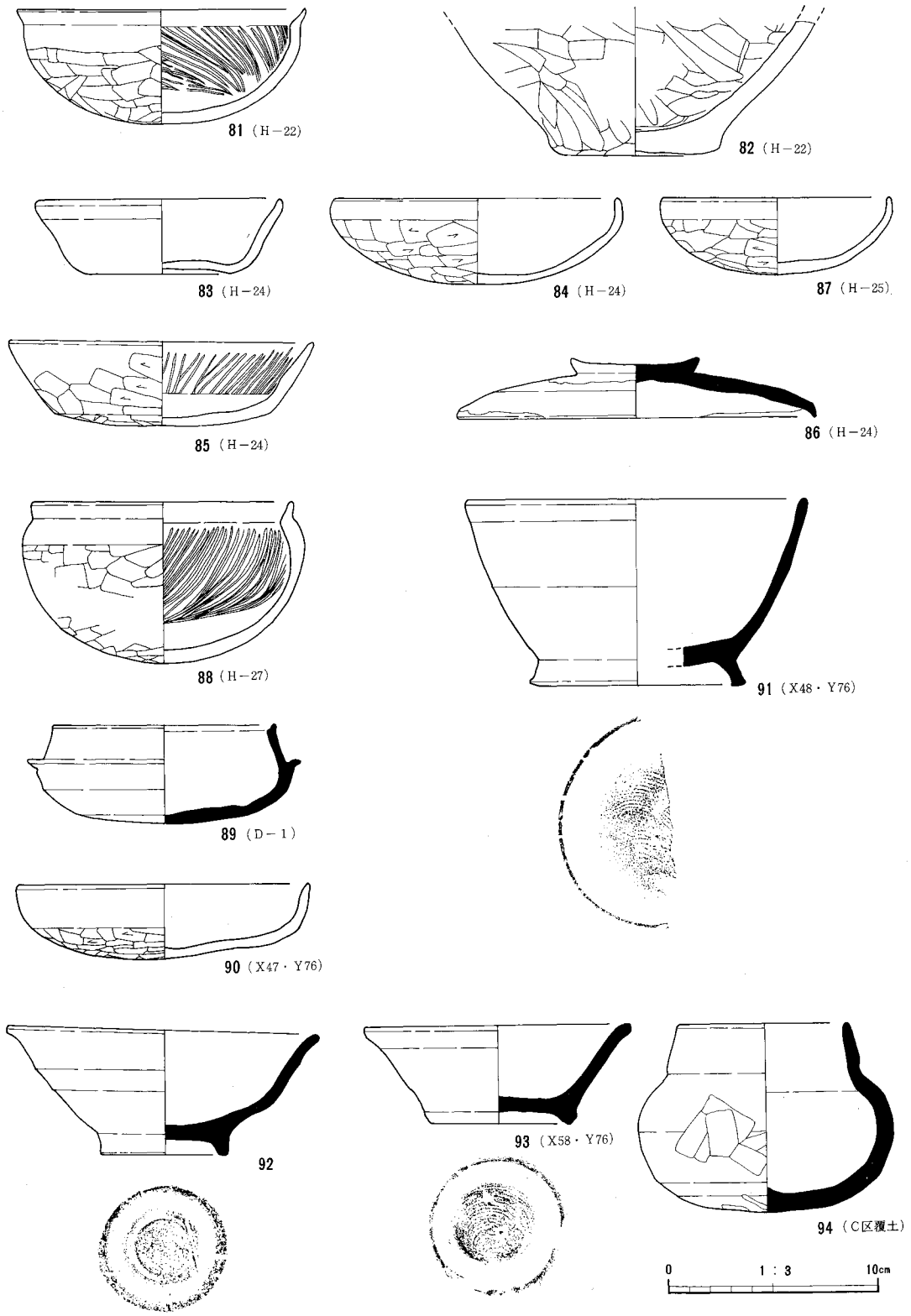


Fig. 36　古墳～平安時代の土器(10)

Fig. 37 瓦類(1)

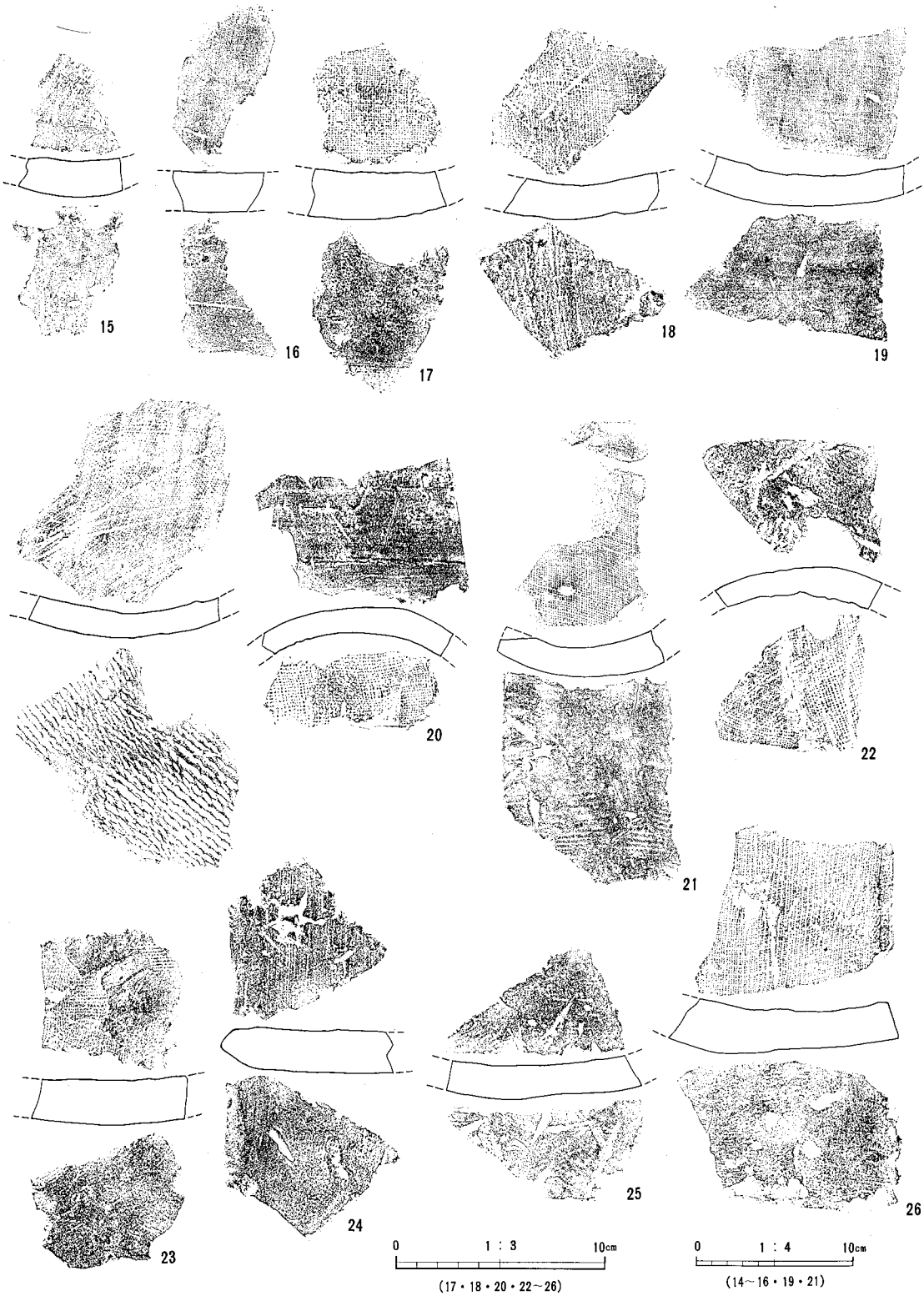

15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0 1 : 3 10cm
(17・18・20・22～26)
0 1 : 4 10cm
(14～16・19・21)

Fig.38 瓦類(2)

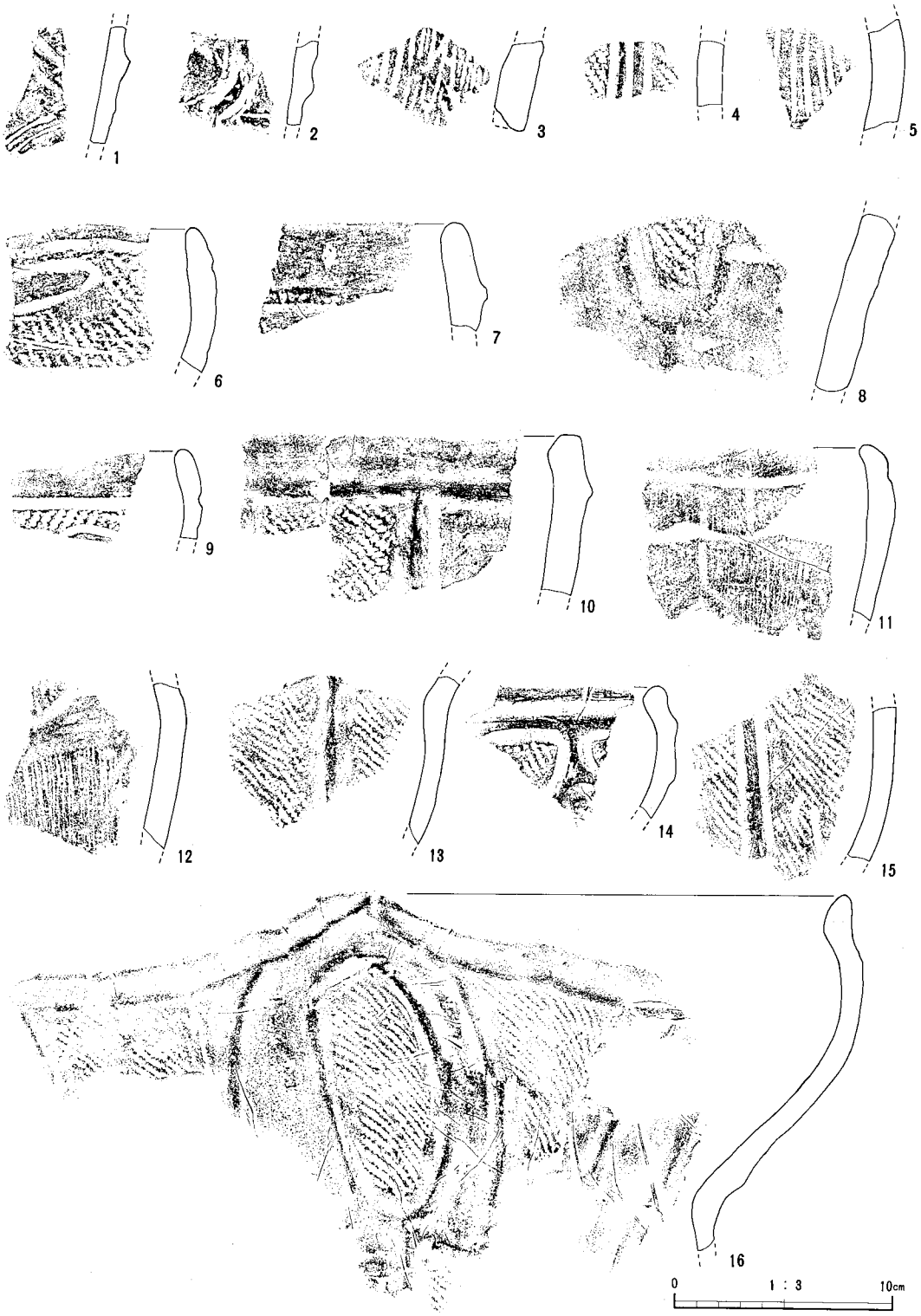


Fig.39　縄文土器(1)

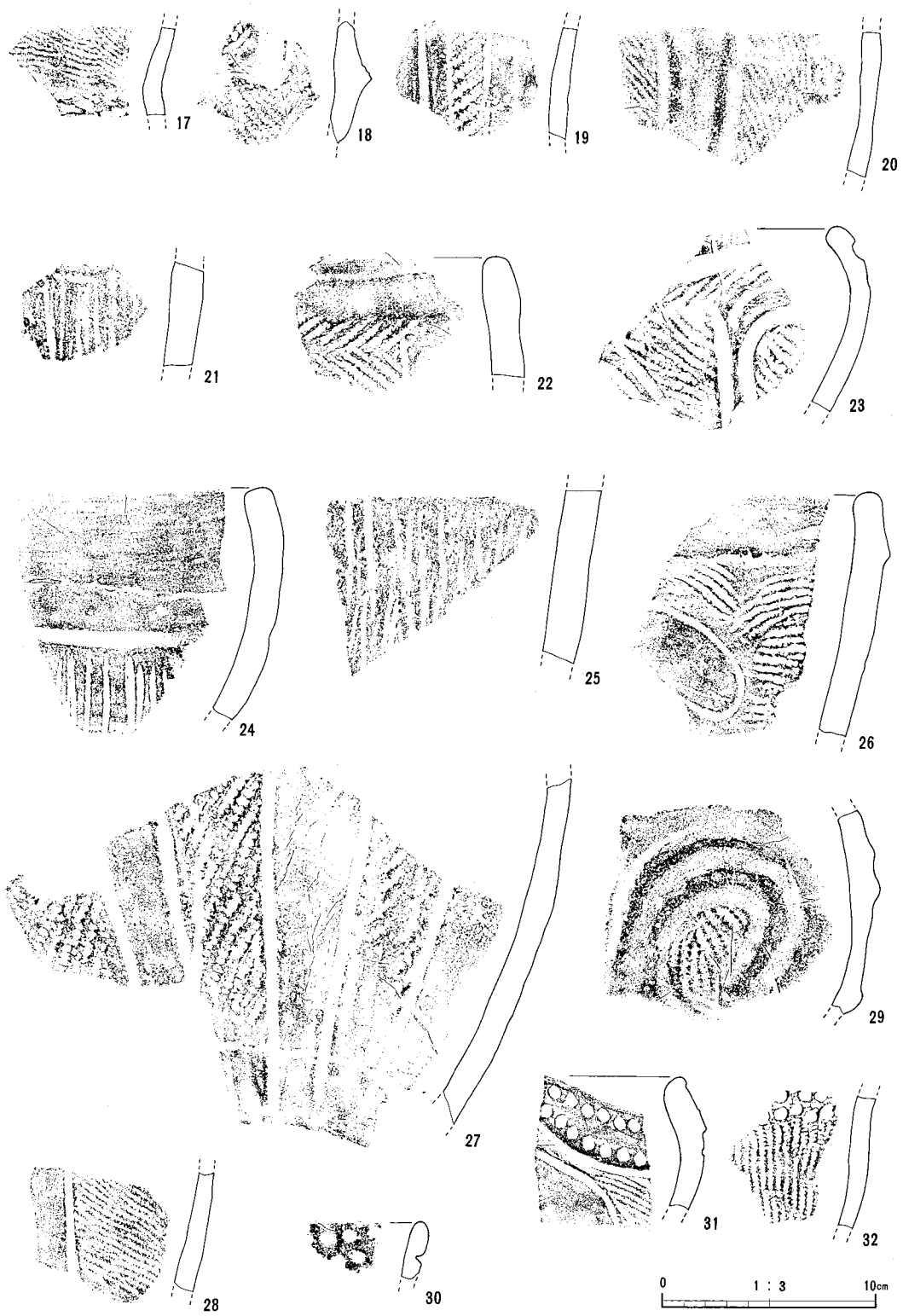


Fig. 40　縄文土器(2)

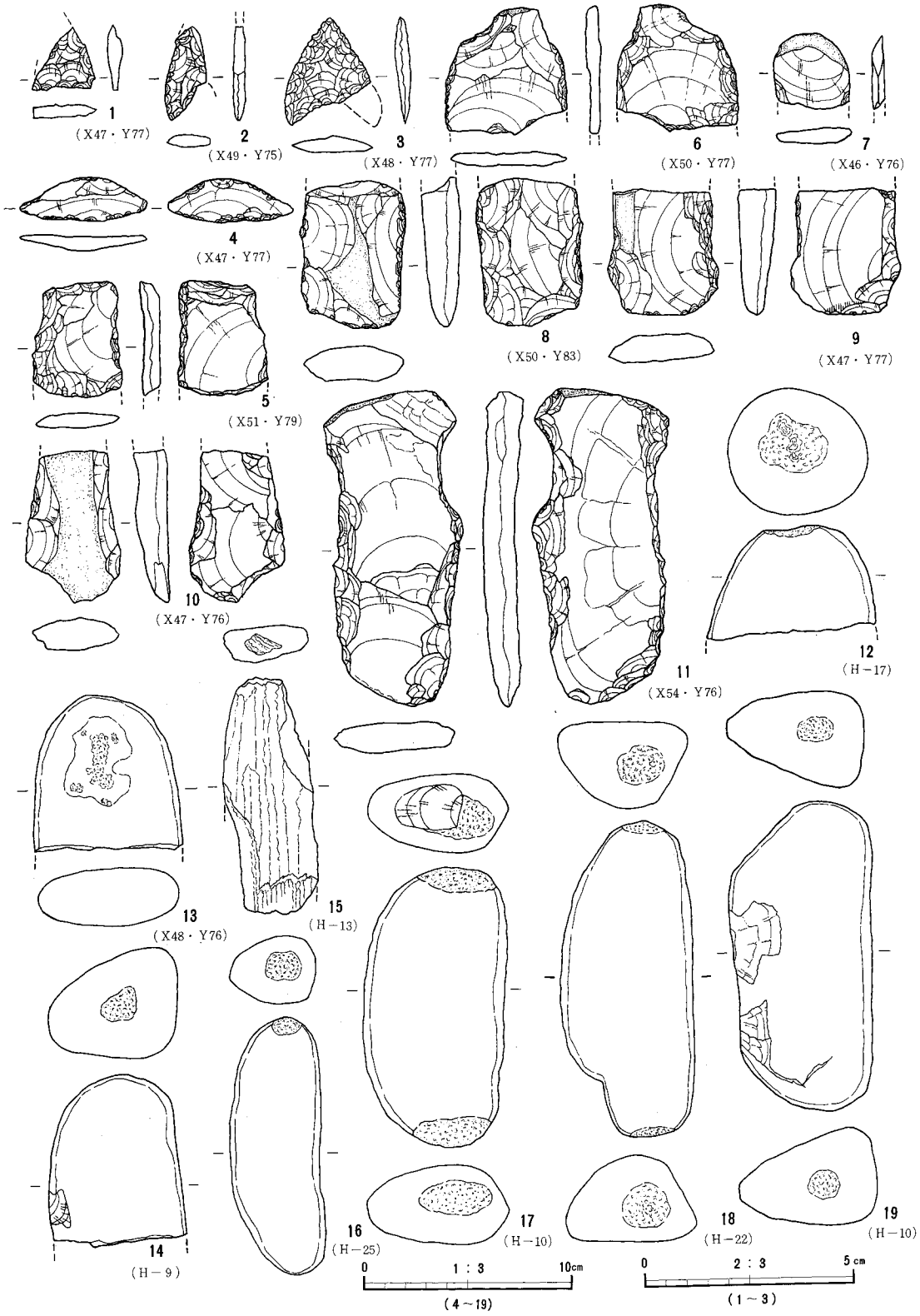


Fig.41　石器・石製品(1)

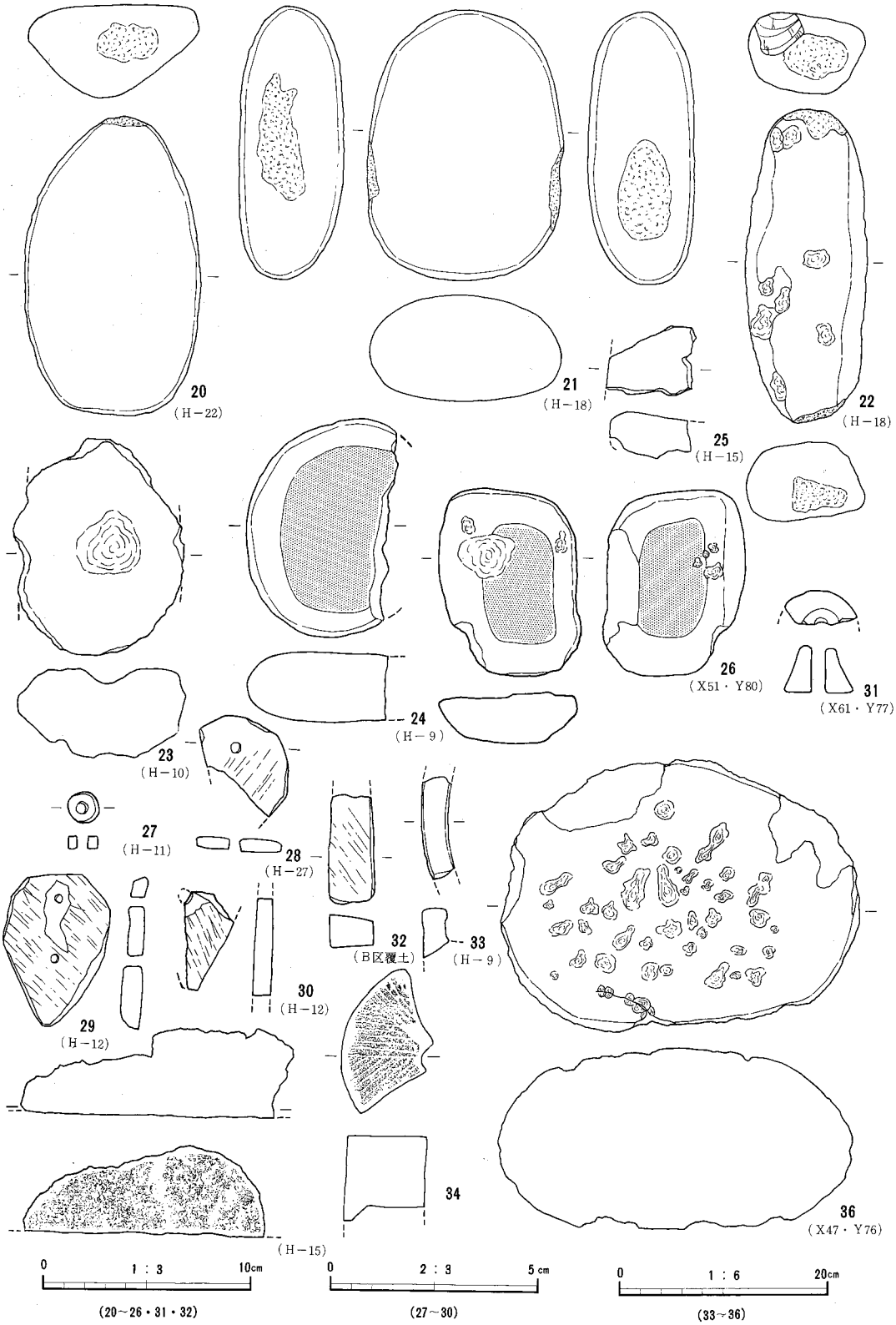
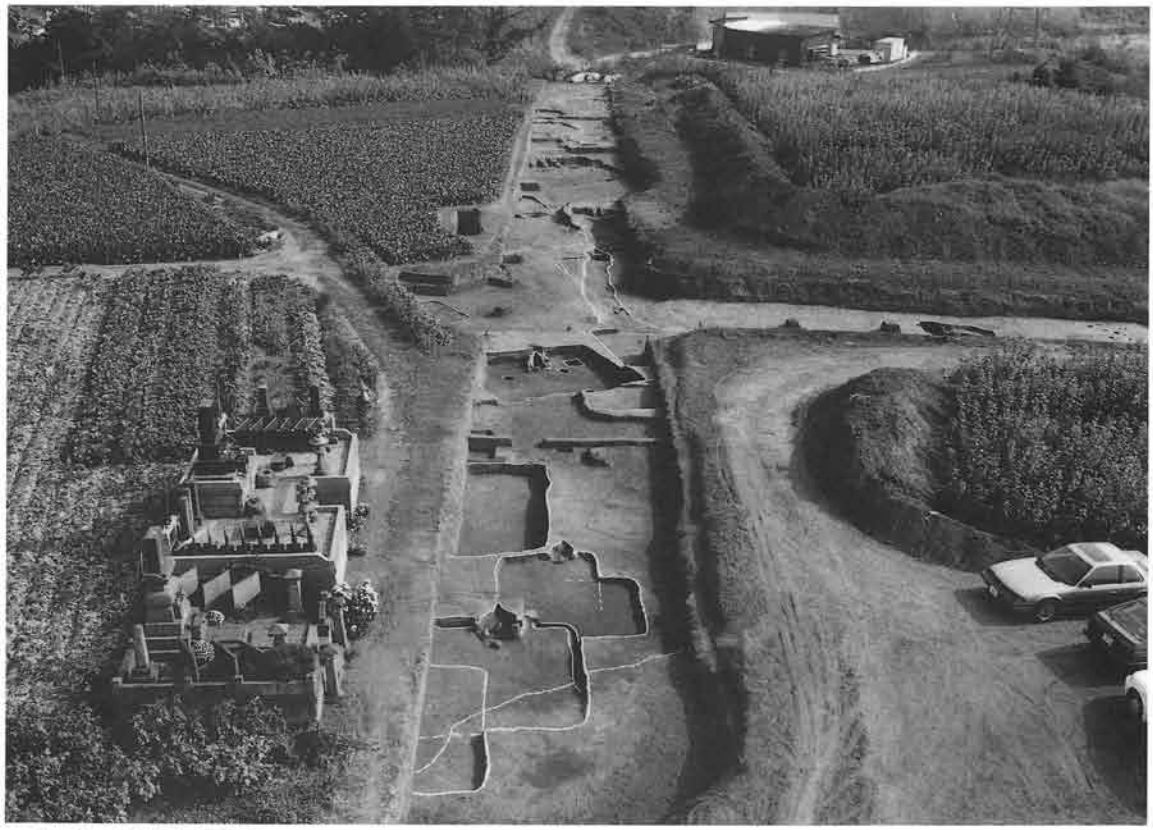


Fig. 42　石器・石製品(2)

1．A・C区全景（東から）



2．A・C区全景（西から）

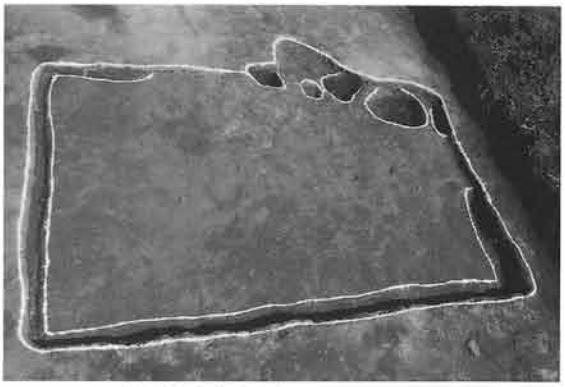
1．C区全景（南から）

2．調査前の大屋敷遺跡（南から）

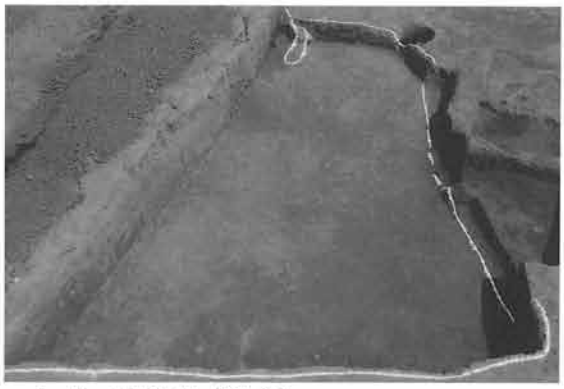
3．C区全景（南から）

4．深掘（西から）

1．C区全景（北から）



2．H－2号住居址（西から）



3．H－4号住居址（西から）

4．H－2号住居址出土遺物

5．H－4号住居址出土遺物

6．H－6号住居址（南から）

7．H－8号住居址（北から）

8．H－10号住居址出土遺物（西から）

1．H－11号住居址（西から）

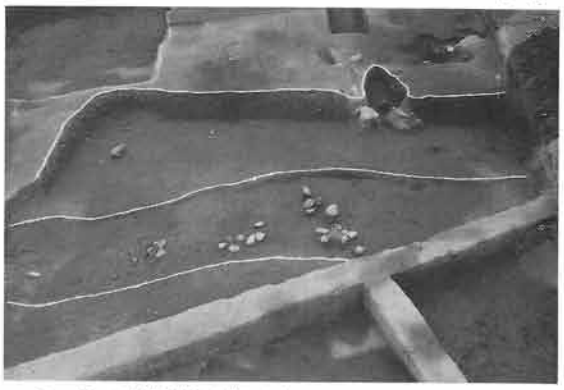
2．H－11号住居址出土遺物（西から）

3．H－12号住居址（西から）

4．H－12号住居址竈（西から）

5．H－12号住居址出土遺物

1．石敷遺構（西から）



2．H－14号住居址（東から）

3．H－14号住居址出土遺物（南から）

4．H－16号住居址（西から）

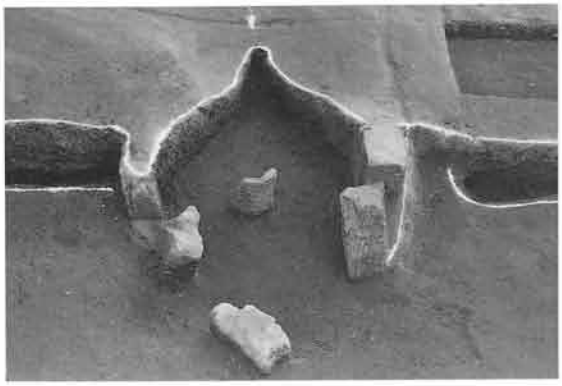
5．H－16号住居址出土遺物（西から）

6．H－17・18号住居址（南西から）

7．H－18号住居址出土遺物（西から）

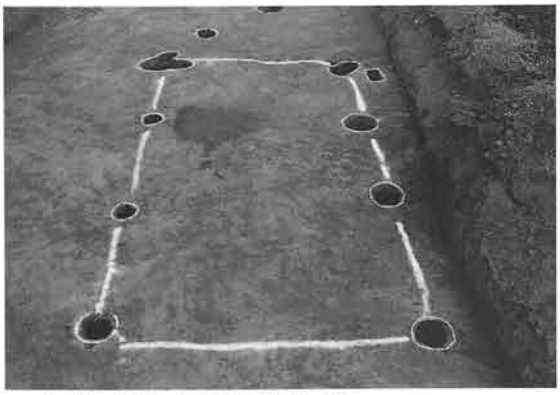
8．H－22・27号住居址竈（西から）

1．H－23・24・25・26号住居址（西から）

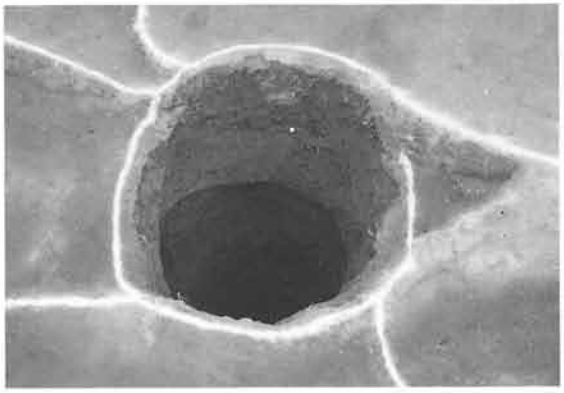


2．H－24号住居址竈（西から）

3．H－26号住居址竈（西から）

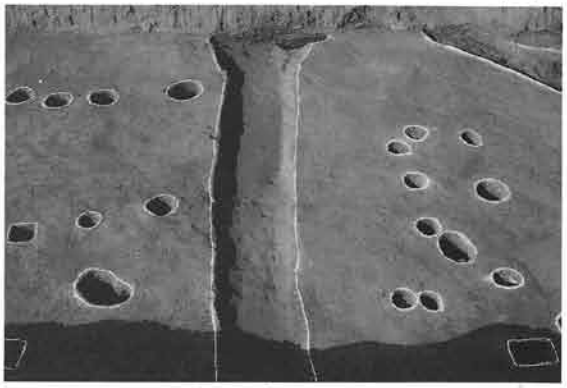


4．B－1号掘立柱建物址（南から）

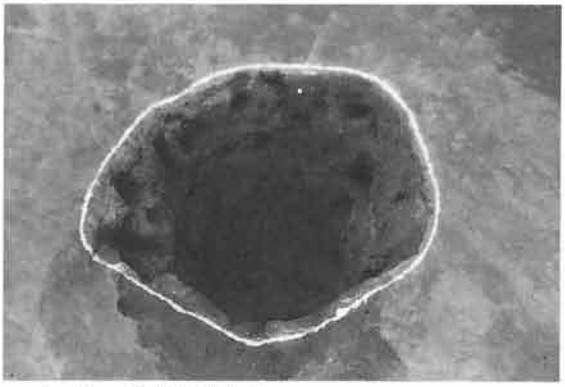


5．I－1号井戸址（南から）

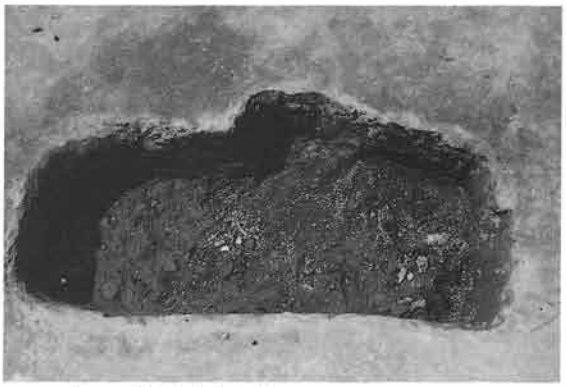
1．W－1号溝址（西から）



2．W－3号溝址（西から）



3．D－1号土坑（東から）



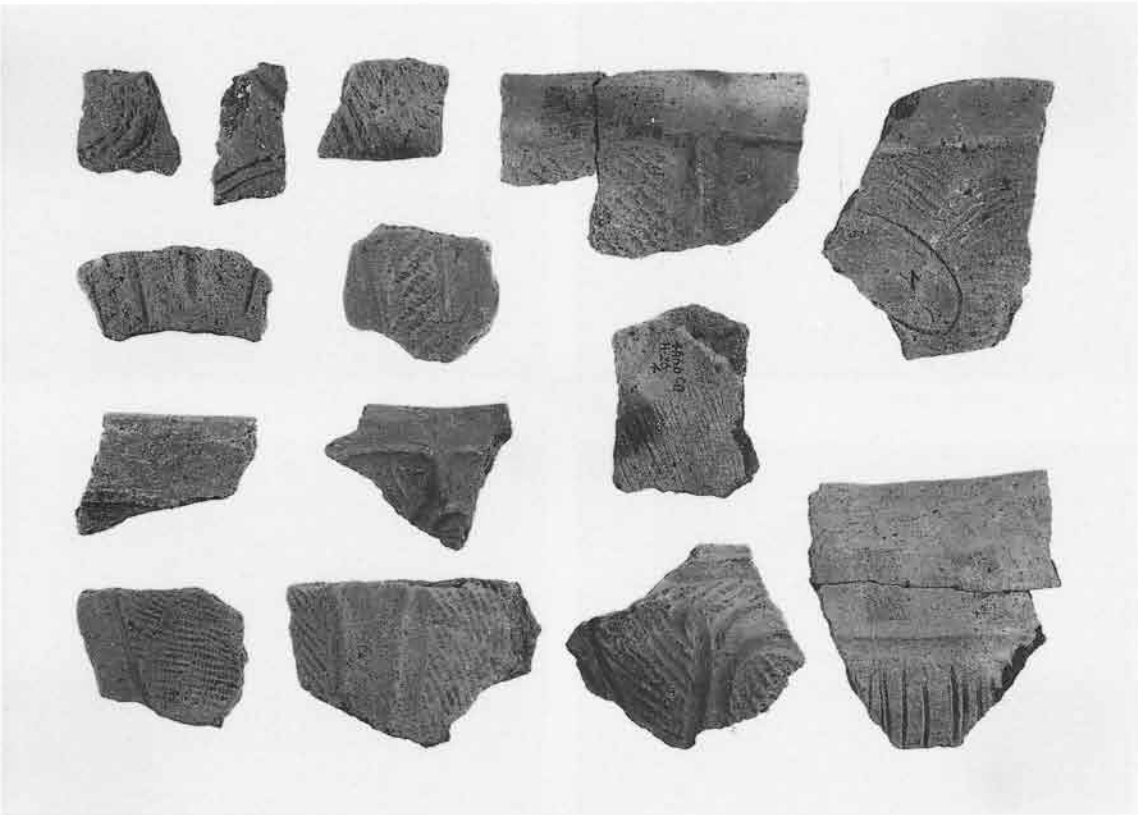
4．D－3号土坑（東から）

5．W－1号溝址とD－5・6・7号土坑

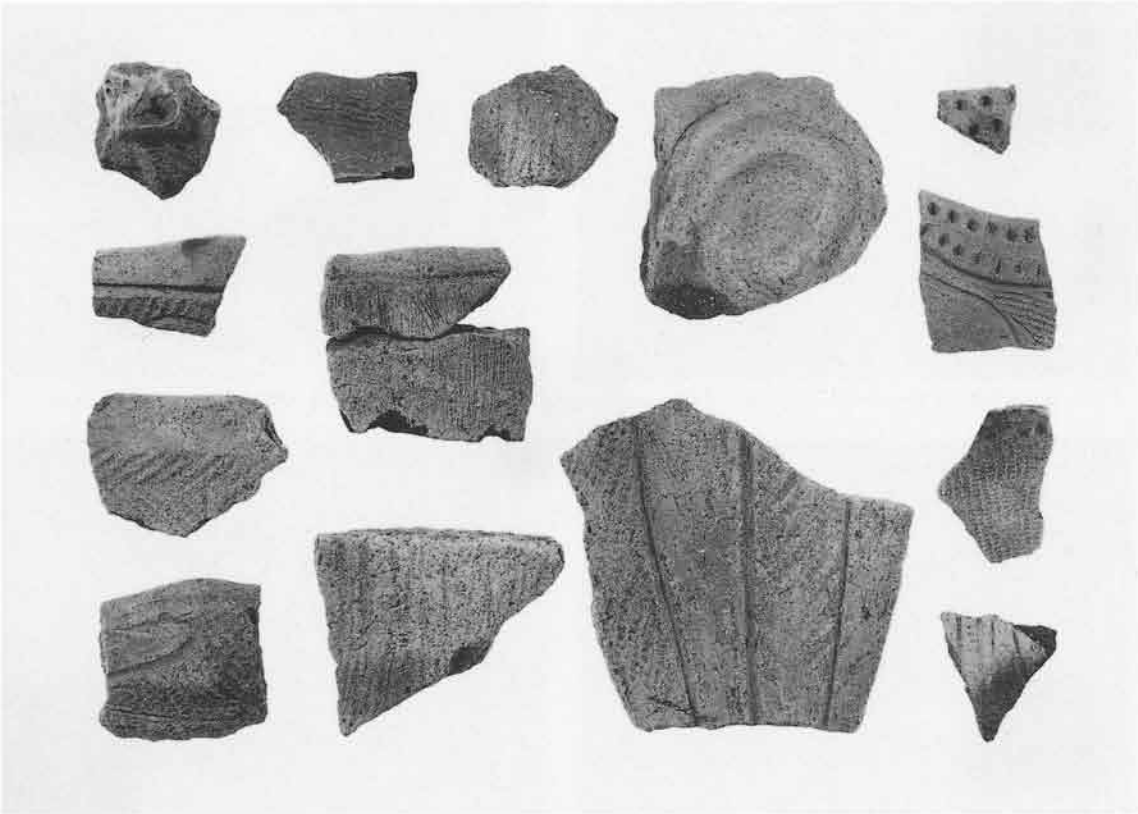
6．D－7号地下式土坑（南から）

7．包含層出土縄文土器

8．発掘を終えて



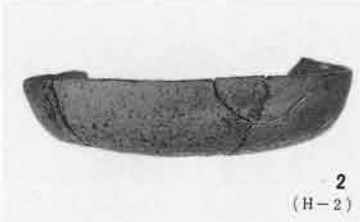
1．包含層出土縄文土器（阿玉台式・加曽利E式）



2．包含層出土縄文土器（加曽利E式・称名寺Ⅰ式）

16
(X47・Y76)

1
(H－1)


2
(H－2)

3
(H－12)

4
(H－2)

5
(H－2)

6
(H－4)

8
(H－4)

7
(H－4)

12
(H－6)

13
(H－6)

9
(H－4)

10
(H－4)

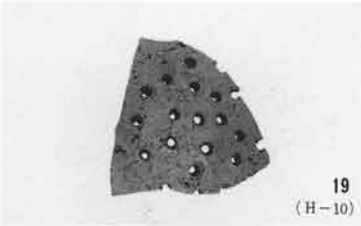
15
(H－6)

16
(H－9)

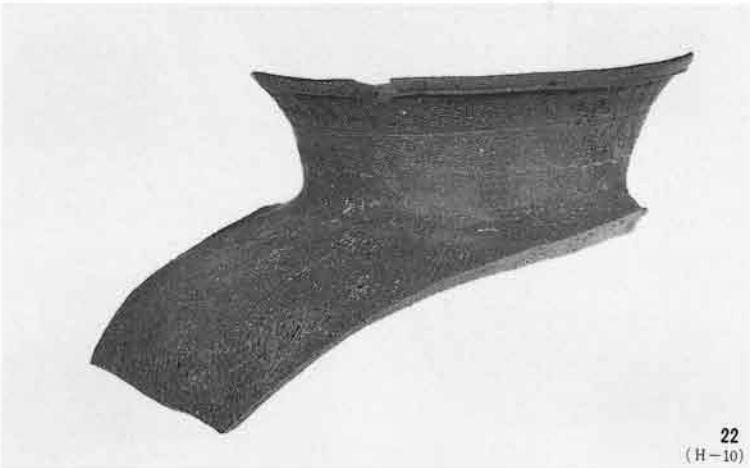
PL. 10

17
(H－9)

18
(H－10)


19
(H－10)

20
(H－10)


22
(H－10)

21
(H－10)

25 (H－11)

26 (H－11)

27
(H－11)

28
(H－11)

29
(H－11)

30
(H－11)

31
(H－11)

33
(H－11)

32
(H−11)

35
(H−12)

36
(H−12)

37
(H−12)

41
(H−12)

42
(H−12)

44
(H−12)

56
(H−12)

45
(H−12)

47
(H−12)

48
(H−12)

49
(H−12)

50
(H−12)

43
(H−12)

51
(H−12)

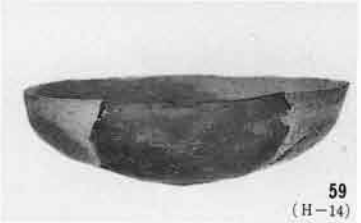
52
(H−12)

53
(H−12)

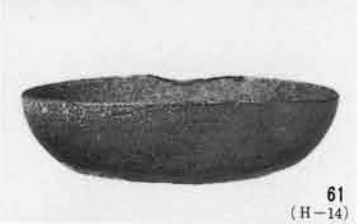
54
(H−12)

57
(H−13)

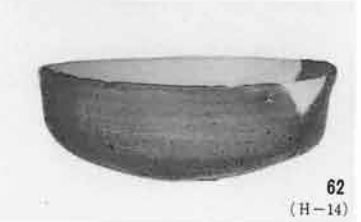
58
(H−14)



59
(H−14)



61
(H−14)



62
(H−14)

67
(H−14)

64
(H−14)

65
(H−14)

66
(H−14)

68
(H−15)

69
(H−15)

70
(H−16)

71
(H−16)

73
(H−17)

77
(H−18)

74
(H−17)

78
(H−18)

76
(H−18)

79
(H−22)

81
(H−22)

84
(H−18)

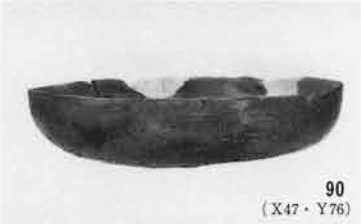
85
(H−24)

86
(H−24)

87
(H−25)

88
(H−27)

89
(D−1)

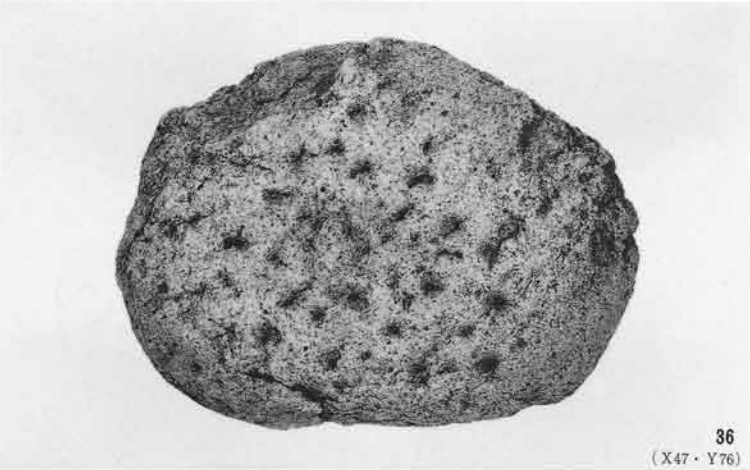

90
(X47・Y76)

91
(X48・Y76)

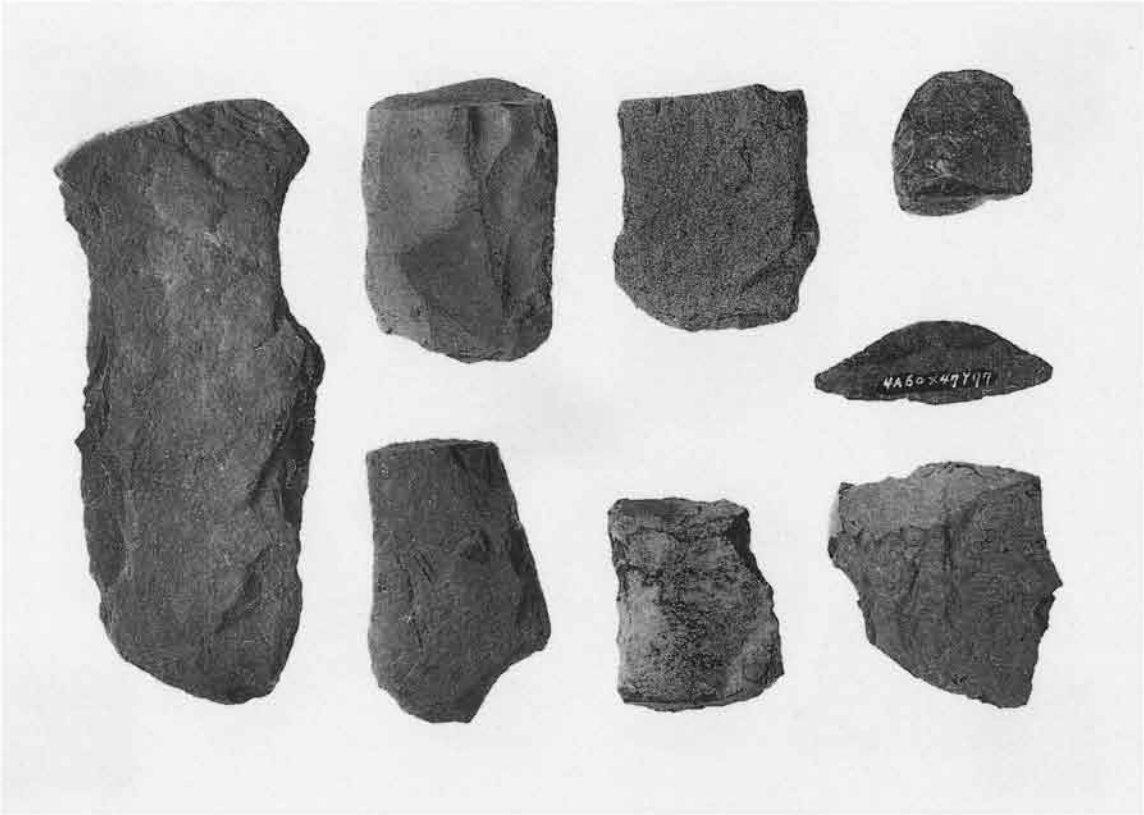
92
(X51・Y75)

93
(X58・Y76)

94
(C区覆土)

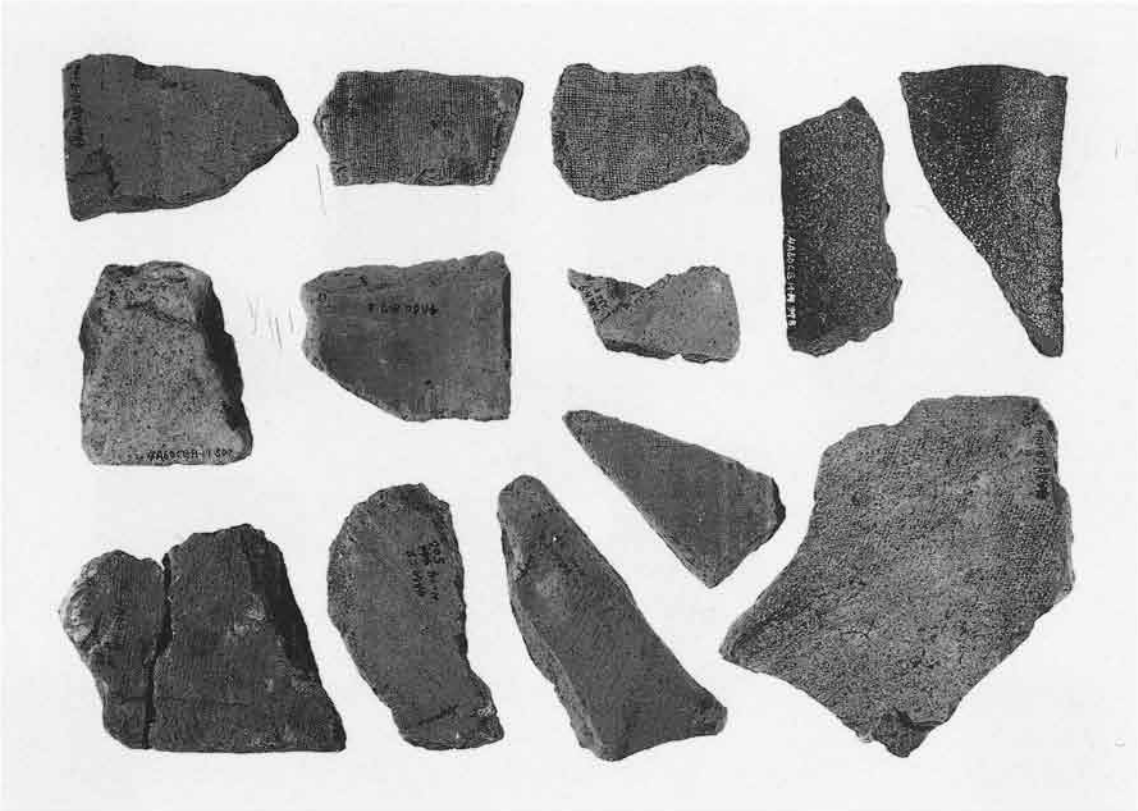

36
(X47・Y76)

石鏃・白玉・紡錘車・剣形品・砥石

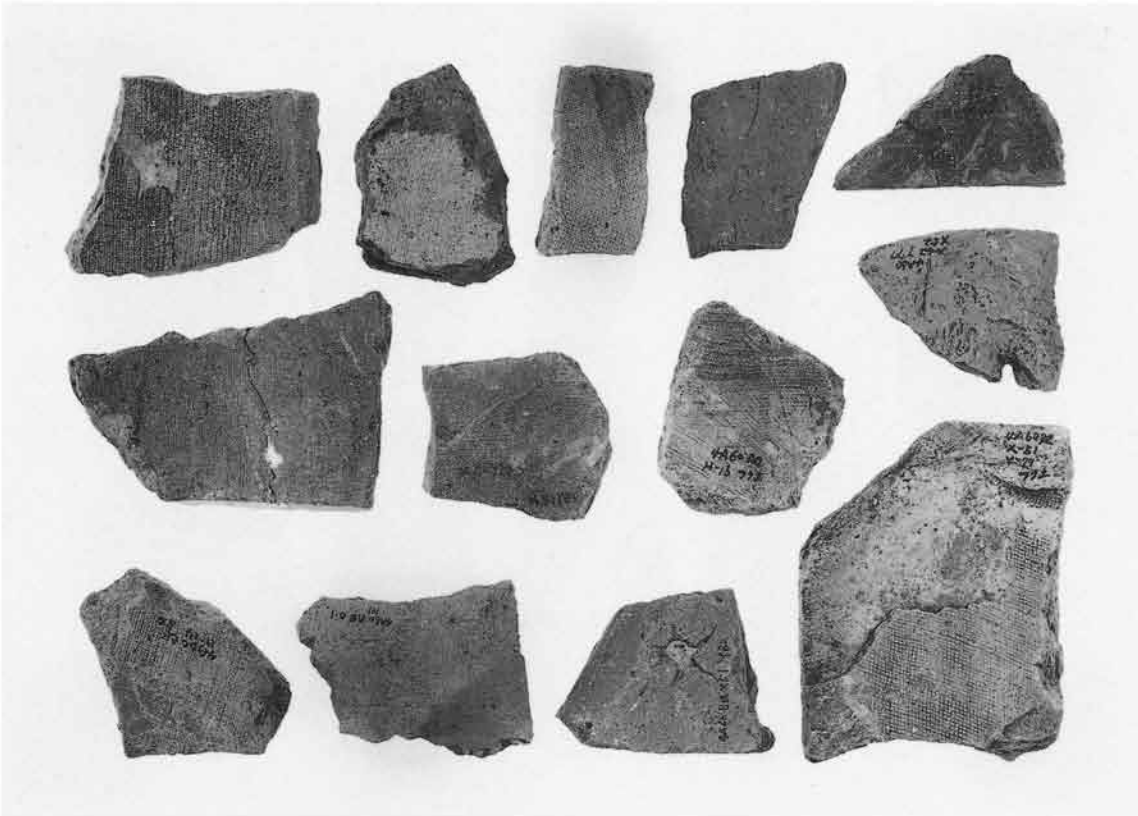


1．打製石斧・削器

2．石皿・敲石・磨石



1．瓦類(1)



2．瓦類(2)

調　査　要　項

遺跡名称	大屋敷遺跡（おおやしきいせき）Ⅰ
遺跡記号	4Ａ60
遺跡所在地	群馬県前橋市総社町大字総社1,937番地ほか
調査期間	平成4年8月3日～平成4年11月30日
調査面積	1,165㎡
開発面積	1,165㎡
調査原因	土地区画整理事業
調査依頼者	前橋市大屋敷地区土地区画整理組合　代表者　大山　栄一
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　有坂　淳
事務局	事務局長　町田　重雄　事務局次長　高橋　正男　管理係員　園部　守央 財政係員　高橋　賢靖　井上　敏夫 庶務担当　須田みずほ　小渕　恵子
調査担当者	狩野　吉弘　大山　知久
調査参加者	石原　義夫　石田　洋子　岩木　賢一　岩木　操　大山トシエ 大田　一郎　岸　フクエ　近藤　俊男　桜井　れい　住谷　文彦 高橋　太一　渡木　秋子　富沢　清八　中野　和人　松本　映 湯浅たま江　湯浅　政夫　湯浅　道子　湯浅　有紀
調査協力	群馬県教育委員会文化財保護課　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 前橋市大屋敷地区土地区画整理組合　前橋市都市計画課 飯島　静男　加部　二生　木津　博明　下城　正　早田　勉 井上測量株式会社　有限会社古環境研究所　たつみ写真スタジオ　宮下工業 （五十音順　敬称略）

大屋敷遺跡Ⅰ

平成5年3月20日　印刷
平成5年3月25日　発行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　0272-31-9531
印刷　株式会社　開文社印刷所